
真剣で私に恋しなさい！～古き皇帝～【永久凍結】

斬滅のザン＆食べられる野草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！〜古き皇帝〜【永久凍結】

【Nコード】

N24560

【作者名】

斬滅のザン&食べられる野草

【あらすじ】

青年は誓う、決してみんなの笑顔を壊させないと……

そんな訳で始まったこの小説、皆さまのご期待に添えない作品ですが、なんとか頑張って書き上げたいです。皆さまの温かいお心で支えられたいと思っています。オリ主のなるべく最強、ハーレムで行きたいです。（無理っぽそうだけど……）

1話（前書き）

注意事項

- ・ 榊原小雪は風間ファミリー
- ・ 椎名京はオリ主にベタ惚れ
- ・ 駄文
- ・ 戦闘描写貧弱
- ・ 原作知識皆無

以上の事を踏まえお読みください。

では本編です。

1話

「・・・・・・・・」

めちやくちや清々しい朝、俺こと直江^{なおえ} 大和^{やまと}は起床。

「・・・・・・・・」

なんだ幻覚か？

起きると腹に重みを感じ、布団をめくると・・・・

「・・・・・・・・ZZZZ・・・・」

^{さかきばら}榊原 ^{こゆき}小雪。2 - F所属で俺と同じ風間ファミリーの一員である彼女^{さかきばら}の寝顔が目の前にあった・・・

「大和、おは・・・・」

そしてこのタイミングでドアが開き少女が入って来る、ドアを半開けでコチラを変な目で見る彼女は小雪改めユキと同じく2 - F所属で風間ファミリーの椎名^{しいな} 京^{みやこ}。幼少期に家庭の事情で痩せ細った彼女^{しいな}があることがきっかけで助けたことでファミリーのとある一員に惚れ現在はファミリーの一員である。

「大和がオオカミになっちゃった・・・・」

「待て京、どう見ても襲われてる側だろ」

「そんなこと置いて早く起きて、朝ご飯できてる」

「置くなよ・・・まあいい起きるか、おいユキ起きろ」

京はそう言つと部屋を後にする今だに腹の上で寝ているユキを強めに揺すり起こす

「・・・女の子は優しくしなきゃダメなんだぞ・・・zzzzz」

「寝言で適切なこと言つな！」

その後ユキを起こし制服に着替えようとすると。今度はロボが入つて来る。

「やあ、お目覚めかい大和」

「クッキーまた人の部屋に勝手に入るな・・・」

「早起きしないお前が悪い。あーあ、布団がグチャグチャだよ」

「朝からロボが小言を言つな」

「なんでそんな事言つんだよ、ボクはオマエのことと思って言ってるんじゃないか！」

激怒するこのロボはクッキー、世界の九鬼財閥が開発した最先端技術の結晶・・・らしい・・・そして

「あまり舐めたことを言っていると切り刻むぞ」

変形する・・・基本卵型の丸っこい形が急にスマートになる

「いちいち変形するな、まったく無駄にハイテクめ」

そのあと洗顔し着替えて、ヤドカリのヤドンとカリンに挨拶をして朝ごはんを食べに食堂に向かうとこの島津寮を営む島津麗子さんと出会う。

「おう、大和ちゃんおはよう」

「おはようございます、相変わらず名前がおり美しいですね」

そう言うとお世辞と分かりつつも気分を良くした麗子さんは朝食にタマゴを追加してくれた。

「あつ、お、おはよう・・・ございます!」

いきなり気合いの入った挨拶をしてくるこの娘は、1-C所属の黛由紀江ゆきえそしてなぜか帯刀している。

そしてみんなで食事をはじめる、2人を除いて。

「キャップと語、またいないね」

「マイスターと語なら、土曜の夜から外出中だよ」

「あの2人、今度はどこ行っただよ・・・」

キャンプこと風間 翔一。^{かざま しゅういち}2・F所属の風間ファミリーのリーダーで放浪癖があるがいつものことなので放置。

「チツ、起きんのが遅えんだよテメエは」

ここで舌打ちをした彼は源 忠勝。^{みなもと ただかつ}通称ゲンさん、同じく2・Fで新ジャンルの健康的な不良を開拓した人、そして見た目に反して優しくツンデレだ

みんなでわいわいとまでは行かないが会話をしながら食事を済ませる、ゲンさんは登校時間になると1人で先に行ってしまった。島津寮の隣の島津家から麗子さんに急かされ1人の学生が出て来る。

「やあ名前負け」

「いきなりケンカ売ってんのかテメエー」

島津 岳人。^{しまづ かくと}2・F所属で麗子さんの息子、筋トレが趣味で自分の筋肉が自慢、女の子にガツつく悪い癖がありエロの権化だ・・・

「冗談だ。今日もかつこいいぞ」

「よせやいいきなりホントのことを」

バカで扱いやすいほど単純。しかしいつにもまして扱いやすい。

「どうだ京。今日の俺様いつもよりイケてるだろ」

「具体的にどこが？」

「ムダマッチョー」

「ムダじゃねー！・・・髪型とか、ビシッて決まってメスホイホイだろ」

「変化なしだね」

「はんつ、俺様はお前が心配だぜ京ちゃんよお」

「なにその不快な上から目線」

「ふかいふかい」

「ユキータちゃちゃ入れんな・・・それより、男の大和でさえ俺様のもてオーラ感じてんのに」

「なに言ってるんのウソに決まってんじゃない、バカかよ」

「ガクトの頭が心配だ。将来大丈夫かな」

「心配だ」

「なんだこの幼馴染たち容赦ねえー！！」

4人で多馬川沿いを歩いて登校。春の日差しが心地いい。

「やー」

今日発売の週刊ジャソプを読みながら歩いて来る男が来る。

「おはよう師岡 もろおか 卓也 たくや。2・F所属趣味マンガやネット」

この片目を髪で隠し如何にも運動が出来無さそうな男。師岡卓也、通称モロが合流する。

「えらく説明的だねえ」

「モロは影薄いから存在確認しないと忘れそうぞ」

「朝一で酷い事言わないでよ！、しかも京に影薄いとか言われたくない！」

「影ウス〜モロ〜」

「ユキもやめてよ！」

そしてガクトとエツチな漫画を読み始める。そんなこんなで川沿いを進むと前方に人だかりが出来ている。

「なんの騒ぎだ？」

見るからに不良な男集団12、3人が屋台と男女2人をグルリと囲んでいる。しかも男達はバットや鉄パイプで武装している。

周りの川神学園生徒は誰も助けようとせず、むしろワクワクした目でみている。

「これは朝から大ピンチ」

「ピンチピンチ」

「楽しそうだねユキ、でも早く止めないと大変な事になっちゃうよコレ」

「そんな事言ってる間に始まった」

その後は地獄だ（不良たちにとって）、2人の男女により関節を外されテトリスの様に組み上げられて行き最後に姉さんが回し蹴りを叩き込みテトリス？を崩す。すでに一種のホラーである。

その崩れた関節が外れた不良が転がる中2人はそこに居た・・・鬼神と武神・・・その圧倒的な強さはまさに鬼神と武神に相応しい。この女性かわかみは川神ももよ百代。武術の世界において知らないモノは居ない川神てっしん鉄心の孫娘でとても強く、風間ファミリーの中で唯一年上だ。そして男性の方は、2-F所属の焰ほむら語かたり。姉さんとチームを組む最強の男、自分の屋台を持ち放課後や昼休みに偶に自営業を営む奴でエレガント・クアットの1人、京の意中の相手。

「あーん、今日もモモ先輩もカタリ君も超かっこいい！」

「この無敵さがたまらない系ー！」

女子はキヤーキヤー騒いでいた。

「さすがモモ先輩、まさに霸王だぜー！」

「カタリの奴もカッコ良過ぎだぜっ！」

「あの2人は最強のコンビだぜー！」

・・・男子もキヤーキヤー騒いでた。

「相変わらずの滅茶苦茶さだ」

「1人1発ずつ蹴り入れてたね」

「そ、そうだな。スゲー蹴りだった」

「ウソ、実はパンチ。ちなみに語は両方」

後半の語と言った辺りはうつとりした表情で最後に素敵とか言うてる。

「京てめえー」

「・・・ガクトでさえ見えて無かったんだね、それにしても京はよく見えたね」

「弓使いは目がいいと相場が決まっているのです。ちなみに、モモ先輩が一番不快な笑い方をした丸顔の男には顔面への強打の他に、

腹部に3発いれてた」

「8発だー京、まだまだ甘いなー」

そう言つて近付いて来る姉さんと屋台を引っ張つて来る語。

「いやっ俺は16発叩きこんだ」

「じゅ、16発・・・凄過ぎるぜ語。こんな奴が幼馴染なんて、俺様自信無くしそうだぜ」

「そんなのドブにすてなよ、ムリだから」

「ムリムリ」

「ふふふ、カワイイなさつき1年、見たか顔を真っ赤にして」

満足そうな顔で自慢する。先程の女子の集団でいい収穫があったらしい。

「見たかじゃねえよ、モモ先輩！」

「なん？」

「いつも可愛い子もって行きすぎ！、俺にも回してくれよ」

「嫌だね、欲しけりや自分で調達すればいいだろ。まあ可愛ければ略奪するがな、ふふふ」

不敵な笑みを浮かべる姉さんに、涙を流すガクト。

「美人の女好きって超もつたいねえよ・・・」

「おいおい私は根っからの女好きってわけじゃないんだぞガクト。ただ周りの男が語以外魅力無くちゃ。女の子にもちよっかい出すさ」

「その割に俺へのちよっかい出した回数少なくてね？」

「なんだ構って欲しいのか？」

姉さんの目が光り、語の胸に顔を押し当てる。

「・・・これはー・・・甘えてると言うのでは？」

「いいんだこれで、ふふふ」

姉さんは気持ち良さそうに顔を押し当てている。

「ふふ、語。好き」

「京、唐突過ぎて意味が不明だ」

「えへへー、カタリー」

「え？、ユキまで。なして？」

京、ユキも語に抱き付き一種のカオスが出来上がる。

「そろそろ行かないと遅刻になるぞ」

「くそーなんでだー！ー！」

「はは、いつもと変わんないね」

「3人共、早くしないと遅刻だぞ」

そして俺達は登校して行くと多馬大橋に到着。渡った反対側に行けば川神学園がある。この橋、別名変態の橋と言われている。

「みんなー！おはよー！ー！ー！」

元氣な挨拶と共に現れたのは川神 一子。かずこ趣味は体を鍛えること、好きな食べ物は肉と言う現代女子としては異形の女の子。

「おはよう」

「や」

「ワン子おはよ」

「おうワン子」

「おはようワン子」

「川沿いに大勢伸びてたけど、カタリとお姉様？」

どうやら川沿いの惨状を見て来たらしい。

「ああ、つまらない相手だったな」

「もっと骨の位置をずらすべきだったな」

「お前は鬼か！」

「うゝんそうじゃね？」

「否定しなよ！」

「あはっ、やっぱり凄いや」

「そう言えばワン子今日はタイヤ2つか？」

「うん、その分川沿いに東京都まで行ってきたよ」

「昨日は静岡まで行ったのに、元気だね・・・」

「アタシはカタリやお姉様に比べるとまだまだだから」

「大丈夫だ努力は人を裏切らない、日々精進これ強者の基本」

語はワン子の頭を撫でながら笑顔で言う。後ろでは姉さんがなぜか真面目な顔で2人を見ている。

「にえへへへ」

ワン子が既に骨抜き状態だ。

「ちょうちょ」

「待てユキ！、蝶蝶を追いかけて道路に出るな！」

ユキは相変わらず自由に蝶蝶を追いかけて道路に出ようとするのをワンの頭を撫でていた語が即座に襟を捕まえ持ち上げる。

「うーカタリのケチー」

「あぶねー事すんなつの」

ふうーとため息をつく語。そのまま俺達とワン子は普通に歩いて登校する・・・タイヤを引きずりながら。

「歩く時くらいトレーニングよそうぜ」

「アタシはいかなる時でも鍛える事を忘れないのサ」

「タイヤを引っ張る娘と歩くこっちが恥ずかしい」

「そうだぞー」

「いや、語も変わんねーから」

「この内気、だからアンタはモロなのよ」

「そうだぞ・・・えーと・・・師岡卓也」

「師岡は生まれついでの名前なんだよ！、否定しないでよ！。て言うかカタリまで存在確認！？」

「すまん、中々どうして思い出せんかった」

「内気で影薄で陰気なモロ」

「酷いよ！、それに洒落にならないからユキもやめてよ！」

「こうして鍛えていれば、強くなるだけでなく。体もお姉様見たいにバイーンとなるわけよ！」

無い胸を突き出しどや顔をする。

「スタイルでも並ぼうと？」

「うん、何をおいても、お姉様はアタシの目標。とりあえずお昼に牛乳飲むんだ！」

「それでも無理は無理だろ」

そう言つて姉さんを見る。しなやかに伸びた脚、無駄なく引き締まった体に激しく自己主張をする胸とキュツと括れたウエスト、流石学園最高の美女。同時に学園最強で無ければ言い寄る男も星の数居るんだろうな。

「やっぱりワン子には無理だ」

「なんですって！。いつか巨乳になって”おいおいお前の体は果物屋か”とか言わせてやるわっ！」

「あははははは！」

「ナイスギャグ、合格」

京が10点と書かれたプラカードを出す。

「おい京に受けたぞ、はははは」

「バカ共笑うなー！、真剣^{マシ}なのよ！」

「いやっ、今のは笑えるな。はははは！」

「なっ何よー・・・」

笑い続ける俺達にワン子はだんだんと声に覇気が無くなり泣きが入ってくる。

「よーしよし、愛い奴めー」

「愛い奴めー」

語とユキが慰めに入り頭を撫でると即座に復活。

「余りワン子をいじめるな、シメルぞ」

「受けて立つ、ガクトが」

「なんで俺様に回って来るんだよ」

語がガクト素早く近付く。

「拳で語るパンチ！」

「ユキちゃんキツク」

「妹キツク！」

「姉パンチ！」

「いつてええええ！」

語のアップパー、ユキのハイキック、ワンのローキック、姉さんの中段突きの流れる様なコンボが見事に繋がりがクトは倒れ込む。

「モテるじゃんガクト」

……そんな騒がしい朝の平凡な登校風景。

1話（後書き）

試作品をを少し変えてみただけですが感想よろしくお願いします。

ちなみに主人公の名前を変更。

主人公設定 修正（2月14日）（前書き）

主人公の設定やバックストーリーです。

主人公設定 修正（2月14日）

名前：焰ほむら語かたり

性別：男 年齢：16歳

身長：180センチ

血液型：A

誕生日：10月26日 さそり座

一人称：俺

あだ名：カタリ

武器：主に拳、その他も使用可

職業：川神学園2-F、寮住まい 1階、屋台経営

好きな食べ物：日本食

好きな飲み物：お茶

好きな物：笑顔

趣味：料理、睡眠、料理レシピの考案こうあん

特技：料理、運動、笑顔を作る

大切な物：仲間、料理器具、信念、人の笑顔

苦手な物：勉強の方法、泣いた人

尊敬する人：昔の料理人、料理の起源を思いついた人類

髪型・容姿・体型：BLEACH（ブリーチ）の黒崎一護くろさき いちごの髪を茶髪にして長くした感じ。容姿は中性的だがカッコいい系。体格はほっそりとした体だけど筋肉はしっかり付いた痩せマッチョ。

「キサマツ！！、摘み食いは許さん！」

幼馴染の中で料理担当。風間ファミリーの最強その2。生まれは日本、幼少の頃に5年程ドイツのリューベックで生活。その頃にクリスと知り合う。

武術は殆どが我流で京の事件でただ一人京の味方だった男。その事件で百代に目を付けられ組み手の相手に任命される（ちなみに川神院の門下生では無い）。そこから毎日組み手と自主トレをして今の力を手に入れる。言わば【究極の努力の人】。

小学校の高学年後半に両親が不慮の事故で死亡（若干トラウマあり）、現在一人身で屋台で生計を立てている。

屋台『語り屋』は語の気分次第で開く気ままな店。だがその料理の味は雑誌の隠れ名店に載るほどの腕前。

偶に昼休みに食堂で自分の料理を出す。その日の食堂は語の気まま

定食を求め大混雑する。予約可。

ファミリーの中でも2番目に常識人。陽気で人当たりも良く優しい好青年でエレガンテ・クアットの一人でもある。なので女子の中でも人気が高い、男子でも尊敬する人の中に大抵入っている。

その気ままな性格故に翔一並みに放浪癖がある（食材探しのため）

頭が悪くはないが勉強の仕方が分からず勉強の効率が悪い、その為毎回平均以下をとってしまう。

偶にバイトを雇う事がありそのバイト代はかなり高額で飯付きなので良くバイトの申し込みがある、よくバイトを頼む百代を扱き使う姿が多々目撃されている。

主人公設定 修正（2月14日）（後書き）

読者の希望によりヒロイン決定！！？？なるかも？

川神 百代・川神 一子・椎名 京・黛 由紀江・クリステイア
ネ・フリードリヒ（Christiane Friedrich）
榊原 小雪

小笠原 千花・甘粕 真与・小島 梅子

忍足 あずみ・マルギッテ・エーベルバッハ（Margit Erb
bach）・不死川 心

板垣三姉妹・大和田 伊予・武蔵 小杉・矢場 弓子・九鬼 揚羽

2話（前書き）

2話目登校・・・投稿!!!!!!

2話

みんなで駄弁りながら登校する。学校に着くと直ぐモモ先輩に呼ばれ着いて行く。

「……………」

現在校舎の裏手でモモ先輩と2人で向き合う状態になっている。

「モモ先輩、何こんな所来て？」

「……カタリ、お前ワン子に武の才能が無いのを知ってあんな事言ったのか？」

少しの怒気を孕んだ声でモモ先輩は言う。

「……ああ、知ってる」

「ならなんで言った」

「俺は1つだけの未来が嫌いだ、すべて1本のレールだけなんて悲しすぎる、だからワン子にもいろんな未来があることを知って欲しい」

「……………」

「でもワン子が諦めない限り、俺はワン子の夢を応援するつもりだ。その先に何があっても俺達はワン子の支えにならなくちゃいけない・

・・・いやなるんだ・・・そうでしょモモ先輩」

モモ先輩に笑顔を向けるとモモ先輩は泣きそうな表情で笑っていた。

「・・・ああ」

その後はモモ先輩と別れ教室に向かう。既にチャイムは鳴っており、廊下は静かだった。

「出欠終わってるかね」

歩きながらそんな呑気なことを考え自分の教室が見えて来る。するとビシッと鞭の音が聞こえる。

「うわゝ、こりゃヤベーな」

「教育的指導!!」

「ギヤアアア!! 痛つてえええええ!!!!」

教室からそんな声が聞こえる。

「おはようございます」

「焰、出欠は取り終えた、何か理由はあるか？」

陽気に入るとヨンパチ、福本 一郎が痛みに悶えた姿。鞭を持った小島 梅子の姿が目に入る。

「え、川神先輩とちよつと話をしました」

「そうか、だが遅刻は遅刻だ罰を受けてもらう」

鞭が床に叩きつけられビシッと教室に鳴り響く。

「ウメ先生ちよつと良いですか」

俺は先生を教室の外に連れ出す。

3分後また教室のドアを開け教室に入る、頬を赤くしたウメ先生と共に。

「んじゃ席に戻ります」

「ああ、今度から遅刻するなよ」

俺は自分の席に鞆をフックに引っ掛け黒板に目を向ける。

「んんつ、今週の伝達事項を伝える」

気を取り直したウメ先生が連絡事項を伝えHRを終え教室を後にする。

「ふいいいゝ、セーフ」

「おい龍也、ウメ先生に何したんだよ？」

「そうよ何で罰受けずに済んだのよ？」

「ん？、あゝ、アレね。いや交渉しただけだよ・・強引に」

「何だか引つ掛かる言い方ね」

「ああ、俺も何だかその先は聞きたくない」

その後は普通に授業を受け昼休みになる。

「うおおおお！！！！開幕ダッシュ！！！」

チャイムが鳴るや否や教室を猛スピードで出て行くガクト達食堂組。

「ねー早く出なさいよー」

斯く言う俺もワン子に飯をせがまれる。

「待てしないとやらんぞ」

「わん」

「そこで京が反応するの!？」

「よーこーせー」

「噛むなバカ者」

ガジガジと俺の腕に噛みつくワン子をどうにか振りほどき鞆を開け大和とワン子用の弁当箱を出す。

「おら持つてけ、ほら大和」

「やつほーい、おべんとおべんとー」

「さんきゅー」

「語には私をあげる」

「いらん、さつさと飯を食え」

「振られた、おいしい」

「おしくない」

「じゃあ私のオカズあげるのサ」

「京カスタムなぞいらぬわ」

教室に残る組はのんびりと机を寄せランチタイム。みんな思い思いの昼休みを楽しむ。

「何か面白いニュースやらないかしら？」

テレビに視線を向けワン子が2杯目の牛乳を飲んでいると……

「昨日の午後7時頃、埼玉県深谷市の飲食店で無銭飲食した男が居合わせた男子学生によって取り押さえられました。男を取り押さえた男子学生は神奈川県川崎市在住の風間翔一さんで、限定メニューを先に注文されて腹が立っていたので本気で追いかけたということです……」

「ぶはっ!!」

「妙技ムーンウォーク」

「うばっ」

ワン子が盛大に牛乳を噴出した、それを京が華麗なステップで避けたが、ユキに牛乳が掛かりビショビショになる。

「あ。ゴメン、噴いちゃったわ」

「損害軽微。それより」

「ユキが被害甚大だな」

「ごめんユキ」

ワン子はユキを連れて教室を出て行く。

「キャップだったな」

「・・・他にいないよね・・・」

「今度はテレビかよ、はあ」

大和が頭を悩ませる様に顔を手で隠す。

「続いてのニュースです。昨日の午後7時頃に銀行強盗をまたしてもたまたま居合わせた男子学生が取り押さえました。警察が駆け付けた時、既に犯人グループは関節を外され逆さまに吊るされていたらしく

。その学生は神奈川県在住の焰語さんで・・・」

「」「」「ぶはっ」「」

何でかみんながいきなり噴出した。

「おいっ！」

「ん、どうした？」

「何しやっちゃってんだよ!？」

「いや、なんか悪いことしてたからちよっとお仕置きをな」

「キャップも大概だ、お前も大概だ！」

「いやいや、矢本こそ何言ってるんだよ。悪は見逃せねえだろ倒さずしてなにする」

「大和だ！、そう言う問題じゃない・・・はあくもついいよ」

「そんな語も好き」

「なんだよ別に良いじゃんか」

そんな俺の意見も聞かずに大和は俺の話を無視して飯を食べる。

そんなこんなで午後もきちんとして授業を受け、帰りのHRを終え放課後。

「部活やるつか」

「いいね。毎日毎日熱心だぜ俺達も」

「んじゃ帰^けえろうぜ」

「だな」

俺達の部活は帰宅部、帰ることが主な内容だ。

「私は今日弓道場行くから」

京は一人弓道場に向かうためここで別れる。

「俺はこの本D組の奴に返してくる」

「D組かあ、あそこカワイイ子いねえんだよな」

「まあ相手男だしな」

「うげっ、じゅあ俺様はテニスコートで目のほよ・・・」

「てい」

「ぎゃああああー!!」

ユキの必殺「目潰しビクトリー（V）」が炸裂する。

「っ、てつめユキなんてことしやがる!」

「モモ姉がガクトが変な事言ったらやれって」

「モモ先輩なんてモン教えてんだよ」

そして大和の用件が終わり5人で帰路につく。

「じゃあな。俺様はこれからジムで鋼の体作りだ」

「僕はゲーム、また明日」

「じゃあなー」

「ばいばーい」

「さいならー、俺は借りてきた小説でも読むかな」

ガクト、モロと別れ島津遼に入る。

「そつだ夏に向けてバイトしないと」

「お、んじゃ俺ん所でやるか？」

「そつだなお願いするかも」

「僕もー」

「ユキもな、OK」

ユキは二階に上がっていき部屋で紙芝居を作るらしく画用紙を持っていた。

「それにしてもキャップ今頃どこに居るんだろうな」

「キャップは俺と同じだ自由人だからな」

大和が自分の部屋のドアノブを回し入る。

「おー、お帰り大和、語ー」

「……………」

……すでにキャップは寮に帰って来ていた。大和の部屋で呑気にネギラーメンを食っていた。

「いやあ、警察から解放されるの遅くなつてさ。ほらこれお土産」

大和にネギせんべい、俺に生ネギを渡された。

「おおお、深谷ネギじゃん、コレラーメンに使つと上手いんだよねー」

「なんで埼玉行つたんだ？」

「バイト先の人が埼玉出身で。ネギとか牛とかの特産品の話を楽しそうにするんだよねー。で、ふと食いたくなって土日使つてフラツと風のように旅に出たつてわけ」

「旅か。好きだねキャンプも」

「俺も行きたかつたなー」

「お前は山梨行つただろ」

「いいじゃん旅はタイミングだぜ」

「おおお、分かつてんじゃん語。つといけねえバイトの時間だ。お前にラーメンの残りやるよ、それじゃな！」

キャンプは大量のネギの入った袋をもつて大和の部屋を後にする。

「あーあ。もう部屋がラーメンの匂いで大変な事に」

「どんまい、んじゃ俺も部屋にもどるわ」

「ああ」

俺は大和の部屋を尻目に自分の部屋に向かう。

「って汁しか残ってねーー！！」

という声が大和の部屋の方から聞こえた。

「平和平和」

朝のように雑談をしながら夕食後は風呂に入る。だが二階に女子用の一階には男子用の風呂があり間違いなど起こるわけも・・・

「さーてお風呂お風呂」

「何しに来たんだ京」

「あ、ごめん間違えた」

「俺が入ったの知ってて言うな。まあ上しか脱いでないからいいけどな」

「これはこれでいい」

顔を赤く染めうつとりと俺を視姦^{しかん}する京。

「ええい、出て行け」

我慢できず京を追い出す。

「ああん、乱暴。でもそんなところも好き」

「はいはい」

女子は行動自由なのに男子は女子の許可なく二階に上がれば市中引き回しの上、退学らしい。過去に前例があったと大和が言ってた。

「今日も平和その物だな」

風呂につかりながらそう1人こちる。

この日々が更に賑やかに、派手になるとは今の俺には考えられなかった……

世界は回る運命と言う名のレールに乗りながら……

「語」

「・・・入って来るな!!」

「背中流してあげるのサ」

「いらんわ!、早く出て行け!」

「まずは前から」

「背中じゃねー!?!」

「これも運命ですか神様・・・・・・・・それなら死ね神・・・・・・・・」

3話（前書き）

更新が遅れました！！

自分のPCが欲しいぜ・・・

3話

「うっ、・・・はっ」

なんだか黒髪の男の刀での攻撃をオレンジ色の髪の俺が防いだ、そんな夢を見た気がした。
そして布団から起き上がる。

「・・・京、何してる」

目の前で京がこっそり俺の部屋に忍び込んでいる所を目撃する。

「おいしい」

「マジで何する気だった!!」

「夫婦の営み」

「夫婦じゃない、それに営みは相手の了承を得てからするもんだ!」

「それじゃあ、起こしに来た」

「なにその選択肢がもう1つあったからそっち見たいな言い方なんだよ!」

そんな起床時の光景がある・・・

「ほら、マイスター起きなよ」

「やだ！もう朝なんて騙されないぞう！」

「なんだよ、ちょっとは人の言う事聞けよお前お仕置きするぞ」

「何イ、お仕置きだと？」

「そつだよ。僕の言う事を聞かないお前が悪いんだ」

「ま、また電気系の攻撃か？」

「今度は竜巻系だ。運が悪いと大出血だぞ」

「うお、分かった起きる、起きるってば」

ちなみにこれも朝の光景に入る。キャップも帰ってきたらきたで大変で。

ユキを起こしに二階に上がる。（麗子さんの許可あり）

「ユッキー、朝だぞー」

まずはノックをして反応確認・・・応答なし。

「京、先遣隊として中に入れ」

「了解」

京はドアを開け中を確認すると異常は無いらしくOKサインがでる。

「ユキー入るぞー・・・マジで入るぞー・・・くっ、入るか」

いざと言わんばかりに覚悟を決め入る。

「ユーキーっぐあああああ。またか、またなのか！！。なんでその格好で寝てんだあ！！！」

即座に部屋を出る。入るとユキはなぜか裸Tシャツで布団の上に丸まった形で寝ていた。

「京、おめえ・・・・・・・・はあゝ、後まかせる」

俺は怒る気も失せすべてを京に任せ食堂へ向かう。

その後、京とユキが降りて来て朝食をみんなで取り登校。

「ふあーあ。そこの川辺で昼寝していかね？」

「確かに心地よい日差しは好きだ」

「僕も好き」

「私は語が好き」

「ユキは純粹だな」

ユキの頭を撫でながら京の言葉を無視する。

「ぬぬ」

「そんじゃ、たまにはいいだろ？」

「わーいお昼寝だ」

「キャンプのはそんなのバツカリでしょ。ユキはすぐ影響されるんだからだめだよ」

「なんだ誰もサボリフレンドはいねーの？」

「今日は1時間目が体育で、俺様見せ場だしな」

「どこかに同志は・・・誰か、笛持ってきてる？」

「当然。ブリーダーには必需品」

ユキと俺以外のみんなが持つ笛。これを吹くと・・・

「呼んだー！？ていうか、おはよー！」

こんな感じで笛を吹くと来るように面白がつて調教した結果がこれ。ワン子の特技？の一つでもある。

「ようワン子。おはよう」

「あら、変な意味で有名人じゃない」

「俺が？そうなの？」

「アンタのせいで牛乳少し無駄になったのよ、この！」

「てい」

「いきなり理不尽な理由で蹴るとかどんな教育？、しかもユキまで」

「んじゃ俺もつと、そりゃ！」

「馬鹿野郎！、お前が蹴ったら吹っ飛ぶ・・・いつてええ！！」

キャップは俺の足払いで宙を2～3回転すると地面に倒れ込む。

「ふむ、今ので殴ったら飛んだか？」

「恐ろしい事考えるな！」

「ホント鬼だよね」

「川神院的教育は、肉体言語で語るのさ。それより、ちゃんと来たんだから、サ、ね？」

「キャラメルやるよ」

「マシユマ口食べる？」

大和がポケットからキャラメルを取り出す、ユキは常備のマシユマ口をワン子に差し出す。

「それじゃ栄養足りないわよ！肉的なものを出しなさいよ。あ、ユキのは食べるわ」

「俺にだけ肉要求すんなよ」

「英語で言って見てくれ」

「・・・いんぐりっしゅ？」

ワン子には超難関な問題をキャップが言う。

「ぷ・・・プリーズ ミート イン マイ マウス フロム モーニング」

「お前馬鹿だよなあ。恥ずかしいヤツだ」

「馬鹿っぽいなあ」

「実に馬鹿」

「・・・な、何だよ・・・イジめるために呼んだの？」

泣きが入り始めるワン子。

「うりゃ」

俺は昼に屋台で使う筈だったチャーシューをワン子の口に突っ込む。

「もぐもぐ」

「大き過ぎだよ、って言うかお構いなしに入れた瞬間に食べ始めるし！」

「ガクト、『I am smarter than you』、これ訳してみる」

俺はガクトにも試してみた。ちなみに英文の意味はこうだ・・・【私はあなたより賢いです】って意味になる。

「えっと・・・私は・・・貴方よりも・・・サバイバー・・・ではない・・・」

「お前も大概馬鹿だな」

「ぐっ」

「あはは、ガクトも言えないじゃない」

「既に食べ終えてるし！」

「みんな揃ってるな、どうした道端で？」

するとモモ先輩も合流する。

「皆揃っちゃったし、登校するか」

「よし行くぞ」

「大和、号令はキャップたる俺の役目だ。さあ行くぜ。狂乱麗舞、風間ファミリー出陣だ」

仲間が9人揃って河原を歩いて行く。傍から見れば幼馴染の集団だが、普通とは一味も二味も・・・九味も違う俺達風間ファミリー。

そのまま進んで行くと変態橋の上で誰かがこっち見ている。

「お姉様目当てじゃないかしら」

「また挑戦者・・・か」

「面白い。昨日のヤツらじゃつまらなかったんだ」

「そらそつだよ。昨日のなんてただの烏合の衆なんだから、成長にも繋がらなかったし」

昨日とは違い拳法家風の男がたった一人立っていた。となるとモモ先輩目当てかな？

「・・・貴方が川神百代さん？」

「いかにも」

割愛・・・・・・・・・・のはずが。

「では焰語と言う男に聞き覚えはないか？」

まさかの俺への挑戦者だった。

「んあ？、俺だ。俺が焰語だ」

「ん？、そうでしたか。高名な川神院の鉄心先生にお相手おうとしました所、貴方に勝てないと勝負を受けられないと」

「は・・・・え・・・・え何？、俺が？」

「ああ、そう聞いたが」

そんなのに聞き覚えが無いが何故？

「お相手願えるだろうか？」

「え、ええ。わかりました、じゃあ今すぐにしましょうか」

河原に移動・・・・・・・・

「では尋常に・・・はじめ!!」

立会人のモモ先輩の掛け声と共に仕合いが始まる。橋の方では観客が騒いでるようだ。

「キョエエエエエエ」

相手の怪鳥の様な雄叫びと共に構えを取る・・・なぜだか見た事ある構えだな、例えるなら荒ぶる鷹のポーズ!・・・的な格好だ。

「はっ」

「ばぎゃぶっ」

一瞬・・・相手を右の裏拳を右頬に当てた、相手は始め立っていた場所から後方30メートル程まで吹き飛ばし相手は完全に気絶した。俺は相手にピツと一礼する、今回見たいに手順を踏んだ挑戦者には最大の礼を尽くすのは川神院での教えだ。

「語また腕を上げたな。私と死合おうじゃないか」

「モモ先輩ここじゃダメだよ、また今度ね」

「むうう」

「可愛く唸ってもダメだって、サッサとガッコ行くよ。っとその前に」

ケータイで川神院に連絡をいれ挑戦者の回収をお願いし、俺はみんなの居るところに移動する。

「何で今回は俺なんだ・・・今度学長に聞いてみるかな」

「観客がキャップに気を取られてる間に終わったね」

「待たせたな」

「今日も超絶カッコ良かった、私と戯れて」

「んじゃガツコ行くか」(無視)

「ああん、連れない。でもそんな所も好き」

「おおおお疲れさまですアニキ」

「ガクト腰が引けてるよ」

そんな挑戦者騒ぎも収まりまた変態の橋をフルメンバーで渡って行く。

「とあつ。てつ、やー！健全な肉体に健全な精神が宿ると嬉しい！」

ワンはさっきので影響を受けたようでシャドーしながら歩いている。

「語、今日基地よってかない？」

「了解」

「語、おととい買ったCD貸してくれない？」

「了解」

「語、私達付き合わない？」

「唐突だなホント」

「ち」

「脈絡がなさすぎるよ」

「引っかけても意味ないだろ京」

姉さんにグリグリされつつも泣き真似をする京

「泣き真似って怖いよなー」（棒読み）

「見抜かれた・・・」

「つれないなあ語い。京。ここはひとつ、私と火遊びしてみないか？」

「おお、横から女を掠め取るつもりだ」

「こんなカワイイお前を放っておく男の事なんて忘れさせてやるぞ」

「モモ先輩はかっこいい。富士山ぐらいかっこいい」

「うんうん、日本の心だな」

「でもこの語のカッコ良さはエベレスト」

ポツと口で言いながらイヤンイヤンしている。多分あれは妄想の世界に旅立った顔だ。

「・・・これからお前のあだ名はエベレストな」

「うっさいぞMr.富士」

言うが早いか速攻で逃げる。

「あ、逃げたわ」

「アハハハハ、待て〜！」

「待つかよ富士〜」

「あの二人の追いかけてこは怖すぎるね」

「ガンバレー語ー」

「応援だけかよ!!」

あの地獄の追いかけてこも無事終幕（犠牲として俺の財布の諭吉さん）。そして教室に到着しHR。

「今週金曜日。このクラスに転校してくる生徒がいる。川神の姉妹都市、ドイツのリューベックからな」

梅先生の言葉に教室がざわめくが

「静粛に!!」

鞭が床にピシャーンで静かになる

「質問は挙手して行うように。何かあるか？」

「女子ですか？美人ですか？胸とかありますか？」

「男子ですか？イケメンとか、お金持ちですか？」

即物的欲望の赴くままについて感じの質問。

「小島先生、どちらなのでしょう？」

「ひ・み・つ。なんてな」

謎の冗談でHRは終わった。

「ったくあの先生は時々謎の冗談を言うから怖いぜ」

「表情変わらないから余計にね」

「おいおい。時代は転入生の話題だろ！」

「こういうケースってギャルゲーだと美人だよ」

「すっげえボインの姉ちゃんだったらどうするよ」

「しょーもな」

「おいおい、何だよカタリは興味ゼロかよ」

「俺、昔住んでたからな。」

「あつちにカワイイ子とか居たのか？」

「ん？、さあなっ（そう言えば元気してっかな〜クリス）」

「語、今ここに居ない女の事考えてたでしょ」

「ぬお京、べ、別に考えてねえよ」

「ふーん」

京の探る様な視線が痛い。なんて直感してんだよ。

「リユーベックとはまた粹な所から来るよね。バルト海に臨む北の方の港湾都市だよあそこは塩漬けニシンとか魚料理が有名だよね」

プリン片手に熊飼^{くまがい} 満^{みづる}。いつも何か口に入っている肥満気味の体型で体型からも分かるように結構なグルメで俺の店の常連でもある。温厚な性格でほのぼのとした性格故にクラスのみんなからも慕われている。あだ名はクマもしくはクマちゃん。

「クマちゃんプリン食べてるゝいいなゝ」

「はいはい買ってやるから今は我慢な」

「おお、カタリが奢ってくれるゝいえゝい」

「おいおいクマちゃん。プリン食うとか実にエロいな！」

「何が？」

「“プリン” って文字だけで呼吸が荒くなるぜ・・・」

「盛りすぎだろ。リアル世界に期待すんなよ」

「スグルは相変わらず、転入生にも興味なしか？」

この制服の中にキャラTを着ている彼は大串^{おおぐし} スグル。言わばオタクで休日は部屋で1日中PCの前でひたすらネットをしているらしい（詳細不明）。扱い辛いが良い奴でみんな”こつ言う奴”と割り切って付き合っている。

「当然だ。お前もこちら側に来るか？」

「遠慮するよ」

今日も今日とて普通に放課後！！。直帰は俺とユキ、京だけになった。

「京、基地行くんだろ付き合っぞ」

「付き合っ……」

「さいならー」

「冗談だよ。後から何人が来るっばいしね。モロとか」

三人で帰路についた。

「買い物していくから。備品補給」

「んじゃ駅の方ね。そうだユキ、プリン買ってやる約束したよな、買ってやる」

「わっいプリンだっ」

「わ〜い語だ〜」

ユキにプリンを買う約束を思い出し丁度良いので買ってやると言ったらハグされる。それに便乗して京も熱烈なハグ（キス付き）をしてくるので素早く手でガード。

「熱烈なアピールだな京君・・・」

「ち、おいしい」

「おしくない、んじゃ行くぞ」

買い物も無事終了し基地に向かう。・・・この川神市の一角の多馬川のすぐ近くに廃ビルがある。割と近代的な面持ちだがバブルが弾け景気が下り坂し業者は倒産、んで現在の棄てれた廃ビルに早変わり。でも一応は管理しないといけない、そこで秘密基地を探していた俺達風間ファミリーがこのビルの警備をするアルバイトをしている代わりに秘密基地として利用していると言う訳だ。

「5階まで異常なし。目的フロアに到着」

「問題あったことないけどな」

五階を基地活用していて電気は無いが水道だけが通う。掃除をして私物を持ち込み結構充実した基地になった。

「これはこれは3人とも、ごきげんよう。きつちり掃除しておいたよ。綺麗な場所が一番だ」

「いつもありがとな、スーパーロボクッキー」

「ありがとう」

「その素直な心が大切だ、語、ユキ」

クッキーはまた掃除に部屋を出て行く、京はお勧めの本を棚に収納していく。

ここにある家具はリサイクルショップが閉店する時にバイトしていたキャップが引き取って来た物だし、置いてある漫画もみんなで持ち寄った物やモロお勧めだったりする。

この場所はすでに俺達にとって居心地の良い場所になっていた、更にここは金曜集会の場所としても活躍する。

その後はモロが漫画を置いて帰り、4人で雑談（1機ロボだが）をして今日は帰る。

夕食、風呂を済ませ部屋で日課である筋トレ中ケータイが鳴る。

「はい、もしもし？」

見た事の無い番号だが一応電話に出る。

『やあ、久しぶりだねカタリ君』

「・・・えっと・・・どちら様ですか？」

『ん？、ああそうだったカタリ君、私はフランクだ』

「・・・へ？、フランク中将ですか？」

『ああ、フランク・フリードリヒだ。覚えているかい？』

「ええ、クリスの父親でドイツ軍人ですよね？」

俺は川神市に住む以前にドイツのリューベックに親の仕事の都合で住んでいたことがある。その時、親の知り合いである中將の娘のクリス、クリスティアーネ・フリードリヒと出会い幼馴染になった。そのクリスの父親で何度か会ったことがあったので覚えていない訳ない。

『覚えていてくれたか』

「はい、それより何故この番号を？」

『すまな、急に電話をかけてしまって。わが軍で君の居場所を調査させて貰ったんだ』

「・・・そうですか。あのクリスは元気ですか？」

『ああ、とても元気だ』

「そうですか」

『そこで君にお願いがあるんだ』

「え、はい。俺に出来ることであれば」

『ちかじかそちらの川神学園にクリスを転校させるんだが、その時にクリスをサポートして欲しいのだよ』

「あ、今度転校して来るのはクリスなんですね」

『ああ、頼めるだろうか？』

「ええ、分かりました。歓迎しますよ」

『君の事はクリスに話してある、君になら安心してクリスを任せられるよ。それでは夜分遅くにすまなかった』

「え？。ちょ、中将？、さっきの任せられるってどう言う意味ですか！？」

ケータイから無情な音が響くばかりで中将の返事は返って来なかった。

「ちゅーじょー！ー！！」

語の受難な日々は開幕した……

「ジェロニモー……!!」

3話（後書き）

まだ原作のヒロインの2人が出てきてない・・・orz

ちなみにカタリの強さは以下

鉄心>>>揚羽 百代 語>>>由紀江>>

見たいな感じにしました。

4話（前書き）

遅くなつてすみません！

4話

翌日はまたみんなで登校。そして今日は朝礼の日、グラウンドに生徒が並ぶ、するとヒョコヒョコと朝礼台の上に姿を現す川神学園学長の川神鉄心だ。

「あゝマイクテストマイクテスト。さて、今日はこんなじいいの話を聞かせる為に朝早くから集めてすまんの・・・」

学長は全生徒を見渡す。

「まあこんな老骨の話なぞの為にわざわざご苦労じゃったな・・・・などと言うと思ったか！！たるんどる、喝つつつつ！！！」

学長の喝が大気を震わせ鼓膜に響き渡る。

2、3年は慣れたものだが今年入学したばかりの新生は背筋を伸ばしドギマギしながら次の言葉に身構える。

「ふむ、話を聞く準備は出来たようじゃの。・・・お主達、腹は減っておるか？」

鉄心はゆっくりと語り始めた。

「名誉や金、力に飢えてはおらんか。女や男はどうだ？飢えてはおらんか？」

「飢えてるならそれはいい、とても正しい、どんどん飢えてはんぐりーになりなさい」

「奪い取り、つかみ取る為に努力しなさい。競い合い、互いに切磋琢磨していきなさい」

「その為に決闘システムを用意した。どんな些細なことでも白黒つけなさい。そして何かをつかみ取ってみせなさい」

「勝つという快感はやめられん、人生がより一層楽しくなる。この老骨からのお勧めじゃ」

「成功する秘訣は夢ではなく野心ということよの・・・と言っても、ただ飢えてるだけじゃ獣と同じじゃ。理性と本能を両立させて勝利、栄光、名誉に満ちた人生を送りなさい」

「願わくば、皆が何らかの野心を抱いたはんぐりーやんぐぴーぽーであることを願うぞい」

ちよくちよく英語が入ったが、立派な教訓になる。こんな感じで良い事を言う学長だけでも・・・

「ふぁんれたーがあつたら目安箱に入れておくのじゃぞ。むっまだ時間が余ったの、ではぶるまの良さでも語るかのぉ。」

という風に最後のこんな発言があつて教訓の話は大抵印象に残らないことが多々ある。そんなグダグダな朝礼は終わり生徒は自分の教室に戻る。

朝の奇抜な朝礼も話題に上らず昼休み。ハゲこと井上^{いのうえ} 準^{じゅん}。スキ
ンヘッドがトレードマーク。変態の名が相応しい凄まじい程のロリ
コンで2・S所属、ユキが懐いてる人その1。そのハゲとモモ先輩
がパーソナリティーを務める校内ラジオの『LOVE川神』が流れ
始める。

『ハアイエブリバデイ、春と言えば恋だよねでも浮かれて妙な病気
にかかるのだけは、勘弁なパーソナリティは俺ハゲこと2年井上準
と・・・』

『人生、喧嘩上等諸行無常。3年の川神百代だ』

『今日も百代さんに相談のメールが沢山来てますよ。準さん、百代
さんこんにちは』

『よ。というか、前置きはいいいから本文読めハゲ』

『好きな子ができました。どう接すれば良いですか』

『私が味見してやるからその娘を紹介してみろ』

『ちなみに本気で言ってますから注意して下さいね』

『はい、次。モモ先輩好きです付き合ってください』

『おー。メールで言わず正面から来るんだ』

『次、百代さんはどんな映画好きなんですか』

『ひたすらにアクション映画だ』

『俺はなんでこのラジオ人気あるのか分かりません』

『ハゲ、お前は好きな映画なんなんだ？』

『可愛い児童達が活躍する映画。和む』

『ちょっと危ない意見だなハゲ』

こんな感じで自由なラジオだった。

放課後は俺、京、大和、キャップ、ユキで帰路についた。

『やっぱ男に賭けたヤツが多いいな』

『また策か？』

『ああ』

今日の昼休みに大和とキャップは明後日来る転校生の性別で賭けをしていた。今回も大和の何らかの策いかさまをしたらしくキャップと何やら話している。

「（まあ俺名前まで知ってるけどな）んでどんな策だ？」

「簡単だ、朝のうちに男って偽情報を流しただけさ。それに、男女比率から言っても、男に賭けたヤツが多いだろうね」

「ハズレるヤツが多けれりゃ、胴元が儲かるからな」

「軍師様も悪ですな」

「いえいえお代官様ほどでは」

ユキが時代劇に影響されたらしく、なんだか悪徳代官ごっこを大和とやっている。

「語、カッコいい」

「マジで唐突だなおい。」

「言わなきゃいけない気がして」

「ホントカタリLOVEだな京は」

「おおー、カタリと京はラブラブなのかー」

「ユキどこがラブラ・・・」

「ユキ、マシユマロあげる」

「やったーマシユマロ」

ユキにマシユマロ4袋を渡す京。すると一瞬で姿が消え抱きつこうと飛びついて来る、それを本気で躲す。

「……油断も隙もねえなあ、おい。ユキの発言で盛るな」

「愛は時として猛禽類にもなる。私の愛を受け止めて」

「思いが重い!!」

迫る京を必死で避ける。決してダジャレなんかじゃない!!

「まぐまぐ、もぐもぐ、あれゝもうマシユマロが無いよゝ」

「お前は吞気だな」

何とか京の情熱の炎を鎮火。そして仲見世通りに差し掛かる。この通りは川神院正面に繋がる商店街で、江戸情緒をしのばせる専門店やお土産の店が軒を連ねる。甘味処かんみどころも多く地元の人達や観光客にも人気だ。

「あ!、おいおいアレ見てみるよ」

キャップが何かを見つけた様に声を出す。その先には甘味処で女の子とイチヤイチャするモモ先輩だった。こっちに気付いて近付いて来る。

「よー。どっかで茶か? 私もいれろー」

「あの娘は?」

京が先程の女の子について聞く。

「ああ、お腹すいたけど持ち合わせが無かった。だから女の子引っ掛けて奢ってもらったのさ」

「っーか姉さん持ち合わせないんじゃないの？」

「そこは舎弟大和が奢ってくれるんだろ？」

「またか・・・」

「ほーらを腕組んでやる、恋人気分だろー舎弟」

「恋人と言ったただ拘束しているだけのような・・・」

モモ先輩は大和の右腕に自分の腕に絡めピタッとくつく。大和はどこか満足気な顔だ。

「私もひつつく」

「なぜ俺にひつつくんだ京、くそっ外れねえ!!」

「あゝずるーい、僕も」

京がモモ先輩に感化され俺の左腕に自分の腕を絡める。するとユキまで俺の背中におぶさる形で俺の背中に乗る。

「ユキまで!?!...もういいよ・・・」

「あはは、カタリ」

「あ、なんかずるいぞ、みんなひつつきあつて。よく分からないけど俺も！」

「割り込み禁止だ。そーらっ（片手投げ）」

「うわあああああああ！！！！！！」

キャップも相変わらずの子供思考で大和に抱きつこうとする、それをモモ先輩が片手で投げ飛ばす・・・何とも力オスな絵面だろうか。

「んじゃこれから仕事だから」

「いってらっしゃい、あなた」

「えゝカタリ行っちゃうのゝつまんなーい」

「^馬駄々こねるなユキ。んじゃ飯はいらんから」

「わかった、バイトよろしくな」

「好きな日取り言えよ」

「なんだ大和は語り屋でバイトか？だつたら私の分も空ける」

「はいはい、んじゃまた」

俺は買い物袋片手にみんなと商店街の端で別れ学校付近まで屋台を取りに戻る。

俺は今1人身、親の遺産はあるものなるべく自分の力で稼いでいる、屋台『語り屋』は親の遺産で立てた物だが今では週に約60万を越える大盛況でよくいろんな人が来る。店自体俺の気分で開くが水曜日だけは決まって開く、しかも人気なのは風間ファミリーのお陰でもある。

そして今回は親不孝通りで商売を開始。

「最初は暇でいいんだがなー」

のほーんと椅子に座り客を待つまったりとしたこの時間は俺の安らぎの一つだ。そんな陽気な気分ではけーっとしていると客が入り始める。

「いらっしゃーい、って学長じゃないすか？」

「いやなに久しぶりに語君のおにぎりが食べたくなつての」

「んじゃおにぎりすね、具は？」

「おススメを頼むぞい」

ぱつとおにぎりを作り学長に出す。ふと朝の出来事を思い出す。

「あ、学長。朝なんか俺に挑戦者が俺を倒さないと学長と戦えないとか言う話になってましたけど・・・どうしてですか？」

「ん、ああ、あれかの。あれは語君もそろそろ戦いに飢えとらんか心配だったんでな」

「ちゃんと言ってくださいよ……まあいいすけど。お代250円です。」

「すまんかったの。うむ、美味しかったぞい」

「どもー」

学長は満足したように帰って行った。するとそれを引き金にしてか客が大混雑しはじめ追加の机を増やし今日のゴールデンタイムは終了、そして客が居なくなり追加の机を片付け屋台だけで静かな時間が続く、暫くすると……

「ちーす」

「おら飯だせ」

「ほんと忙しねーな、板垣一家は」

この時間になると席を独占するのは板垣家、長女の亜巳^{あみ}、次女の辰子^{つこ}、三女の天使、長男の竜兵^{りゅうへい}。ここの常連で人気の少ないこの時間に来るので少ないツケができる客だ。

「んじゃ今日はなんだ？つか先週の3460円払えよな」

「奢れよカタリー」

「わかってるよ、今度返すよ」

「・・・ZZ・・・ZZZZ」

「はぁー・・・んで今日はなんだ？天はいつものでいいよな？」

「OKー」

「私はサラダとナポリタン」

「俺は定食でご飯大盛り」

「私はオムライス・・・ZZZZ」

「ん、サラダにナポリ、定食、オムライス、天使スペシャルなー」

天使スペシャルとはお子様セットよろしくカルボナーラに海鮮サラダ、魚のムニエル、カボチャクリームスープのセット、これ全部普通の量を小柄な天使が1人で平らげるからスペシャルなのだ。

「ほれ亜巳さんサラダ、これ定食ご飯大盛りね」

そんな感じでちゃきちゃき飯を作る。そしてこの店の人気がある理由は旨い、安い、なんでも速いだ俺の料理スピードはワン子が焼き鳥を1本食い終わる頃には10本は焼けている速さだ・・・分かりにくいだって？まあ早いんだよ兎に角。

「ほいつ、ナポリに天スペ、オムライスなー」

そんな感じで料理があつと言う間に終了。すると板垣姉弟はがつがつと賑やかな音をたてながら食事をおっぱじめる。

「「むしゃむしゃ、がつがつ」

「「もぐもぐ」

天使と竜兵はワイルドに掻き込みながらのに対し、辰子と亜巳はゆっくりと食べる。どうして姉弟でこうも違うのか気になる。そんな事を考えながら4人の食事を見る。

「ふー、ウマかったぜーカタリー」

「ほんとウマかったぜ」

「おいしかったー」

「そこそこだね」

「お粗末さまでした、ほれ奢りだ」

俺は常連には必ず食後に奢るのが儀式みたいになっている。

「天にはコーラフロート、竜兵にはドーナッツ、亜巳さんにはダーズリンティー、辰子はメロンだ」

「さんきゅー」

「いただきぜ」

「今日はダーズリンかい」

「わーいメロンだー」

それぞれの前に並べると優雅というか落ち着いた雰囲気でのんびりと時間を堪能する。

「今度ちゃんと払って下さいよ。んじゃまたご^{ひじき}糞^{ひじき}にー」

のんびりした時間を過ごすと4人は満足そうに帰っていった。ここで今日は店仕舞いにし屋台を押しながら寮へと帰る。

「お帰りあなた」

「ああ、ただいま京」

京が玄関先で待っていた（正座で）。

「お風呂にする私にする、それともご飯？」

「順序ちげえぞ、それと風呂だ飯はいいって言ったる」

「形式美だよ、お風呂沸いてるから」

「もともと温泉だ」

風呂に入り（京が引っ付いて来たが追いかえした）自室で包丁を研いでいると俺の部屋に近づく気配を感知する、するとノックがする。

「（この気感じは上の１年か）はい、どうぞ」

ドアを開けると案の定彼女。黛^{まゆすみ} 由紀江^{ゆきえ}だった。この島津寮に住む川神学園の１年生でなぜか帯刀している少女。大和曰く、国から帯刀の許可を貰っているらしい。

「あ、あの、そそ、その。これ！」

バツと綺麗に包まれた風呂敷を目の前に差し出す。

「あの、これ実家から送られて来た、あの、つまらない物なんですけどっ……」

「ん、あんがと」

「……ち違う！つまらない物なんて言ったら失礼ですよ！そーではなくてえーっと！！えーとえーと」

なんだか気合いの入った声でワタワタと慌て始める黛。

「落ちてまゆっち！まゆっちならいける！クマだって倒せる、物理的に１０００匹はイケル！」

なんだかちっこい馬のケータイストラップが急に話します。

「で、でも松風、焰さんもうポカーンとしてしまって。これは戦略的撤退を提案をしますよ！？」

「俺は１００００はイケルかな？」

「・・・へ？」

「ん？クマだよ物理的に1万はイケルぜ俺」

「え、いやあの、そのっ」

またワタワタし始める黛の顔をガツと掴み俺に向けさせる。

「しっかり目を見て話せ、慌てるな落ち着け。俺は落ち着くまで待つから・・・焦るな」

「あ、ありがとう、ございます・・・」

それだけ言つとビューンと自室に戻って行ってしまった。

「・・・綺麗な子だな」

今日もドタバタとした1日だった・・・

4話（後書き）

どうしょー（泣）

書く 때마다悩みが増える・・・

5話（前書き）

5話目投稿！

5話

今日は人間力測定。

「あああやっぱりもう身長止まってるう！」

「俺様のように鍛えろ。見る握力計吹っ切れたぞ」

「筋肉付けると余計に縦に伸びない気が」

「ガクト……すまん」

「ん？どうした急に謝って」

「いやあ……握力計の握る部分が折れて計測不可になった」

「……ちいきしよおおおおおおお！！！」

「少し太ったか。寝る前にコロツケ食い過ぎたな。ココアもミルクと砂糖ありありで飲んだからな」

「計測したくないなあ。この悩みも食べちゃいたい」

「スグルは意外に気にしてるんだな」

「オレとて少しは気にするさ」

「そんなもんかねえ」

人間力測定、まあ世間一般で行われているスポーツテストと身体検査を合わせたみたいなもの。

クラスのみんな（男子だけ）は自分の体型や記録を気にしながら次々と測定を終わらせる。

「先生俺の胸囲を是非測ってください。優しく」

ガクトがウメ先生に自分の胸囲を測らせようと巻尺を持って近付く。

「師岡。島津を測ってやれ。優しくな」

「モロテメエ。なんだよこの展開ぶつ殺すぞ」

「こっちのセリフだよっ！なんで男の胸囲なんて・・・」

愚痴をこぼしながら2人は測定をする。

「焰、直江、胸囲をやれ。私が測ってやろう」

「「はい」「」

「気をつけ！！」

「「はい！」」

「いい返事だ。お前達は見どころある。その調子でな」

「「はい！！」」

俺と大和は先生に胸囲を測ってもらう。すると今度はグラウンドに向かわなければイケないらしく向かおうとする。

「女子がスポーツ測定をしている。終わったら交代だ」

女子のスポーツ測定がまだらしく、俺達は早く終わったらしい。

「女子が・・・計測中だとお!!」

先生の言葉を聞くとみんなは凄まじい勢いでグラウンドに向かって走り出した。

「なんだなんだ？良く解らんが俺も！」

キャップはワケが分からないが兎に角みんなの後を追いかけた。

「遅いぞお前ら。それでもやりたい盛りか？」

「万年発情期のサルと一緒にすんな、ボケ」

「それにしても女子のレベル高けえなうちのクラス」

「スルーかよ」

「まずはエントリー？1川神一子。身長159センチ、3サイズ77、54、79。女つぼさは余り無いが、快活で話しやすく、一緒にいると楽しいので男人気が高い。スポーティー娘・・・と思われがちだが、姉である川神百代の存在が恐怖で言い寄る男はなしと言っ現状」

「続きましてはエントリー？2 甘粕真与。身長149センチ、3サイズ74、52、73。頑張り屋の委員長で話していると和む。その体格故に特定の人達に崇められている」

「続きましてはエントリー？3 椎名京。身長155センチ、3サイズ84、59、83。クラス最高級その1、美形で実は胸もある。だがクール過ぎて人を寄せ付けない、それ以前にどう見ても語の女」

「じゃあエントリーすんな。しかも俺の女じゃないし、誰の女でもない」

「まあな、でも周囲の奴からはそう見えるぜ」

「はあ、良く言われる・・・」

「そして最後にエントリー？4 榊原小雪。身長165センチ、3サイズ88、59、87。クラス最高級その2、体型とビジュアルは抜群。おっとりポワポワした性格だが天然と言うよりも電波に近い。それ故に言い寄る男は少ない」

「とまあレベルの高い4人を例にあげてみたが・・・周囲の環境や体型的、性格的な問題から突撃できないわけ。んで結果あれに集中するわけ。小笠原千花。身長157センチ、3サイズ82、60、81。誕生日7月20日、血液型B型。現在付き合っている男なし。付き合いたい女&やりたい女？1の二冠！」

「フェロモンが堪らんよなあ。ありや絶対誘ってる」

大半の男子は目をギラつかせながら小笠原を見る。

「にしてもヨンパチは女に詳しいね」

「ああ。3サイズはおるか、好感度まで分かるぜ。」

「凄いなヨンパチ。女子についての情報はオマエだな」

「男子スポーツ測定開始、まずは100メートルだ」

みんな駄弁ついているとウメ先生がスポーツ測定を始めた。

「よし、まずは俺が突風のように行くぜっ！さあ短距離で挑戦者いるか！？賭けやろっぜー」

キャップが挑戦者を募集すると陸上部だが走り高跳び屋の奴と勝負をする。結果はキャップの勝利、マイシューズでスタートからゴールまでトップスピードで駆け抜け圧勝した。

そしてその日の翌日……

「・・・zz・・・zz・・・」

まだ語は起きてはおらず無防備な寝顔で気持ち良さそうに寝ている。そこに京がソロリソロリと侵入する。それに気付ける状態ではない語。

「（語の寝顔・・・）」

うつとりとした表情で京は語の寝顔を見る・・・いや視姦と行つていいだろう。

女性の母性本能を掻き立てる様な寝顔、その秘められた魔力に京で無くともその顔に惹き付けられる。

「・・・んん・・・ん？」

「んー」

「っ！」

語はタイミング良く起きると、目の前に京の唇が迫る。その唇を避ける様に布団から転がり出る。

「おはよう京、今日も過激にファーストキスを奉げるな」

「昨夜は激しかったのに」

「お前がな。ったくいきなり風呂に入つて来るな」

今日も京は絶好調だった。着替えて今日も登校する。

「あれ今日は挑戦者来てる」

変態の橋を風間ファミリーのメンバーで渡っていると、その中腹あたりに道着をきっちり着込んだ男がいた。

「シャース！俺は殺人空手を身につけ、野生のイノブタを一撃で仕留めるほどの使い手っス！シャース！名は鈴木健太、出身地は群馬。武神・川神一族を倒し、その話をハリウッドで映画化して貰うのが夢っス」

「川神百代だ。その映画開始1分で終わる事になる」

「抜かせ！ほあっちゃー！！！！！！」

「故郷まで飛ばしてやる！せやあ！！」

鈴木は一撃で星になった。

「我流だな」

「ああ、自称空手だろうが・・・面白い馬鹿だ。だが語にも遠く及ばんな」

「結構独特な鍛え方だった」

「今日はソッコーで片付いたな、行こうぜ」

大和が振り返り歩き出そうとした時、誰かにぶつかった。

「すいません（ペコリ）」

「私の方こそそそ見をしていた。今は果たし合いと言うヤツだな、面白かった。若者の謝り方もきっちりしているし、この国に来て良かった、フッフ・・ではまたな・・・」

そう言う外国なオジサンは不敵な笑みと言葉を残して去って行った。

「なんだ今の不思議な人？」

「春だから。変な人もでるさ」

「説明になってない（・・・中将・・・）」

「美少女ゲームだったりするとさ、朝ぶつかった相手が転校生だったりするよ」

「はははっ、オッサンと大和のフラグが立ったのか」

「大和はオジサンと付き合うんだ」

愉快そうに笑う百代、不思議〜と言う小雪。

「あらん事言わないでよ姉さん。ユキちょっとO・H・A・N・A・S
Iしようか」

そのままダラダラと登校。大和はさっきのネタで百代に弄くられてゲッソリしていた。

「それでは、お待ちかね。転校生を紹介しよう」

教室が小さくざわめく。

「入りたまえ」

「（久しぶりの再会だな）」

語は若干の期待を余所に扉が開く。

「グーテン・モルゲン」

教室が一瞬にしてざわめき立つ。それも仕方ない、入って来たのはダンディーな外国人のおじさん。しかも朝大和がぶつかつたフランク中将だった。

「え？あ、あの人が転校生だって言うの。ちょっと老けてる感じがないかしら？」

「問題そこじゃねーよー!!」

「こらあ身体的特徴を指摘してはいけません！」

「突っ込むところ違う違う。転入生そのものが突っ込める塊でしようが!」

「こんなオッサン補強してどーすんだ」

「（中将・・・なんでここに居るんだ?）」

「勘違いしない様に。この方は転入生の保護者だ・・・あのご息女は?」

「ご安心を、娘は時間に正確な娘です。間もなく掛け参りましょう。グラウンドを見ているがいい」

中將が指した先、窓に視線が集中する。

「……………? げっ! ?」

「どうした大和、何が見えるんだ?」

「女の子が学校に乗りこんで来た」

「なんだそりゃ! !」

「何かあるらしいな。よし見たい者は見て良し」

皆が窓の方に群がってきた。その視線の先には・・・

「うん、確かに乗り込んできたねえ。馬で」

「クリティアーネ・フリードリヒ！ドイツ・リユーベックより推参
！！この寺子屋で今より世話になる！」

そこには昔に見た面影が朧気に残るものの、性格に変化の無い彼女。
綺麗な金髪を風に靡かせたクリスが威風堂々と馬に乗っていた。

5話（後書き）

日に日に更新が遅れている気が・・・

でもここで終わらせない！！

6話（前書き）

はいじゃんじゃん更新がんばるぜー！！！！！！

6話

「クリスティアーネだ。よろしく」

先程の馬で登校騒ぎから少し経ち、クリスは2 - Fで自己紹介をしていた。凜とした立ち振る舞いに男達は見惚れていた。

「日本語が全く違和感がないな。たいしたものだ」

「リユーベックに居た昔の友達に日本人の友達がいました。その人達と接している内に覚えたのです」

「うむ、円滑なコミュニケーションが望めるな。よし、質問があれば拳手していけ」

ウメ先生が生徒達に質問の許可を出す。

「はいはい!!」

ガクトがすぐさま手を挙げる。

「では島津。品位をもつてな」

「オッスオッス! えーと、くりすてぃあーね?」

ガクトは品位の何を間違えたか、バカ丸出しでクリスの名前を口に出す。

「自分としてはクリスと呼ばれることを希望する」

「クリス。彼氏はいたりするのか？」

と未だ教室に父親が居ることを忘れ、親が聞けば必ずリアクションするであろう質問をのっけから聞く。

「そんなの居ないに決まっているだろうガツ!!」

案の定と言うか、当然の反応がフランク中將から質問が返される。

「父様のおっしゃる通りだ・・・強いて言うなら、候補がいる・・・」

「

クリスは若干顔を赤らめながら言う。・・・誰だろ？

「そ、そーすかつ・・・」

若干涙ぐんだ声で返事を返すガクト。

「クリスにちよっかいを出す者は軍が殲滅する」

「GUN？」

「父様は任務に私情を持ち込まない軍人だ」

「今めっさ持ち込んでたでしょうが!!」

ヨンパチ、俺も思ったよ。

「ふふふ」

クリスは楽しそうに笑みを浮かべる。

「何だか機嫌良さそうね？」

「大好きな日本にようやくこれれたからな。それに会いたい人に会えるからな」

「ちなみにその会いたい人って？」

「この学園に通っている焰語と言う男子生徒だ」

一瞬にして俺に視線が向けられる。主に男子は嫉妬と殺意。女子は驚愕。京からは人１人殺せる殺人的な視線が突き刺さる、いや貫いている。

「は、ははは・・・クリス、久しぶり」

その視線に苦笑いをしながらクリスに久しぶりの挨拶を交わす。

「語ー！！」

いきなり抱きつかれた！！京の視線が痛い痛い視線で胃が痛いよ！！

「ちよっクーちゃん、ぬわっー！！」

俺が昔呼んでいた愛称で呼ぶと、後ろからシャーペンが飛んで来る。それをなんとか回避する。

「語、ホント久しぶりだ。会いたかったぞ!」

ぐっは!! H O・N Eが砕ける! ヤバい胸の感触とさば折りで俺が死ぬ!! 精神的にも肉体的にも!

「寂しかったんだぞ・・・」

シュンツと捨てられた子犬並みの悲しい表情をするクリス。無理! こんな顔されたら引き剥がせない! くっ俺の短い青春よ good bye!!! などと考えていると痛みが無くなる。

「でもこれからはまた一緒だ」

綺麗な笑みで俺からはなれる。ここでクリスがホントに大人びて見えた。

「んんっ。父君そろそろ・・・」

「分かった。皆、娘をよろしく頼む」

「あの馬も回収してもらいます」

中将は一礼して教室をでた・・・戻って来た・・・

「クリス、なにかあれば戦闘機で駆け付けるからな」

爽やかな笑顔でそれだけ言い残すと今度はちゃんと帰って行った。

若干あの笑顔が怖かった・・・

「カタリだけあんだけの行動してスルーかよ」

「ちいきしょおお、後で問いただしてやる！」

「問いただすなんて生ぬるい、拷問だよ」

「京、発言がヤバイよ！」

男子連中がしょぼくれ、女子はなにか決意して目。すると一子の目がギラついた。

「はい質問！何か武道はやっているのかしら？」

「フェンシングを小さい頃からずっと」

「YES！！梅原先生提案。転入生を”歓迎”してあげたいと思いますーす」

ガバツと勢い良く立ちあがったワン子はそい言い放つ。

「ふふつ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い。クリス、そのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ」

「！！・・・なるほど、新入りの歓迎、か」

「川神学園には決闘っていう儀式があるの。自分のワッペンを机に置く」

ペシツと軽快な音を立てワン子は自分のワッペンを机に置く。

「クリス！せんと「待った」へ？」

「ワン子それ俺にやらせてくれ」

「えーいやーよー」

「今度お前の鍛錬付き合ってやる「OK!」んじやいいな。クーちゃん、俺はクーちゃんを指して強くなった。俺の実力を見て欲しい！」

「・・・わかった」

「クリス、一騎打ちで俺と勝負だ！」

「受けて立つ！」

ワッペンを机の上に置くとクリスもワッペンを重ねて来る。これで決闘成立。

「受理したぞ!!」

「きっぱりしてて気持ちがいいや」

「マジッ決闘、久しぶりにみれるんだ。しかもほむっちのレアだよ！」

「待て、肉体を使用する決闘の場合は職員会での了承が必要だ」

「ほっほっ。小島先生話はきかせてもらったぞい」

いつの間にか姿を現したのか学長がなぜか居た。

「学長。いつの間に……」

「いいよワシの特権で了承するぞい。今すぐやんなさい。ワシが責任もって見届けよう」

そんな訳で決闘が受理され、今すぐに決闘を始めることになった。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う。」

あれから決闘が始まるとアナウンスで流され、第一グラウンドは人で賑わっていた。

「決闘の儀！決闘の儀だ！！！」

「いいぞー、やれー！！！！」

周りの観客からの野次が飛んで来る。

「2人とも、前へ出て名乗りを上げるが良い！」

「2年F組！焰 語！」

「ほむっちガンバレー！！！！」

「語くー！！ん、ファイトー！！！！」

女子からの歓声の聲が耳に入る。

「今日より2年F組！クリスティアーネ・フリードリヒ！」

「クリスちゃー！！ん！気を付けるんですよー！！」

「期待してるぞ新入りー！！」

鼻肩される様子もなくクリスにも声援が聞こえる。

「ワシが立ち会いのもと、決闘を許可する。勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。が、勝負がついたにも関わらず攻撃を仕掛けようとしたら、ワシが介入させてもらう、良いな？」

「OK！」

「承った」

「ん、スカートで闘うんだよなクリスちゃんは……ってことはおい！ヨンパチイイっ！！」

「分かってる。シャッターチャンスは見逃さ……」

ガクトとヨンパチの頬を何か物凄い勢いで通り過ぎる。それを生み出した本人はグラウンドの中央で決闘を始めようとするなか右腕

を肩の高さまで広げた格好で居た。

「……ヨンパチ、やめよう」

「ああ、まだ死にたくねえ」

2人は大人しく決闘を観戦することにした。語は拳を片方前に着突き出した構え、クリスはフェンシング独特な半身で自分の得物のレイピアを突き出す構え。

「いざ尋常に……はじめいつ……!!!!」

「勝負っ！」

始めに動いたのはクリス、レイピアで鋭い一撃を語目掛けて放つ。その鋭い攻撃を語は手でいなし軌道をずらす。

「はっ!! やっ!! せいっ!! たああ!!」

クリスはレイピアを素早く戻し連続で突きをする。だが語はすべてを手の甲で外側へといなし続ける。

「今だ!! はあああああ!!」

クリスはこのままでは埒があかないと上半身ばかり攻撃していたのを今度は足下に向かって繰り出す。それを語はバックステップでかわし後ろに大きく飛ぶ。クリスは飛んだ着地地点に向かい今までで高速の突きを放つ。

「甘い!! 今だ! せいっ!!」

レイピアの切っ先を蹴り飛ばし軌道を大幅にずらし難なく着地する。すると体勢が崩れたクリスの脇腹に蹴りを繰り出す。それを察知したのかクリスは前転して蹴りを躲す。

「危ない、やるな語。昔からかなり成長したな」

「ああ、俺は強くなった。今では武神・川神百代と肩を並べるくらいにね」

「！！・・・そうか、だがこの勝負負けられない！！」

「行け、これが奥義・・・白刃しんげ！！」

強烈な手刀での突きがクリスに襲いかかる、その手刀は極限まで速さを求めた最速の攻撃。手刀での突きの早すぎる速度と摩擦に耐える為の気が白く見える事からこの名がついた。

「っ！！！！くっ！！・・・はああああああ！！！！！！」

2、3発レイピアで弾き攻撃範囲から抜け出す。するとクリスはすぐさま体勢を整えるとレイピアを正眼に構えジャンプを活かして突進する。たぶんこの一撃に全てをかけたのか気迫の籠った顔で突っ込んでくる。

「・・・狼牙ろうが」

真横から突っ込んでくるクリスに振り向き様に狼牙を放つ。気でオオカミの形を模した前面のみ広範囲攻撃。バキィィンンンと小気味良い音を立てレプリカのレイピアが折れる。

「それまで。勝者、焰語！」

6話（後書き）

初のガチ戦闘シーンです。

なんかザンさんのには厳しいかも？

ここで追記しますがいままでの作品は全部ザンさんことミィーがしています。

過去・・・京（前書き）

なんかグダグダ？

ヤバイこんなの読者の方に満足して貰えない！！

でもこれが作者の限界・・・orz

本編どうぞ・・・鬱だ死のう・・・

過去・・・京

俺が子供の頃、この川神市に引っ越して来て始めて出来た友達は、椎名京だった・・・

「今日からこのクラスに来た、焰語くんです。みんな仲良くしてあげてね」

先生の紹介が終わり休み時間に入るとみんな俺の周りを囲み質問ぜめにあう、それでも俺は1人の女の子だけが気になっていた。

”椎名菌”俺の周りの子達はみんな口をそろえてそう言う。椎名京はこのクラスではいつも1人、友達など皆無、その痩せ細った外見から付けられたあだ名でクラス・・・いや、この学校中で知らない人はいないほど悪い意味で有名人だった・・・

「椎名菌近づくなよ！」

「こっち来んな！汚いんだよ！」

「どっかいけよ！」

俺が彼女を見かけたときそんな事ばかり聞いた。

「やめろよ！」

俺はすぐにそのイジメを止める。でも転校生と言う特権が効いたのは始めの3日のみですぐに効力を発揮しなくなった。俺は強い訳でも凄い訳でもない、ただの子供、数の暴力に負け新たなイジメの対象としてイジメられた。

彼女よりも酷かった、暴力など当たり前。教科書に落書き、酷い時は破り捨てられる。それでも彼女のイジメが少しでも俺に向けばと耐えた。

それが4カ月続いたある日……

京 side

今日も学校に登校。学校も人も嫌い、だって私をいじめるから。でも今日はちよつと楽しみ、だって転校生がうちのクラスに来る。その人と仲良くなりたい、そしたら友達が出来る。

「今日からこのクラスに来た、焰語くんです。みんな仲良くしてあげてね」

転校生は男の子だった。第一印象は普通の健康そうな男の子。特徴と言えば少し吊り上がった目に整った鼻に輪郭で中性的な顔立ち、体格は少し私より高い身長に肉付きはやや付いた感じ。

休み時間に話掛けようとしたけど彼の周りには他の子達がもの珍しい様を質問責めにあっている、今日は話し掛けられない様だから今度話し掛けようと思い読書を再開した。

ふと視線を感じた、周りを見るけど私を見ている人はいなかった。
誰だろ？

次の日の昼休み今日も男の子達にイジメを受けている。その時男の子の声が聞こえた。

「何してんだよ！」

顔を上げて見るとそこには転校生の焰くんが男の子と私の間に居た。その背中では本に出て来るヒーローみたいでかつこよかった。

男の子達は直ぐに走って逃げて行った。2人きりになった途端に私は何故だかその場から逃げてしまった。友達になるチャンスを逃してしまったとその日は後悔してしまった。

その2日後、彼はなぜかイジメられていた、その姿がなぜか私に見えた。その日から私に向いていたイジメはほとんど無くなった。その代わり彼に集中した。ケガをしない日は無い彼になぜか近付けなかった。

side out

今日は晴れで休みの日。図書館に行こうと思って住宅街を歩いていた。その時目の前で椎名がイジメられていた。

俺は直ぐに走り出した、イジメている男の子の中でリーダーらしき男の子がほかの奴等に命令していた。

「早く、投げろよ」

「やめて」

彼女は2人の男の子に腕を掴まれている。リーダーみたいな奴の隣でタマゴを持っている奴が腕を振りかぶろうとした時、俺はそいつに体当たりして2メートルのぐらい飛ばすと、直ぐにリーダーに飛び付きパンチを顔に叩き込む。するとそれを見た腕を掴んでいた2人が俺に殴り掛かって来る。その攻撃を避けれず顔を殴られ倒れ込む。すると追撃と言わんばかりに蹴りが横腹に入る。そのまま復活した残り2人も加わり袋叩きにあう、それが結構な時間続き飽きた奴等は帰って行った。

「つてええ」

「・・・・・・大丈夫？」

「無理かも」

椎名はどこかに隠れていたらしく、声が聞こえる。椎名を見ると特に外傷はなかった。

「良かった・・・」

「・・・・何が？」

「椎名ケガしてないみたいだから」

ニツと笑って彼女に大丈夫だと言う意図を伝える。それでも心配そうに見詰める彼女に俺は仰向けの大の字状態で言う。

「椎名が友達になったら大丈夫だよ」

あえて明るく、あえて優しく、あえて平気を装って俺はそう言い二カッと笑う。

「!!・・・う・・・うんなる。友達・・・なる・・・」

彼女はなぜか泣き始め崩れる様に膝を付いた。その状態が20分続いて俺達はまだ時間が余っているので一緒に図書館に向かった。

その日から俺は強くなることを誓った。

大切な物を守るため、悪い事は悪いと言えるだけの力が欲しかった。

そしてその何年後、かの有名な川神百代の組み手の相手に任命され、平行でいろいろな武術、流派を学んだ。

過去・・・京（後書き）

ぐわああああ、駄文しか書けないこのザンをお許してください。

ちよっくら斬滅されて来るぜ

しばらくお待ちください

野草さんのお陰でなんとか現実逃避（死）を回避できました。（実話）

これから現実見て生きて行きます。

温かい心、広い心で見守ってください！

では次回！！！！さらば！！！！

7話（前書き）

お久しぶりです。

まあ本編を見てからゆっくりしましょう。

ではどうぞー！

7話

クリスとの決闘は俺の勝利で幕を閉じた。クリスも俺との一戦でクラスに認められ歓迎されていた。ワン子はクーちゃんにクリと言う変なあだ名を付けていた。このあだ名で反応した変態2人は現在、ガクト・ヨンバチ地面に上半身を埋められていた。

「この強さ・・・貴方が川神百代ですか？」

「ピアチエーレ！そのワン子の姉でもある」

クリスは今モモ先輩にお姫様抱っこされていた・・・

「モモ先輩、それイタリア語・・・」

「おお・・・噂は聞いておりました。真剣勝負を繰り返す戦士である、と」

「ああ。戦ってみるか？柔道の寝技でっ「アホかモモ。ほらほら早よう授業に戻れ戻れ」・・・じじい・・・気安く頭を殴るな（ジャンプ）」

「あっモモ！学長に殴りかかるなど退学じゃぞ（ジャンプ）」

後ろから現れた学長に頭を叩かれ急にジャンプする。学長もモモ先輩の後に続き同じ高さまでジャンプすると喧嘩をはじめ。

「うきやあああああああー!!」

「先生！福本が竜巻に巻き込まれました！」

「福本とあの2人は放置、速やかに教室にもどれ」

俺達は2人（と被害者）を放置して教室に戻った。

今日の放課後。俺はなぜかキャップのバイトを手伝わされていた。

「なぜ俺はこんなところで寿司握ってた？」

「いやゝ助かったぜー。今日シフトの人風邪ひいたらしくて、人出不足だったんだよ」

「はあゝ付いてねえ・・・まあいいけどな」

今日のHRでクリスは俺達が世話することになった。理由は今度島津寮に入るからだろう。それでクリスの案内をする筈だったのだが・・・京は部活と言って逃げ、ワン子とゲンさんは既に教室には居なかった。それで大和とユキが案内する事になった。ちなみにキャップは半ば強引に俺を連れバイトで無理だった。

「まあちやつちやと捌きますか。お腹の空き具合は大丈夫ですか、お客様」

それからなぜか大量に来る客を捌き切り、金曜集会の会場場所の廃ビルの5階に向かう。

「今度の金曜日も頼むぜカタリ」

「またかよお、はあくしゃーねえな。ん、そろそろ5階だな。まっモモ先輩が気が付いてるだろうさ」

いつの間にか5階の階段を上りきった俺とキャップはドアを開け中に入る。

「ウイ スー!!」

「ウーッス、みんな来てるがっ!!」

と2人であいさつしながら入る、するとワンの頭突きが俺の腹に入る、そして受け止めきれず倒れ込む。

「待ってたわよ晩ご飯!!」

「カタリ」

「ぐふっ・・・ワン子・・・飯はあっちだ。ユキ俺死んじゃうからその腕を緩めて」

さらにユキも俺に抱きついていてるが如何せん力が入り過ぎていて苦しい。さば折りでもする気か？

「カタリの言う通り俺が袋持ってて正解だな・・・」

「俺という・・・犠牲が出たがな・・・」

「おいカタリ遅いぞ」

「ガクト teme 死ね」

ガクトのその一言で復活。ガクトの顔面に狼牙^三を叩き込む。

「ごあつ!!」

「あああつ、まっいいか全員揃ってるし始めるか。ほれ!今日の余り分だ。今日はカタリが作ったのもあるからな、大量だぜー」

ドンツという音と共に大量の袋を机に置くとみんなそれぞれ準備を始める。俺も自分の定位置に座る。

「語、はいショーユ」

「ん、ありがとう」

「はい、タバスコ」

「あぶね!」

醤油の上からタバスコをかけようとする京から自分の皿を咄嗟に尚且つ溢さずに躲す。

「いるでしょ？」

「いや無いから。寿司にタバスコは無いから。京の皿危ないくらい真っ赤だよ」

「普通だよ」

「京の普通を俺に押し付けんなよ」

「はいマシユマロ」

「ちょ、うわっマシユマロマジで入れやがった、これ食えんのかよ」

「そんじゃ、いただきまーす」

キャンプの号令と共にみんなが一斉に箸（一部、手）をのばす。

「次はどこでバイトすっかなあ」

「ウチはもう定員オーバーだから」

「え、そうなの？」

「京に大和、ユキそれとモモ先輩で捌くから」

「なんだよ5人目も雇おうぜえ」

「無理、こつちの生活かかってるからね」

「まあ自分で探すか」

「もぐもぐ。金曜バイトは食べ物系にしないよな」

「分かってるよ。よー食うやつちな」

「しっかしここもずいぶん荷物多くなつたな」

その後はみんなでワイワイと騒がしい夕食を楽しむ。

「みんなで色々持ち込んだから・・・」

「ここ見つけてから随分月日がたったもんね」

「原っぱよりこっちの方がいいよなあ」

「俺様は原っぱ好きだったがな。まさに俺様の空間」

「何もあそこまで土地開発しなくてもいいのにねえ」

「そつだなあ、ワン子は抱き心地サイコー」

俺の膝の上はワン子定位置、大抵俺はワン子を後ろから抱える体勢で座っている。

「はは、くすぐったいわよ」

「語、私にして」

「膝枕で勘弁」

ワン子を膝から降ろし右側で膝枕、左側で京を膝枕する。

「はふー」

「わふー」

「僕もひつつく」

最後に背中にもたれ掛かるユキ・・・ちょバカ、おまつ胸が止める
おおおおおおおお・・・

「さつきも言つたが今日はバイト代入ったぞお前達」

「そろそろ月も変わるし。取り立て時だと思つてた」

「ほら、うら若き肉体にムチ打って稼いだ金だ。さつさと私に貸した分持つて行け金の亡者共」

「遠慮なく。今日も月内に払い終えたなあ」

「じゃあ私も、七千円だったね」

「僕も回収。お金をきっちり返すのはいいけど・・・」

「まず借りんようにしないと先輩。うし回収完了」

「アタシは三千円だから・・・誰か千円札持つてる？」

「はい両替任せて。この時の為に崩してあるから」

「回収した。ハイこれお釣り。全額確かに月内に！」

「僕、300円」

「……おい、残り140円しかないじゃないか」

今月はモモ先輩にたかられる事が無かったので俺は無い。

「そうですねー」

「これじゃあ学食で蕎麦だって食べられないぞ……大和、姉が困っているぞ。金銭面で助けてくれ」

「おわあ、からんでこないでくれ！語パス」

「ちよつ待て、俺は関係ねえだろ」

「さあ麗しのこの美女を助ける！」

ガツチリとホールドされ万力の如き力で逃げ出す事は不可能。だがモモ先輩の自己主張の激しい胸、女性特有のいい香り、丁度真横に来る整った綺麗な顔。

「や、やめてくれ！！分かった出す出すから放してええええええええええ！！！！！！」

「い・や」

目的が俺の反応を楽しむのに切り替わっている。こうなりや京だ！

「ヘルプヘルプ、京!!」

「私も」

「ずるゝい、僕も」

「なんだか気に食わないからアタシも!」

「やめんか!! や、やめてごめんなさい! マジ勘弁!! やめてええええええええええ!!」

(補足: 語は意外に女性特有の肢体に弱い・・・かも?)

「・・・もおムリイ・・・」

「カタリはほつといて。今日の議題だ」

「明日、どこで遊ぶか?」

「それも重要だが、転入生のクリスのことだよ」

「んー? クリがどうしたの?」

「俺たちのグループに入れようかって議題でてる」

「今聞いたよ!」

「で、俺はイイと思うんだけど」

「というか、何故その考えに到達するわけさ？」

「だって梅先生にも頼まれたじゃん」

「面倒見ろとは言われたな。確かに」

「クラスメートとして仲良くするのは当然だけど。それと、金曜集会にまで案内するってことはレベルが違うよ」

「そんな事は分かってるさ、でもクリスは逸材だぜ。久しぶりの新メンバー加入。どうよ皆？」

「一人ずつ聞いてみなよキャップ」

「うーし。まず牢名主のモモ先輩からどーぞ」

「賛成だ。クリスは欲しい。色んな意味で」

「即答ですか！？」

「いじくれる。色んな意味で」

「俺様賛成。理由は簡単だ。可愛いし、骨もあるからだ」

「クリはいらん子だと思うわよ……。まあでもいつでも勝負挑める相手が増えるのはいいわね。ただ、あいつ自身こーいうの好きかしらね？」

「そこで浮かない顔してる、京」

「私は反対。他人は増やさなくていいよ。いらないそんなもの。この9人でいられるのが好きなの」

「ワン子、ジメったキノコを説得しろ」

ガクトの命令は反発するワン子だったが、モモ先輩の一声であっさり受託する。

「ったく、犬は群れの中で階級をつけるといってが・・・」

「お前は下やね」

俺、復活!!

「ヘイ、ミスター京」

「ミスターは男でしょ」

「うあああ・・・にらまないでよおお」

涙目で俺に抱きついて来るワン子を受け止める。

「説得フェイズにすら辿り着けなかった模様」

「よしよし、頑張ったなあ」

ワン子を撫でて慰めるとだんだん涙目が解除される。

「壊滅的に使えん馬鹿だな、モロお前はどーよ？」

「んー。僕も京と同じで反対かな。今更新しいメンバーとか気を使っちゃうよ」

「よく言ったモロ。キノコゾーンに來なさい。二人で胞子を飛ばして、皆を洗脳しよう」

「大和、お前はどよう」

「俺は・・・反対かな。あいつ自身がここに馴染むかねえ」

「賛成3反対3様子見1か。こりゃ見事にバラけた」

「残りは実質一人だしな」

「だね」

「ん〜？」

「ユキは語に付和雷同するだろうしな。ってなわけでお前の意見で決まりだ語」

「これは・・・私達には不利すぎる・・・」

「賛成、だな」

「やっぱり・・・」

「ふふん さすがだぜ語。理由をお聞かせ願うぜ」

「幼馴染だかな。それ抜きでも異国で1人は寂しいだろ」

「やっぱり優しいね、語は・・・」

「カタリ〜優しい」

「賛成多数だな。じゃ、クリスには声かけるぜ。まとめると、京なんかは不満そうだが・・・空気悪くなりそうだったら遠慮なく切るって事で・・・そんでもう一つの議題だ・・・」

「あれ、まだあるの？」

「ああ、語とクリスの関係についてだ！」

女性陣一同の動きが停止する。な、なんだこの空気の代わり様は！？その後俺は洗いざらい彼女との過去（関係重視）で放さなければいけないかった。か、勘弁してくれ・・・

クリスと俺との関係は無事解決、現在はみんなでのんびりとクッキーが持つて来た飲み物を飲んでくつろぐ。

飲む物は皆それぞれ個性的だ・・・ガクトは肉汁なんて飲んでいゑる。ユキはマシユマロサイダー、マシユマロ浮いてるじゃんか！京は天帝ハバネロカイザードリンクなんて真っ赤に染まった飲み物を飲んでゑる。ちなみに俺は紅茶だ。

「で、明日は何して遊ぼうかしら？　ね？　ね？」

ワン子の言葉を皮切りに明日の遊びの話になった。

「うーん、そうだな」

「いい天気らしいぜ。春爛漫だし河原で遊ばね？」

皆が次々と賛同していった。そして朝10時に河原に集合ということになった。

「具体的に何するのかな？」

「かくれんぼ」

「最後、モロが鬼になったら皆隠れないでそのまま帰宅するんだよな」

「小学生の時のアレは鬼畜すぎだよ！！トラウマ」

確かにそんな事もあったな・・・今はそんな事しない・・・はずだ・
・

「お互い、いじめられっ子はきつかったね」

「モロは俺様が庇護してからそうでもないぞ」

「つーかガクトが一番いじってくれたよね」

この2人は風間ファミリーができる前からの付き合いであり一緒に行動している事が多い。

「いじる……肉体的な意味で？ ぽ」

一緒にいる事が多いので、時たま誤解されることもある。

「違うよ！ なんてそういうモノの見方するの」

「男子と男子が絡み会う……アリだから」

京はBLが好きらしいが俺にはよくわからない。

「？何の話？」

「ユキは知らなくていい境地だから」

無垢な瞳で質問するユキが眩しい。

「アリなのかしら。お姉様はどう思う？」

「周囲にロクな異性がないと同性に走るといっし」

「それはモモ先輩のケースでしょうか！」

モモ先輩の言葉にモロがツツコミを入れるさすが風間ファミリーのツツコミ役、鋭いツツコミだ。

「レスではないぞ。男共誰か私をときめかせてみる」

モモ先輩が俺達を見ながら半ば呆れた様に言う。

「僕には無理すぎてパス。ガクトどうぞ」

「俺様フられ続きで今はパス。キャップいけよ」

「えー、恋に生きるは切なすぎるぜ。大和いけよ」

「危険な気がするのでパス。語いけよ」

たらい回しにされていき、最後は俺には回ってきた。

「俺か!?!?!?!んじゃモモ先輩壁に寄り掛かって」

「ん?なんでだ?」

「まあときめかせる為のシチュエーションだよ」

「まあやってやろう」

そう言う壁に寄り掛かるモモ先輩。んじややりますか。モモ先輩の顔の横に右手をドンと突く。モモ先輩は驚いた表情だ。

「百代……」

低い声で男らしさをアピール。クイツと左手で顎を持ち上げる。不敵な笑みを浮かべる。

「俺のもんになれよ」

なんだかモモ先輩の顔が徐々に赤みが増していく。何故だろ？

「とつまあこんな感じでときめかせてみました。どうモモ先輩？」

「あ、ああ。な、なかなかだ」

なぜかまだ顔が赤い。風邪？

「えい」

「ぐはっ！！」

ゴスツと横腹にとてつもない衝撃が来る。

「なんか気に食わない」

振り返るとユキがそんな事を言いながら。若干ご機嫌斜め。理不尽だ！！その後ろを見ると、京とワン子まで不機嫌そうな顔だった。不機嫌な理由がわからず夜は過ぎて行った・・・

「クリス、マジで寝るのか？」

「あ、ああ」

「はぁ～んじゃ電気消すぞ」

なぜこんな状況かと言うと。帰って風呂入って部屋で新しいメニューのレシピを考えていたらクリスマスが部屋に来て一緒に寝て欲しいとお願いしてきた・・・それでこの状況。まあ異国で寂しいんだろ。

「カタリ、そつちに寄つてもいいか？」

「ああ、もう自棄^{やけ}だ。いいぜ」

「あ、ありがとう」

そのまま俺達は手が触れるくらいの距離まで近づいた。安心したのかクリスマスは直ぐ規則正しい寝息をたて寝てしまった。それにつられる様に俺も直ぐに寝てしまった・・・

7話（後書き）

いやー何だか久しぶりって気がしてならない錯覚を覚えるザンです。
今書き貯めしてるので若干余裕がある、のですが書く暇が余りにも
少ないので悪戦苦闘しています。

今日はクリス加入の予兆部分を投稿させていただきましたが、どう
ですか？

皆さまの感想お待ちしております。

現在では誰をヒロインにするか迷っています。皆さんの意見を聞か
せて下さい！

ではまた次回。シュバツ！！

技の紹介

どうもこの作品の主人公の焰語だ。今回は俺の技を紹介しようと思う。

まあぶちやけ色んな作品のパクリだからそこら辺は二次創作と諦めてくれ。

んじゃ紹介するぜ。

先ず一つ目は【矢風（やなぎ）】。これは相手の攻撃がどう来るのかを予測、言わば見切りの極みなんだ。この技は6話でのクリス戦で最初に攻撃をいなした時に使ったんだ。矢風は常時発動型で大抵普通の状態で初撃はかわせる便利な技だ。

次に【白刃（しらば）】。まあただの手刀突きだ、ただ高速で繰り出すから摩擦で手がやられない様に手に気を纏わせてやってるから白く見えるんだ。

【狼牙（ろうが）】はテイルズオブヴェスペリアの主人公ユーリの技を真似たもんだ。気をオオカミ見たいな形にしてそれを前面打ち出す広範囲一掃型の技、不良集団殲滅によく使うんだ。

後はまだ出て無いものばっかだけど紹介するな。

先ずは【鎌狩（かまがり）】 手刀や足刀、それに気で作った武器

とかを高速で振ってで風を使ったカマイタチを起こす遠距離技。これは牽制に使うんだ。

【喧嘩の華】 高速ラッシュで両腕を出鱈目に相手に拳を打ち込む、どこでもいいから打ち込むんで相手を怯ませる、のが本来の形なんだけど現在では喧嘩の時に最速大量殲滅として使ってるんだ。はあゝ

気を取り直して次だ【急撃（きゅうげき）】 1撃のパンチで10回の攻撃が当たるジンプのトリコの釘パンチを真似したら出来ちゃった技なんだよねえ。

【幻魔（げんま）】 自分の分身を気で作って相手が注目している間に隙を突いて奇襲をかける技、これも戦国BASARAの毛利元就の技をパクったんだけどね。ちなみにこれは俺の意思で動かしたり出来るんだ、さらに爆発も出来るんだよね。

【螺旋丸（らせんがん）】 まあ丸パクリのダメな技だ・・・元ネタはジャンプのナルトの技だ。

【小帝（しょうてい）】 気の丸い塊を手の平で潰してそれを体にとり込んで身体能力を極限まであげる技。使うと体に若干のダメージが蓄積されるけど身体能力がかなり上がるから対モモ先輩とか四天王クラスにしか使わない最終奥義だ。コレの元ネタはネギまの主人公が使う禁忌・闇魔法だ。

まああとはほかにたくさん技とか色々あるけどそれはまた追々説明するから、それか後書きとかでどうにかして教えるから。

これから日常が変わる、でも俺はみんなの笑顔を崩す奴は何が何で

も阻止するぜ!!

んじゃ本編を楽しみにしてくれ・・・またな!!

技の紹介（後書き）

使ってほしい技とかあったら詳細を記入の上、感想の所に掲載してください！

次回もよろしくお願いします。

8話（前書き）

ども〜ザンです。

皆さんの応援で何とか更新ができています。

とても感謝です！

それでは本編をどうぞ！

8話

土曜は基本的に学校は休み。そんな朝、目が覚めると俺はクリスを抱き枕にしていた。

「（ちょ、クリスの吐息がああああ！！！！）」

クリスはまだ気持ち良さそうに寝ているので全力で心の中で叫ぶ。直ぐに布団から（音も無く）飛び出る。

「（やばいよ！中將に殺されるよ俺！！）」

壁に張り付きながらこれからの自分がされるであろう拷問に数十分思いを馳せた。復活し覚悟を決め今日を生きようと決めた。

「諦めて今日を楽しもう・・・まずいつものするか」

開き直り今を生きて行くことを誓い、俺はそのまま動きやすい格好に着替えランニングしに出かけた。

「うしっ始めっかな」

河原に着くと上着を脱ぎＴシャツ一枚で精神統一と筋トレを兼ね片手逆立ち腕立て伏せをする。200回まで来て300回を目指そうと続けていると、

「カゝタゝリゝ！！」

「ん、わ、ワン子！？待てっ止まぐわっ！！」

止まれと言おうとした時既にワン子は俺にダイブしていて止められぬまま倒れ込む・・・河原に・・・

「ぐわああああああ！！いつてええええええええええ！！」

河原に転がる小石で過激なそれこそ皮膚が剥がれるんじゃないかぐらいの痛さで悶える俺。

「え、ええええええ！？ただただ大丈夫！！」

俺の上で行っても心配してる様には見えないぞワン子。ワン子は若干涙目で俺の事を心配してくれる、この元気がワン子の良い所でもあるがちよっと考えて欲しかった。

「うつうつう・・・ご、ごめんなさい」

何とか背中に大きな傷は出来なかったが（不思議だ）ワン子は正座しながら涙目で俺を見詰める。体勢的に上目使いになるのだが・・・カワイイと思えるのは俺だけだろうか？

「もう大丈夫だか。ほらキズも無いわけだし。この話は終わりだ」

「う、うん」

「はあー、ほれこれでも食え」

ワン子は納得できないのかまだショボオンとしているので常備して

いるジャーキーを口に詰める。

「もぐもぐ、まぐまぐ」

機嫌を直したのかもぐもぐと口を動かしジャーキーを咀嚼させた。
そのままワン子と鍛錬を始める。

「はあ、やつ、てりやああああ!!!!」

「ん、ほいほい」

ワン子の繰り出す常人では捉える事の難しい攻撃。右のフック、左の下段蹴り、顔面へのハイキックを全て手で完璧に受け流す。

「ワン子、少しフェイントを入れる。毎回毎回当てる気で来ると体力が無駄に駄々漏れるからな」

「わかつ、てるつ、わよ!!」

「おっ!!? いいぞ今の。もつとだ」

ワン子の攻撃は絶対当てる気で行く節がるから先ずはソコを改善させる。そのまま少しの間打ち合うと次のメニューに移る。

「んじゃ先ずは鎌狩教えてやる。ってもアレは斬撃を飛ばす技だ。直ぐにワン子も出来る」

「そうなの!? んじゃ教えて教えて!!」

「まずはどれだけ速く振れるかだ、それと飛ばす気で撃つことだ。」

まあ先ずは・・・この川に向かって振って見る。そこで水がちょっとでも割れたら成功に近づくからな」

「分かったわ！」

そのまま1時間ほどワン子はひたすら多馬川に向かって薙刀を振る光景が続いた。

「んじゃ今日は終了だ。遊んだ後に鍛錬するんだろ。この前の約束で付き合ってやるから」

「うん、ありがとカタリ」

「はは、何だよ俺達仲間だろ、んじゃまた後でな」

「うん、じゃねっ」

ワン子はダアアアと走って川神院まで帰っていった。俺も島津寮に一旦帰って大和達と朝食を食べ河原に来た。

「四番、ファースト、島津ーっ」と

ガクトがバットを構える。対する投手は京だ。

「ガクトか。空振りとりやすい相手かな」

ちなみに俺は審判だ。俺達は今野球をしながら遊んでいる。

「ウルア！ 来い京。ヒョロツ球を太平洋にまで飛ばす」

「ガクト、三振すんなよ」

「そうだな、結構いい球投げるぞ京は」

グローブを構えながらモモ先輩が言う。京は弓を使うが投擲の様なこともできる。だから、投手もかなり上手だ。

「ライトー、レフトー、センター、よろしくねー」

「任せとけーズバツと投げろ」

「どんな球来ても捕るよー」

「バツチコイ」

ライトの大和とレフトのワン子、センターのユキが元氣良く声を上げる。

「ガクト分かってると思うが、痛烈な当たり以外、内野ゴロはアウトだからな」

「ゴロなんて論外！ 俺様はHRのみ目指す！」

「さすが和製大砲、カッコイイ」

遊んでいる俺達を、クリスが見物している。

「野球……か」

「まあテキトーな投手対打者勝負なんだけどな、俺達いつもこーやって遊んでるだ」

クリスはキャップが勧誘することになった。まあ、発案がキャップなのだから当然だな

「それっ、ハンサムには打てないボール！」

京がボールを投げる。

「マジで」

ガクトが京の言葉に反応して空振りした。

「１ストライク！！」

俺がストライクを宣言する。

「ずりいぞ。マジメにやれ京」

「断る」

ガクトが文句を言つも京はほとんど気にしていない。さすがにこのままでは、勝負にならない。

「京ー！ 真面目に勝負してやれよー」

「承る」

京は俺の要求には応じたようだ。相変わらず従順というか、何と
うか・・・

「なんかもうね・・・絶対打ってやるよ」

京がボールを投げた。これは割と良い球だ。

「フン」

ガクトがバットを振り抜くと良い音が聞こえてくる。

「あれ、打たれた？」

「行った！ これは球場だったら文句なくバックスクリーン直撃だ
ろ」

確かにここが球場だったならそうだっただろう・・・”球場”だっ
たなら・・・

「甘いガクト。快速の外野を忘れてはいけない」

そうここは河原なのでフェンスがない。だから河原が続く限りボ
ールを追いかけることができる。

「はっはー！！ ジャンピング、キャッチ」

「アウトー」

「あ、僕の球」

ワン子がボールを追いかけてジャンプしてボールをキャッチしたのだ。ユキのポジションまで守備範囲内とは驚きだ。

「センターの仕事も奪うとはビバ、ワン子。私の勝ちね」

「ちよつ、あれ入ってる飛距離だろ、ワン子ずりい」

ガクトが俺に向かって抗議してくる。テレビで見る監督が審判に抗議している状況はこんな感じだろうか？

「アウトー、アウトー」

ガクトの抗議に対抗して、俺はガクトにアウトを連呼する。

「何だこれ、イラッときた。ちよつと打席立て語」

「何だ？ 俺とやろうつてのか」

ガクトに勝負を挑まれたので受けて立つ。俺はバットを構えガクトの投げるモーションを待つ。

「くらえっ！ 豪速俺様最強球！！」

なんだかネーミングセンスの欠けるボールを投げる。まあ俺は武术をして身体能力が上がっているためモーションだけで何が来るか分かる・・・ガクトの場合は力任せのストレート”しか”投げれない

ので意味をなさないがな・・・

「ほいっと」

「おがつ！」

ストレートと真ん中に来た球を軽くバットを振って撃ち返す。するとクリーンヒットした・・・ガクトの顔面に。

「もういっちょ」

「がふっ！」

ガクトの顔面からこっちにいい感じで戻って来たのもう一度スイング。狙いはまた顔面、またもやクリーンヒットする。

「あ、アレはどうかと思うが・・・楽しそうだ」

野球を見ていたクリスがキャップに向かって言った。

「そう思うならクリスも仲間に入れよ」

「いいのか？」

クリスが期待が籠った目でキャップを見る。

「皆で話し合ってOKが出てるんだ。歓迎する」

「ありがとう、いきなりこんなに友達が増えるとは嬉しいな」

モロが俺達の所に駆け寄って来た。クリスとキャンプの話が終わったのだろう。

「クリスと話ついたよー。入るってー」

予想はしていたが、クリスは風間ファミリーに入るって事になったようだ。

「おう、よろしくなー!!」

「それじゃあ今夜は島津寮でプチ宴だな。川神院から肉を持ってそっちにいくぞ」

モモ先輩が俺に話しかけてくる。

「つまり、俺に料理しろと・・・」

「当たり前だろう？ 他に誰がするんだ、それにカタリの作る料理は美味いからな」

モモ先輩にそう言われると悪い気はしない。しょうがない、今日も腕を振るうとしますか・・・折角の風間ファミリーの新メンバー加入だ・・・それに幼馴染との再会だからな・・・

「そしてその後は、親密度を深めるために一緒に風呂だ！」

「どっちかって言うとお風呂の方が目的だよなモモ先輩は・・・」

しかし、最近のモモ先輩は欲求不満が溜まっている様に見える。恐らく満足する戦いをしてないせいだろう。俺もモモ先輩程じゃないが欲求不満であることには変わりはない。そのうち、モモ先輩と本気で戦う方法を見つけなくちゃな・・・

「クリス、こっち入るってさー！」

「おー、あっさり加入してきたわねえ。クリー！ このグループじゃアタシが先輩。そこんこよく考えて敬いなさいよー！」

ワン子がクリスに向かって先輩風を吹かせている。いや、吹かせているつもりなんだろう・・・可愛いものだ。

「犬か・・・やはり何回見ても納得いかないな」

「・・・ワン子に文句があるわけ？」

クリスの言葉にモロが反応する。クリスのワン子に対する言葉にムツときたのだろう。

「あ、そうではない。断じて違う。ただ学長や百代殿と比べると同じ一族とは・・・」

クリスは自分のワン子に対する感想を口にする。

「ああ、ワン子は養女だから」

「え!？」

キャップの一言にクリスの表情が驚きに変わった。

「ワン子元々孤児だったのを引き取ってもらって。で、その引き取り手もおばあちゃんだったんで亡くなつて。で、モモ先輩……つか川神院が引き取った」

「そうだったのか……」

キャップからワン子の身の上話を聞いたクリスが暗い顔になった。

「？ 別に悲しい話でもないぜ。ブルーになんなよ」

「地元の人達は大抵知ってることだしね」

キャップ達がクリスにフォローを入れる。

「そうとも知らず無神経な発言を昨日したんだ。川神院でお前だけ浮いている……と直にいった……」

「ワン子にか？ それはひどいな、いじめっこー」

キャップがからかうように煽りを入れる。

「う……あ、謝ってくる」

クリスはワン子に謝りに行こうとするがキャップがそれを止めた。

「冗談だって！ 今更蒸し返すなって！」

「大丈夫。ワン子、クリスが入る事反対してないし、過程はどうあれ今は家族だしねー」

「そういえばあの時、大和が犬の頭を撫でていた」

「さりげなく気に掛けてるな、流石軍師大和だな」

「そうだったのか……」

クリスは昨日自分がワン子に言った言葉を反省しているようだった。

「いつまでそんな顔してんだ。気にすんな」

キャップがクリス言葉をかけてクリスは皆がいる場所へと向かった。

「クリス、これからよろしくな」

「ああ、こちらこそ」

こうして、クリスは俺達と遊ぶ事になった。

8話（後書き）

うーん、まともな戦闘シーンを書きたいですが・・・

なにぶん文才がなくて・・・どうしよか迷ってます。

まあ頑張ってみます！

告知！

皆さまからのリクエストをちよくちよく出して行きたいと思います。

書いて欲しいと思ったらリクエストしてください。

ここで注意ですが、原作を知らないので余り知らないキャラクターは書けません。

それとグダグダになる可能性があります。

それと出来れば詳しく記入していただくとありがたいです。

あと、リクエストされても投稿されない場合がありますがそこはご了承ください。

ではまた次回！

9 話（前書き）

どうも～ザンです

皆さまの温かい声援のおかげでここまで来れますた

これからもがんばります！

では本編です

9 話

夕暮れ時の河原、皆と遊んだ後、俺はワン子の修行に付き合っていた。

「ワン子、ダッシュそれでラストな―」

ワン子に声をかける。近くで子供が3人ひねくれた事を言っているが気にしない。そんな中、ワン子と同じ孤児院の出身でクラスメイトでもある、源 忠勝がやって来た。

「ふーっ。はあはあっ、ダッシュ50本終わり。はあ・・・はあ・・・あゝ、もう1セットやっところ」

ワン子はもう50本走ろうとしている。ゲンさんは俺を通り越してワン子の所に向かって行った。

「一子。お疲れ。ほらよドリンクの差し入れだ」

「おっゲンさん、俺には？」

「ほらよ、お前にはお茶だ」

ゲンさんが俺にペットボトルのお茶を放ってよこす。

「だが勘違いするなよ、後でウダウダ文句言われんのがウゼエだけ

だからな」

ゲンさんは何だかんだ言いながら、かなり良い人だ。

「タツちゃん。いつもありがとうー」

「今日は他の馬鹿共はいないのか？」

ワン子とゲンさんが世間話をしながら、孤児院の仲間の事を話している。こういう時は、何も聞かずお茶でも飲んでいよう。こういう2人だけの会話を邪魔するものじゃない。ラベルに「ほおおいつおあちゃああ!!」と書いている。味は・・・うん、人外しか飲めない物だと言っておこう。

「アタシもう1セットやるね!」

「ああ、俺はここで寝ながら見物してるさ」

ゲンさんは夜も仕事らしい。ゲンさんは親代わりの宇佐美うさみ 巨人きょじんが経営する宇佐美代行センターで働いている。仕事は何でも屋の様な物らしい。

「夜も仕事か？」

「学校なんざやめて仕事に集中したいぜ」

「だめだよー。学生生活は1度しかないんだから」

ゲンさんの言葉をワン子が軽く注意する。確かに1度しかないのだから、できるだけ楽しんだ方が良いと思う。

「オヤジと同じ事言いやがるのな」

ゲンさんはふつと笑うと草むらに横になった。

「ファイトー！！！」

走っているワン子の声が聞こえてくる。

「・・・変わったなあ一子。昔は泣き虫だったのに」

「憧れの人や夢ができたからじゃないか？」

ゲンさんの隣に腰を下ろして、ワン子の走るのを眺める。

「女ってのは、たくましいぜ」

「そーゆう女は好きだな、俺」

でも結構周りに多いけどなと付け足す。それから、走るタイムを計ってったりマッサージ等をしてワン子の修行に付き合った。

「よし、じゃあ始めるか。語・・・焼け！！」

「ん、カタリは料理ができるのか？」

クリスが驚いた様に聞いてくる。

「今日の昼にも河原で弁当を食べただろ」

「あれも、カタリが作っていたのか」

「まあ数年も1人じゃあ自然と身に着くさ」

そう言つてバーベキューセットの前に立つ。右側に配置された台の上から更に盛られた食材（肉の串刺し）を指の間に右に4、左に4本持ち構える。

「それだは焼かせていただきます・・・見よ我が奥義！！」

肉を網の上に並べて行き目にも止まらぬ早さで肉を焼いていく。

「豪火（豪華な火の略）！！！！」

見る見るうちに肉が食べごろの肉が焼けて行く。それをみんな出来た傍から食らいつく。わずかに肉を焼き終えるスピードが上回る。

「・・・すごいな・・・」

「早く食えよ、無くなるぞ。あつ俺の肉だぞお！」

クリスはこの光景に若干呆けていたが直ぐに肉を食べ始める。俺は焼くことに集中していて周りが見えない状態だったがなんだか2階の1年生も誘つたみたいだ。それに京とクリスが何だか話しているのが目の端に映った。仲良きことは良いかな良いかな。

やっと全ての肉との戦いを終えみんなと楽しい会話を楽しんだ。

「ふふ。さーてでは風呂つて来るか、なあクリス」

「はい・・・随分と嬉しそうですね」

食事の片付けも終わり、モモ先輩お待ちかねのお風呂の時間がやってきた。

「うん。ほらアノ2人も嬉しそうだ」

「「お風呂、お風呂」「」

ユキとワン子のはしゃぎながら2階へ上がって行った。

「な？ふふふ」

「それとは別の嬉しさにも見えますが・・・」

クリスが少し警戒している、確かに今のモモ先輩は露骨過ぎる。

「気のせいだ」

「そうですか。では気のせいなのですね」

クリスが納得してしまった。モモ先輩は尤もらしい事言いながら更にクリスを丸め込んでいく。そして、クリスが上に上がって行くと

モモ先輩が俺に振り返った。

「ではな、語。じーーーーっくり見てくるぞ」

「一々報告しなくていいですよ」

「わかってるさ、ところで・・・写メ1枚3万円でどうだ」

モモ先輩が俺にそつと耳打ちしてきた、なに写めるんだろ？キツチンに戻ると黛がいた。

「ちよつ、聞いたまゆっち。皆で風呂とかスツゲエな」

「レベルが高すぎて、私の頭はクラクラです」

黛はまた馬のストラップと話している。何してんだろ？

「でもこれチャンスじゃね、いけんじゃねまゆっち」

「と、言いますと？」

「えへへ、えへへ、私も入る」と言つて風呂場乱入」

「無理無理無理無理！！！」

「さっきから何してんの？」

黛の耳元で囁いてみる。

「そ、そんな・・・私ごときが・・・そんな、お友達レベルの高い・

・・って語さん」

「やつ」

手を軽く挙げる、黛の目と俺の目が合う。そして、一時の静寂・・

「いつ、いえ、これはですね。あの、その・・・・・しつ、失礼します」

黛は慌てふためきながらも、絶妙なバランスでこけることなく、2階へ上がって言った。

暇になったので自分の部屋に戻ると。何故か敷いた覚えの無い布団が敷かれていて、布団が人が入っているようにかなり盛り上がっている。

「京、ユキ、お前何やってんだよ」

布団をめくると同時に京とユキに声をかける。ユキは速攻で風呂から出たのかまだ髪が乾き切っていない。

「語専用の抱きまくらが、布団を温めてました」

「ました〜」

京とユキがさも当然のように俺の布団の中に入っていた。

「……お前ら何やってんだ？」

「たまにはこんなサプライズで攻めてみようかと」

「僕は暇だったから、カタリと寝ようと思ったんだ」

京はそう言うが、京が俺がいない時に俺の部屋に来るのは精神的に不安定な時が多い。ユキは京を心配しての行動だろ。

「……京、仲間の前じゃ無理すんなって言ってんだろ……しかたねえから俺の布団温めさせてやるよ……ユキ、お前髪乾かして来い、それで部屋戻れ」

「えゝ、ぶーぶー」

「ぶう垂れるな」

ユキはぶつぶつ言いながらも部屋から出て行く。京の頭を撫でながらそう言う。だいたいの場合こうしていれば京は落ち着く。また、小さい頃の事でも思い出したのだろうか？俺はそれから京が落ち着くまで頭を撫で続けた。

しばらくすると……島津寮の2階から爆発音が聞こえてきた。

「モモ先輩……今度は何やったんだ？京、いくぞ」

「そうだね、いってみよう」

俺と京は島津寮へと向かった。誰かに事情を聞くこととした。島津寮に入ると調度玄関の前で姉さん達と岳人の母親の麗子さんに会った。

「……………と言う訳でね2階の女子用のお風呂が使えなくなっちゃたのよ」

麗子さんの話では姉さんがクリスに迫るうちに破壊されたみたいだが。恐らく力を抑えていても欲求不満のせいで無意識に力を使ってしまったのだろう。で、時間を決めて男女別で1階の風呂を使う事になった。

「……………という事に決まったみたいよ京」

「男女混浴になるんだ。ハアハア」

「混浴になるんだ。カタリと一緒にだね」

「入るのは別々だからな」

そんなことすれば2人は俺が入っている時を狙い澄まして乱入することは見るからに明らかだった。最悪俺の身に危険が及ぶ……………鬱だ……………

「そして女の子が入浴中に語がバツタリ。分かります」

「ありえないと言いきれないのが怖いな……………」

「いや、そこは否定しろよ語」

大和にはそう言われたが、そんな事を言っている大和と俺は何故か
そういう星の下に生まれた気がする。

「クリスと黛にも話していた方がいいな・・・京、2階に上がるぜ」

「うん、寮の女子として2階に上がる事を許可」

京から許可を得て寮の2階に上がる、気配からして黛の部屋に二人
共いる様だ。

「クリス、黛いいか？」

ノックして声をかけるとすぐに返事が返ってきた。

「どっ、どうぞ」

部屋に入ると二人が俺を見てきた。

「どうしたんだ？ カタリ？」

「ああ、麗子さんから話は聞いたか？」

「ああ、1階の男子のお風呂を使うんだろう」

クリスはさっき俺達が来る前に2階に上がったのか。

「んや、知ってるならいいんだ。お休み（札でも作って入浴中分かる様にするかな）」

そんな事を考え一人に挨拶をして自分の部屋に戻った。

9 話（後書き）

如何でしたか？

みなさまの楽しめる様な作品目指して日々努力！

機動戦士ザンダムことザンは皆さまの声援が電源です（声援1つで
30年もつエコでクリーンが目標・・・きっと・・・）

これからもよろしくお願いいたします！

10話（前書き）

やっと10話投稿出来た（涙）

皆さま方の声援これからも起動します！

作者の至福の一時はキレイな貝殻を見つけることです！（ウソ）

10話

本日は日曜、明日が辛い日。春とは言えまだ朝は寒い。そんなまだみんなが寝ている中、起床する。着替えてランニングを兼ねて河原に向かう。

「・・・ん・・・ふっ」

準備運動を済ませる。

「・・・ふう・・・」

冷たい空気を肺に入れ呼吸を静かに誰もいない河原。あるのは俺と地面・・・世界は徐々に音を無くし無音の空間を形成する。ゆっくりと空気を吐く、吸う、吐くを繰り返す。そしてゆっくりと内にある気を外に出して行き口を開く・・・

「　　小さき心に草原、黒き虚城　　」

優しく、慈しむように・・・。体中の気が体を駆け巡る。

「　　存在を許された皇帝　　」

思い描くは世界の・・・。気が肉眼で確認できる程、圧縮して出来た気が掌でサッカーボール程の大きさに乱回転している。

「　　玉座に居座るのはただ一人　　」

体中の気を一気に収縮させテニスボール程の大きさにする。

「彼の者の名は」

テニスボール状の気が激しい回転を始め掌から拡散するかのよう
に暴れる。

「『小帝』」

グシャと音を立てソレを握りつぶす・・・次第に俺に変化が訪れる。
肌の色が褐色になる、瞳の色はエメラルド、髪は金髪になる。それ
はまさに小さな皇帝が孤高な草原に威風堂々と居座るが如く。王の
気品を露わにし、表した。

「ふう、やつぱしコレきちいぜ。出力30パーでコレだもんな」

あの状態で30分ほど精神統一を終え、1人その場に腰を降ろしこ
ちる。まだ体を包む空気は冷たいままだが日差しのおかげで温かい。

「ふうああああ・・・ねむ・・・」

そのまま俺は一眠りもいいかと思ひ眠る。

「・・・なんぞ？この状況・・・」

俺の腹にワン子が気持ち良さそうに寝ている。何故？

「おいワン子起きろ、何故お前はここで寝てる」

「ふへ？」

若干寝ぼけ顔のワン子を揺すり起こすがまだボーっとしているのでジャーキーを目の前に出す。

「ワン子ゝジャーキーだぞゝ」

「寄こしなさい！！」

一発で起きた。ホント欲望に忠実つつつか、欲だけで行動してる奴だな。

「まあいいや、ワン子お前時間大丈夫か？」

「ひゃへ？」

「じーかーん。飯だよ。門下生達と食うんじゃねーの？」

「ひゃばっ！！むぐむぐ。じゃあねっ！！」

慌ただしくジャーキーを食べ切り川神院に向かい駆け出す。ホント何しに来たんだ？

「そんじゃ俺もかーえろっ」

荷物を持って寮に帰宅。してみんなの朝食を作る、そしてみんなで食事。

「今日どうすつかね？」

「予定なしなのか？」

「ああ、暇なんだよ」

「暇じゃないよ、私と絡み合う予定がある」

「んーそろそろ語り屋で稼がねーとヤベーし、今日は開くかね」

「無視？それもいつ！！」

色欲魔人は恍惚の表情で悶えているが無視だ。

「んじゃバイト？」

「そうだな昼から夕方ぐらいですか」

「姉さんは無理だろ、んじゃ京、ユキ、俺か」

「だな、んじゃこれから材料調達な。よろしくバイト諸君」

「うえーい」

「おk」

「わかった」

ユキはやる気ない返事するが意外に接客ができる、大和も余り好きではそうでは無いが接客と偶に呼び込み、京は激辛料理”のみ”担当

当、なぜか辛党の人で京の料理は人気だから不思議だ。

「?なにをするんだ?」

「ん、ああ。仕事だよ俺自分で稼いだ金で学費とか寮費払ってるから。クリスマスも来るといいよ」

「そうなのか、それじゃあ昼はそこでいただくでしょう。場所はどこだ?」

「んー今日はどこにしようか?軍師、人の集まりそうどこない?」

「んーそうだな・・・仲見世通りなんかいいんじゃないか?」

「おk、んじゃ今日はそこで」

「そこで?店は色々あるのか?」

「んや、屋台だか俺の店」

「YATAIなのか、カタリの店は!!」

「ああ、俺こんな性格だから気分しだいで出すんだよ」

「商売としていいのか、それは?」

「いいんだよ、力^{りき}んでも良いモンできんからな」

「カタリはユルユルだもんな」

「ユルユル」

「はいはい、んじゃ買い物行くぞ」

朝食を終え七浜までみんなで買い物をしに行った。今日の市場は結構な賑わいで良い魚や肉、野菜が安価な値段で買えた。儲け儲け、そのまま仲見世通りで開店準備をする。しばらくして開店、すると見計らったかの様に客が押し寄せた。それを4人で捌く。

「パエリアと刺身にビール3」

「焼き鳥、ビール2、おススメ4、カレーだつて」

「へいへい・・・ほれオムレツにたこ焼き3、激辛ビビンバだ、1
2卓と34卓な」

「おk」

「うえゝい」

シユバシユババとちゃっちゃと腕が自動で動かし、色々と注文の品を作る。その腕は傍からみれば千手観音の如く手が残像になる。相変わらず色んな料理が注文される、なぜか注文された材料があるが気にせず料理をすすめる。

「ふうー、終わったなー」

「だな、なぜこんなに客が来るか不思議だが、儲けた」

5時を回った所でラストオーダー、それから1時間料理を作り続けた。今は5人で帰宅中。5人目はクリスマス、途中で参加して日給を払った。ちなみに今日の稼ぎは43万円、5万ずつ配当した。

「……………ただいまー……………」

「んじゃ俺飯作るから」

台所に向かうと台所の前にキャップが立っていた。

「今日はカタリの出番無いかもな。爆睡から目覚めたら……………あんな光景が」

キャップの言葉に従って台所を見える、するとそこには……………

「あ、焰先輩、お、お帰りなさいです」

薫が料理をしていた。しかも、かなり手慣れている。

「き、今日は私が皆さんのご飯、作りますから」

俺は今の言葉を心の中で繰り返した、「皆さんのご飯作りますから……なんと甘美な響きだろうか……」

「焼き肉のお礼だと。料理得意らしいからってさ」

キャップがこうなった訳を説明してくれた。

「俺は今、感動している！！遂に島津寮に料理のできる女の子が！！」

もちろん京もできるのだが、不特定多数の人しか食べれない。その辛さから、戒めと侮蔑をもって「京カスタム」と呼ばれ恐れられている・・・フィクションです。

「悪いな、大抵俺が作ってるんだが・・・」

「あ、いいんですいいんです！！お礼に是非食べて欲しいんです！！」

黛の瞳に炎が見えた気がした。今回は俺も作るのではなく、食べることに専念しよう。

「気合い入ってるし、こりゃ楽しみだな」

みんなに事情を説明して風間ファミリーメンバーを呼ぶ事にした。

「モロ晩飯来られるってさ。スグルとアニメ見てた」

「つーことはガクトは別行動か」

ガクトの携帯を呼び出しているすぐにガクトが出た。

「オイオーイ。今女とやってんだから電話かけんな」

「そうか、邪魔したな。あと死ね」

ガクトがくだらない事を言うので、電話を切った。すぐにガクトから電話がかかってきた。

「冗談だよ！　すぐに切るとかやっぱリドSだろ、カタリ」

「勘違いしてんぞ、お前」だけ”別枠でカスの部類だ、だからお前の時はSとは言えないぞ」

「なにこの幼馴染容赦ねえええ！！」

「スタイル抜群の女子高生の手料理が食えるぞ。夕飯食いに来い」

俺は事実を正確に伝えた、ガクトが年上スキだろうが関係ない。黛はスタイル抜群だし女子高生だ。

「マジか！！・・・っておいそれ京の激辛殺人料理じゃないだろうな」

「寮の一年の女の子が焼き肉のお礼だそうだ」

ガクトは案外鋭いのかもしれない、誰とは分からなくても、自分の守備範囲外だと野生の勘かなにかで気づいたのだろう。

「・・・なんだ後輩かよ」

ガクトが明らかにガツカリした声になった。少なくとも俺は嘘は言っていない。

「日課の1人Hするところだ。イッてから行くぜ」

「死ねくんなボケ、カス。ガクト来るってさ」

「声大きいから聞こえてた、セクハラだよあの男は」

京が不機嫌そうに言う。食事前に男のあんな話を聞かされては不機嫌にもなるだろう。

「で、その、語は日課なのかな・・・きゃっ恥ずかしい」

京は俺の想像の上をいつていた。まさか、この話に繋ぐための布石だったとは・・・

「京・・・セクハラだぞそれ、俺が同じ事聞いたらどう思うよお前・・・」

「お望みなら詳細に答えるよ。えっと枕を語に見立てて・・・」

京はこのままだと本気で詳細に答えてしまう・・・俺は無理矢理に話を変える事にした。

「で？ モモ先輩達は来れるのか？」

「モモ先輩はスキップしながら来るって」

「女の子の手料理だから上機嫌だなモモ先輩」

確かに日頃から取り巻きの女の子から弁当をもらっている姉さんだ。女の子の手料理は嬉しくて仕方ないのだろう。

なんと言つか、姉さんと付き合う男はかなり大変そうだ。付き合っ

た後じゃなくて、付き合う前が特に、姉さんが男として認めるなんて並大抵の事では無理だろう。

「あ、ワン子はウサギ跳びしながら来るって」

「普通に來られないのかね？　ワン子は・・・」

「無理だろ、ワン子だし・・・」

「なんだとワン子は普通じゃねーってか？　ああん！」

「お前が行ったんだろ」

確かに、だが大和の言葉に妙に納得してしまう。既に俺の頭の中にはウサギ跳びをしながら来るワン子が周囲の視線を集めている光景が浮かんでいた。

「・・・・・・・・」

クリスが大和をじろじろ見ている。

「なんでクリスに睨まれてんだ？　大和？」

「実はすっかり着替えシーンに出くわして」

やっぱり、そうだった・・・俺と大和はそういう星の下に生まれているに違いない。

「大和・・・やっぱり入浴中の札作ねえとヤバいな。ガクトがやり兼ねんからな」

「大丈夫だろ、速攻で意識刈り取られるだろ。だがよろしく頼む」

「クリス、団体生活の中じゃよくあることだからあまり気にしない方がいいよ」

「そんなによくある事なのか？」

京がクリスに話しかけている、良い傾向だ。後は少しずつ学校でも友達を作っていけばいい。

「うん、よくあるよ。私もお風呂に入ろうとするとよく語の風呂上がりに出くわすもん」

「ほ、本当か!!」

もちろん京が言ってるのは、俺の家の風呂に狙って入ってきているのだが・・・せっかく京がクリスと仲良くなり初めたので。何だかクリスが思考顔で私もとか言ってるよ。ツツコムのはやめてスルーしよう。

「そっいえばクリスは、お昼とか何食べてたんだ？」

キャップが気になったのかクリスに尋ねる。

「INARI寿司だ!!!」

クリスが急に大きな声を出した。

「急に張り切りだしたぞ」

「カタリの店で食べたんだ、とても美味だ」

クリスの声はかなり嬉しそうだ。余程いなり寿司が気に入ったらしい。嬉しいねえ。

「いなり寿司が？」

「ああ！ いなり寿司が！」

クリスは力強く頷いて肯定した。俺の料理が口に合って何よりだ。

「そんなに好きなら、また作ってやるよ」

「本当か！？是非頼む、楽しみだ！！」

そんなに嬉しそうにされると作りがいがあるってものだ。その内、皆で弁当を食う時にでも作ってやろう。

「フム。それにしてもあの娘包丁とか手慣れてるね」

「実際、料理の腕前も相当な物だろうな……」

その後、しばらく黛の料理姿を見守っていた。

島津寮の居間に風間ファミリーが全員集まっていた。

「お、お口にあえば良いのですが……」

テーブルいっばいに料理がズラツと並んでいた。これだけの料理を作れるのだから、もう少し自信を持つてもいいと思うのだが……

「これは……美味そうだ……」

「肉のお返しとは粹な真似を。ありがたく食べるぞ」

「なんか料亭の出し物みたいだね、見た目が凄い」

「こりゃあ味も期待できるってもんだぜ。食おう!」

「いただきます!!」

ワン子の声が合図となって、皆が料理を食べだす。

（どうか、美味しいと感じますようにどうか、美味しいと感じますように）

（大事なことから2回言ったぜまゆっち）

「おお、美味しいなこの鯛のさしみ、花造りだっけか？ 見た目も凝ってるな」

モモ先輩を皮切りに皆が料理を褒めていく。そして、モモ先輩が俺の方を見た。

「で・・・風間ファミリーの料理役の感想は？」

「薫!!」

俺が声を上げると薫が緊張したようにビッとその場で立ったまま、固まってしまふ。

「合格!!」

「なっ、何にですか!？」

「俺の嫁に!!!!」

そう言って薫を思わず抱きしめてしまった。

「!!」

京がかなり驚いてる。勢いもあつたが、俺はとんでもないことを言つたかもしれない・・・

「まゆっちやべーよ友達通り越して求婚だよ」

「ま、松風・・・ここここ、こういう場合どうすれば!?!?」

薫も混乱しているようだ。まあいきなりこんなことをされれば誰でも混乱するだろうが・・・

「姉パンチ!!」

「妹キツク!!」

「ユキちゃんパンチ!!」

「正義の鉄槌!!」

「俺様も!!」

「ぐはあ!!」

モモ先輩、ワン子、ユキ、クリス、ガクトの連携5連撃を喰らってしまった。ガクト殺す!

「驚いているだろ、いきなり何やってるんだ、お前は?しかもイラツと来た」

「アタシもよ」

「僕も」

「自分もだ!!」

「俺様はその場のノリばっ!!」

ガクトは庭まで吹き飛ばしたした。

「ガクトも凄いよ」

「ああ、一級品のバカだ」

モモ先輩だけには言われたくないが、正しくもあるので何も言えない。

「大和・・・軍師として私はどうすれば良いと思う？」

「京はガンガン攻めろ、それが勝機になるはずだ！！」

「語、私の愛受け取って！！」

大和が余計な事を言った所為で俺が京に襲われそうになるが何とか食い止めた・・・大和は何か俺に恨みでもあるのだろうか？

そんなこんなで黨が落ち着き、俺が謝るまで、かなりの時間が掛かった。食事も終わり、皆満ち足りた顔をしていた。ちなみに俺は夕飯の洗い物だ黨に全部やらせるのは悪いし、さっきの詫びの意味を込めて皿洗いをした。今はワン子を膝に乗せ料理の余韻を楽しむ。

「ふー。お前うまいんだな料理。俺様食い過ぎた」

「はい、小さいころから母上に教えられまして」

「日本の食・・・誠に素晴らしい。今日に感謝だ。朝のアクシデントが無ければ最高の一日だった」

クリスは大和を見ながら朝の事を咎める。俺も覗いてしまわないように気をつければ。

「・・・・・・・・」

「おっと」

食事が終わりワン子はおねむらしく仕切りに目を擦っているが眠そうにフラフラしている。

「よく動きよく食べたら、もう眠い・・・か。ふふふ」

「まさしくワン子だねえ・・・」

ワン子はお腹がいっぱいになって眠くなってしまったらしい。食後の果物にリンゴでも切ろうと思ってたんだがなあ・・・

「で、なんか俺達に話があるんだろう後輩」

「は、はい・・・！」

キャップの言葉に黛が緊張している。一体何を言つつもりだろうか？

「そういう目してるもんな。何か決意してる」

「不眠症か？ 眠れるようにしてやろうか？」

モモ先輩は恐らく本気だ黛がはいと言おうものならすぐに黛の部屋に行ってしまうだろう。

「そ、そ、そーいっつではなくですね」

「！ そっか、すまねえな」

ガクトがいきなり黛に謝る。遂に頭が春になったのだろうか？

「彼氏が欲しいってんなら俺様は年下専門外なんだ」

「いきなり何勘違い発言してるんだお前バカか」

「バカでしょ」

「モモ先輩、バカじゃないガクトなんて存在するわけないじゃん」

「そうだった、ははは」

「辛い世の中になってきたな・・・」

ガクトが落ち込みながら、この世を悲観していたがいつもの事なので放置する。

「ねむー」

「ワン子、人の話はちゃんと聞こうな」

「ほい、語」

大和からリップクリームを受け取る。そして目の下に塗る・・・大和の目の下に。

「！？うわっスースーする！！」

「ワン子にそんな事できるか」

「なんで俺に塗るんだよ、ガクトにでも塗れよ！」

「容赦ないなお前達は」

「これも一つの友情の形だ・・・」

もちろん他人にこんな事はしない。仲間だから遠慮なしに接してくる。

「そーそー、俺様も寝てるカタリの額に肉ってマジックで書いた事あるしな」

確かに、そんな事があつた。

秘密基地から家に帰る途中、周りからクスクス笑われていたから鏡を見て見れば・・・額に某ヒーローの様に大きく肉と書いてあつた。

「ガクトあれはお前だつたか・・・後で48の殺人技の48つをかけてやる楽しみにしてろ」

「全部じゃねえか!!」

「おい！ 本当に友情の形なのか!？」

俺とガクトのやり取りを見ていたクリスが俺達の軽口に割って入ってきた。クリスも馴れればこんな事はコミュニケーションの一種だと分かるようになるだろう。

「や、やっぱりいいな!」

「何が？」

「私の魅力がか？ また妾が増えるのか」

モモ先輩はこれ以上ファン（妾）を増やしてどうする気なのだろう？

「……その空気が、凄く、いいですっ……あの、あの……あう……」

黛が何かを言いかけてやめてしまうそんなに言い難い事なのだろうか？まあ、大体何が言いたいか分かるが、こういうのは本人が言わなくちゃ意味がない。

「まゆっちGO！　ここは天下分け目だぜ！」

「うん、石田三成みたいな気分で行くね」

「なんで負ける方で行くんだよ！　しまいにはオラ小早川になって裏切るぞ！　今、徳川家康に鉄砲で催促されてっから」

「あつ、行けません弱気になってました」

「ここだと決めたら、迷っちゃいけねーぜ」

黛がまた携帯ストラップとコントを始める。これは癖なのだろうか？　見ている分には面白いので構わないが……

「この1年生大丈夫？　1人でブツブツ言ってるよ」

「いつもの事ではある」

「面白いよ〜」

「まじか見ると面白いな。しばらく観察しようぜ」

俺達はキャップの言う事には基本従う、皆で黨を觀察する。

「なんか小さい動物を見ている気分だ」

「めんこいつて事？」

俺も黨のオロオロしている姿は、可愛い感じがして良いと思う。しかし、モモ先輩はそれだけではないはずだ。

「めんこいかつ、それをこうメチャクチャにしたい」

「いや、やめとこうぜそれは……」

「他人事だと思うなよ、お前にもそう思う事あるぞー、カタリ」

恐ろしい事を言われた気がする。今日から気を付けよ。

「お、俺は可愛いって感じじゃないだろ!？」

モモ先輩の言葉が冗談である事を願って、聞いてみる。

「うっん、語は可愛い所あるよ、ね……モモ先輩」

「ああ、今度2人でメチャクチャにしような」

モモ先輩と京の笑い顔が綺麗過ぎて怖い……まさか笑顔に恐怖を感じる事になるとは……

「……すーはー……よし、言います、お願いします」

「いきなり頭を下げられたぞ」

いきなりの事に、さすがのモモ先輩も少々困惑気味だ。

「私も、皆さんの仲間にいらしてください。皆さんと一緒に遊びたいんです！」

黛の言いたい事は分かりやすいし酷く簡単な事だったかもしれない。しかし、黛の声は真剣そのものだ。

「あの、私、ずっと地元で友達いなくて……それで……それで……今度こそ友達をつて思つてこつちに出てきて……それででも作れなくて。そこで、皆さんが楽しそくにされていて……」

黛の言葉に昔の自分の記憶が甦る……

中学校の1年の2学期まで俺は荒れていた。川神院で鍛錬した力で不良やヤクザに喧嘩を売つては自分の中の悔しさと後悔を拭いたかった。

そんな時でもみんなは俺を必死で支えてくれた。

「私も、仲間に入れたらどんなに楽しいだろうって、だからお願いします、仲間に入れてください！」

京は反対するだろうが……俺は黛を入れても良いんじゃないかと考えていた。もちろん、さつき思い出した事だけが理由じゃない。

「私、食事作れます！掃除も自信あります！体力も人並みにはあります！だから……だか……ら……私を……仲間に入

れてはくさいませんかっ！！！」

不器用な言葉だったが、皆にも真剣さや想いは伝わったはずだ。皆で顔を見合わせ、視線で会議する。

（どうするの？）

（いれてやれば？　こんなに頼んでるし）

（私は反対。これじゃ際限なく人が増える）

（俺は良いと思うぜ）

（とりあえずここは俺に任せてくれ）

（ま、顔を立ててやるよ）

「？」

ユキは付いてこれなかったが、話し会った結果、キャップに任せる事になった。キャップはどうするつもりだろうか？

「黛由紀江さんだったけ」

「は……はい！」

「今のままじゃ、仲間には入れられない」

「……………あ」

黛の表情が目に見えて暗くなる。キャップは構わず言葉を続けた。

「仲間つてのは基本的に対等なもんだろ？土下座みたいな真似して何でもするから入れて！　とかで入るもんじゃないよな、普通に”面白そうだから私も入れて”で、いいぜ」

「あ．．．！」

黛もキャップの言いたい事が分かり、顔が明るくなっていく。そして、こう言った．．．．

「お、面白そうだから私も入れてください！」

「断る」

俺の耳がおかしくなったのだろうか？あそこまで言っというてキャップが断ると言っただよう．．．

「はあああうつ！？」

黛がショックのあまり仰向けに倒れそうになる。

「あ、危ねえ！！」

俺はそれを何とか受け止める。キャップ、マジで言いやがった！！

「鬼かアンタは！」

モロはすかさずキャップにツッコミを入れる。

「ハハハ冗談だよ。冗談。これから一緒に遊ぼう!」

「ダメだシヨックの余り気絶している」

黛はこのままキスでも出来そうなくらいに、無防備に気絶している。

「人口呼吸&介抱タイム! どけ、カタリ! 私に任せておけばいい。ワン子には刺激が強いから目をつぶってアメリカの州の名前でも読み上げて待っていてくれ!」

こんな美味しい状況モモ先輩が見逃すわけがなかった。

「おー……ラスベガス……」

「それは州じゃないぞ、ワン子!」

ワン子はやはりワン子だった……州と言えばほら、あれなんつったけ……そう、リンカーンだ!

「だ、大丈夫です……わずかに意識が飛んでいただけですから」

「チツ、持ち直したか。ま、何事もなければそれで何より」

「言葉だけで長時間気絶するほど腑抜けではないな」

クリスはそう言ったが、黛は恐らくかなり強い……それも、俺の予想が正しければ、モモ先輩や俺と同じレベルの強さだ。やはり、風間ファミリーに入ってもらって正解だったかもしれない。

「真っ暗だよ。目を開けていいかしら?」

さつきからモモ先輩の命令で目を閉じていたワン子が退屈になったのか目を開けていいか聞いてきた。

「ダメー」

「……カタリ犬をいじめてないか」

クリスが誤解しはじめたようだ。ここはワン子の可愛いらしさを見せつけて誤解を解く又はごまかそう。

「手を叩いてみる、楽しいぞ」

┐
•
•
•
•
?
└

クリスは不思議に思いながらも、手を叩いた。

「ん？ お・・・・・・・・おお・・・・・・・・」

フラフラと手を叩くクリスの方へ歩くワン子。そして、目の前にワン子が来た。

「お？ 誰かいるわね、女の子。誰？」

べたべたとクリスに触りじゃれついている。

（おお・・・ちよつとカワイイ）

「目を開けてもいいぞ」

クリスマスにもワンスの可愛さがわかったようなので、目を開かせる。

「って、なんでクリなのよ、ふざけてるの!」

「あつ、急にふてぶてしくなったなこの犬!」

2人でぎゃーぎゃーと騒ぎ出したので放置する。そして、黛の方に視線を戻す。

「で、では、その・・・私も仲間で・・・い、いいですね」

「ああ! いいぜ!」

不安そうにしていた黛に、キャップが力強く答えた。嬉しさの余りが黛が泣き出してしまった。

「悲しい涙よりは良いと思うが・・・嬉しいなら、まず笑う事だ」

俺が黛を落ち着かせていると、キャップと京達の話しも終わったようだ。

「でもこれ最後だよキャップ。これ以上は多い」

「ああ。メンバー数はこれで男女共に5人丁度いいだろ。もう増やさないさ」

確かに狙ったように男女の割合が同じになった。でもキャップが何か考えているようだ。が気にしない。

どうせ斜め上の事を考えているんだろうし、考えたら負けだ。

「しかし、また電光石火で決まったな」

「疾きこと風の如くつてな」

「な、なにとぞよろしくお願いします!!」

挨拶をする黛の顔は気合いが入り過ぎているのか。表情が怖くなっていた。

「表情が怖いぞ……」

「や、やはりそうですか。緊張すると顔がこわばってしまうようでだから私、友達できないんですね」

「友達ができない理由は他にある」

俺も大和と同感だった。黛の表情も怖いがそれより……

「え、ど、どこが至らないのでしょうか」

「俺は大丈夫だが、一般の人は日本刀を怖がっているとおもうぞ」

俺の言葉に皆も賛成していた。まあ、俺達はモモ先輩を筆頭とした女性陣が強いので、余り気にしない方だが……

「父上から授かった、この刀が原因……」

「今まで言われなかったの？」

「はい……友達いませんでしたし……」

「ああ、そつか……」

モロの言葉に黨が暗くなる。本当に一人も友達がいなかったんだな・
・・・

「帯刀なぞ日本ではよくある事ではないのか？」

「国からは許可頂いてます」

俺が言うのもなんだが……この2人は少しズレている気がする。

「新人2人はボケボケだなー。そこも可愛い」

「やはり、刀を手放すわけにはいきません……これは私の魂でもあるんです」

黨のこの言葉を聞いたモモ先輩が真剣な顔になって、黨にこう言った。

「手放せとは言わないさ。ただ年がら年中刀抱えるのは、やめておけ、刀は魂。素晴らしい言葉ではあるが所詮例え、真の魂は、体の中に宿っている熱いものだ」

「まあゆっくり慣れればいいからってこと」

モモ先輩は普段は女の子大好きのエロ親父みたいだが、戦う時やこ
ういった真面目な時は武神の名に相応しい迫力がある。

「は、はい、わかりました．．．．．努力します」

「ああ」

モモ先輩が真剣な目で黛を見つめる。しかし、俺には分かるアレはもう口説きに入っている。

「あっ！？ これもう口説いてるんじゃないか！？」

「おお、モモは口説いてるのか」

キャップの言葉から皆がワイワイと騒ぎだした。

「．．．．．賑やか．．．私は幸せです、松風．．．．」

「良かったな。歴史に残る瞬間だったな」

黛は携帯ストラップと幸せを噛み締めていた。

「で、それは何なのだ」

「それとは？」

クリスが皆が気になっていたことを尋ねた。

「その携帯ストラップと会話しているようだが」

クリスの質問に黛は松風と呼んでいるストラップの紹介を始めた。

「松風、ご挨拶を。しっかりと、しなやかに」

「オッス。オラ松風。まゆっちの友達だぞ」

話を聞くに松風は黨の父親が作ってくれたらしい。しかし、友達ができないので携帯を買う必要がなくストラップとしての役割を果たしていなかったようだ。

「ほえ」

「なんだが可哀想ねアンタって・・・」

「ワン子に同情されるとは」

「どーいう意味よ」

「そういう意味だよ」

「バカだね」

「なにおお！勝負しようっての！」

ユキとワン子がじゃれあっていると、黨は松風が誕生した時の話をしていた。それを聞いた、モモ先輩が黨にこう言った。

「これからは私達に遠慮無く話しかける」

「ありがとうございます」

どうやらモモ先輩は黨の事がかなり気にいったらしい・・・まあ、俺もそうだが・・・

「モモ先輩はまゆつちを気にいったようだな」

「ま、まゆつち！」

いつまでも黛では他人行儀だし、松風がそう呼んでいたので呼んでみたがまずかっただろうか？

「松風がそう呼んでたろ？ ダメか？」

「い、いえいえ！ いえいえいえ！是非！」

「よし！ じゃあこれからまゆつちで」

「私はまゆまゆだな」

モモ先輩は自分で独自のあだ名をつける事がある。まゆつちは、まゆまゆだし。モロはモロ口だ。

「まゆつち相当強いみたいだしな・・・そこが気にいられたんだろ」

「分かってるじゃないか、カタリ」

「いえいえ、私などまだまだです」

俺とモモ先輩がそんな話をしていると、まゆつちが照れながら否定した。

「かるーくパンチ連打で攻撃するから避けてみる？」

「エッ？」

モモ先輩の言葉にまゆっちが驚いているとモモ先輩が動いた。

「問答無用で、そらそらそらそら」

モモ先輩の無数の拳が放たれる軽いパンチでも常人には避けることは不可能だ。それをまゆっちは・・・

「うわわっ！！！」

ひよいひよいと全て避けてみせた。周りから称賛の声が上がる。

「おお！ 見事！」

「ふ、ふーん。な、なかなかやるじゃないのよ」

「全部見えたけど、それを全て避けられたかどうか」

ワン子達もまゆっちの実力を認めたようだ。しかし、今見せたのもまだまだ浅い部分だろう。

「まゆまゆはクリよかは、やや弱いつて感じかな」

モモ先輩の表情から察するに、まゆっちにはまだまだ上があると見ているようだ。

「私など、まだまだです・・・」

「剣聖の娘が何を言うんだ・・・」

今の動きを見て確信した、まゆっちは剣聖と言われた黨十一段の娘だ。

「父上をご存じなのですか？」

「国から帯剣許可をもらえた剣聖だろう」

「幻の十一段の娘……また大型新人だなあ」

大和が言う通り、クリスにまゆっちの加入でますます面白くなりそうだ。

10話（後書き）

誤字脱字が多いと思いますが、皆さんの温かいお心でここまで来れたザンです

これからもアドバイスやご指摘の程お願いいたします！

まだまだ始まったばかり、これからも更新頑張っていきます！

11話（前書き）

どうも～ザンです

みなさまが楽しみにしていただけの作品が疑問がありますが

これからも更新がんばっていきたい今日この頃～

まあ、では本編どうぞ～

11話

「よし、まゆまゆに私達が自己紹介だ」

一段落ついた所で姉さんが提案した。確かに自己紹介ぐらいは必要だろう。

「川神百代3年、武器は拳1つ。好きな言葉は誠！」

「川神一子2年、武器は薙刀、勇気の勇の字が好き」

「2年クリスだ。武器はレイピア。義を重んじる」

「榊原小雪だよ。クラスはカタリと一緒に。好きな言葉は楽だよ。マシユマロが好物だよ」

「椎名京2年弓道を少々。好きな言葉は仁……女は愛」

モモ先輩達がまゆつちに挨拶すると、まゆつちも俺達に自己紹介を始めた。

「1年黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます」

まゆつちの自己紹介も終わり、いよいよ俺達男の番だ。

「ん、あのバンダナがキャップ、リーダーだな。いかにも馬鹿そうなのがガクト、面倒見はいい。いかにも根暗そうなのがモロロ、優しくはある」

あれ？ 何故か俺達の事を姉さんが適当に紹介している。

「であそこにいるのが大和、頭は回る私の舎弟だ、実はかなりエロイから気をつけろ」

何故だろう言いたい放題言われてるな男子陣。

「そして最後に、私と渡り合える程の実力で唯一まともな料理が出来るカタリだ、女に弱い部分があるが面倒見の良い奴だから頼るといい」

「聞きたい事とかあったら気楽に聞いてくれ。まともに答えるから」

「うわぁ・・・おざなり。しかも根暗とかさぁ・・・しかもカタリだけまともに紹介されてるよ」

「俺様のタフガイさが強調されてねえ」

「女の子が強い時代だよなー。男の立場がないぞう」

女子達に押され士気が下がる男子達。その時、我等が軍師が立ち上がった。

「あいや待たれい。情けないぞ諸侯！！」

時代がかった言葉遣いで話し始めた大和。

「軍師大和」

男子が期待に満ちた目になっていく。

「パワーで負けている分、知力で勝負すんだよ。男だってそう簡単に負けちゃいられねえや」

俺は別にパワーで負けているわけじゃないんだが。つか知力が良いのって大和位じゃん？・・・だが、大和の言う通りでもある・・・この勝負は別にパワーを競う物ではない。相手に負けたと思わせる事が大事なのだ！！

「誰もが勇気を忘れちゃいけないんだぜ」

更に大和が男子を鼓舞する。その時、モモ先輩が動く気配をみせた。

「・・・・と語が言ってたぜ！！」

それに気づいて俺を指差しながら、責任をなすりつける大和。

「へ？なんでだよ！！無関係じゃん！！」

「ほほー。良くいった。こっちへ来い」

「待てくれ、モモ先輩・・・」

姉さんによってあつという間に、女子の輪の中心にひきずりこまれた。完璧にここは敵地・・・・アウエーだっけ・・・・

「彼が、私達女子を調子に乗らせるなだと」

「！何という言い草だろうか」

姉さんの言葉に一番早く反応したのはクリスだ。やはり、バカにされる黙っていられない性質たちのクリス。

「ちょっと待った、俺の話を……」

「却下」

モモ先輩はその言葉とともに俺に蹴りを入れてきた。ユキまでノリで蹴るな！

「くっ……、ここはモモ先輩が牢名主の獄中か！！」

モモ先輩の蹴りをガードしながら、これからの行動を考える。

「これはいじめるべきだね。私に任せて」

「皆でいじくってやろう」

「いえーい」

俺は気づいた、この状態では俺は無力だと……

「だがしかし！！ピンチの時いつも少年誌的には仲間が来てくれる……筈だ……」

俺はキャップ達を……最後の希望を見た。きっと、皆なら助けて

くれると！！・・・一抹の不安があるが。

「じゃあな。・・・頑張れ。耐えてくれ」

「俺様も男としてのプライドを失いたくないからな」

「さようなら」

「あつ！！ ヤドカリに餌あげなきゃ」

「てめえら！！ちよつと思つたよ、マジでするとか後で覚えてろ！！」

皆は俺を助ける事を放棄したようだ。特に大和は完璧に逃げに入っている。お前が言い出したじゃねえか！！

「少年誌ではなくここはヤンクアニマルのようだぞ」

「クク、性と暴力の都みやこというわけね」

「か、可哀そうじゃないかしら・・・」

暴力が姉さんで、性が京なんだろうなやつぱり・・・ワン子、お前だけが女神よお・・・

「全員逃亡とか、いい友達を持ったなカタリ」

「情けないな」

クリスが出て行こうとするキャップ達にそう言った。

「言ってくれるな・・・」

「じゃあ語を取り返してみる？」

「面白い。カタリ争奪戦をしようじゃないか」

女子達の言葉を聞いて、キャップはフツと笑みを浮かべた。

「逃げようぜ皆」

しかし、なにもしないままキャップ達はすごすごと去っていった。俺も逃げようと思ったが、モモ先輩と京、ユキがガッチリ掴んでいるため逃げられなかった。

「ふふふ。そう簡単には逃がさないぞ」

「で、具体的にはどうするのだ？」

「焼き肉」

クリスが俺を幼馴染と認識していない。ユキ、お前は俺を丸焼きにでもするつもりか？・・・くっコイツ等、人が抵抗できないと思って・・・

「や、やめてあげない・・・？」

なぜみんなワン子を見殺ししてたよ、若干泣きそうだよ。くそっこの場に女神は1人だけか・・・

「皆で手を押さえてさえくれれば後は私が・・・ハアハア」

京の目が、手が、存在が危ない！！このままでは最悪既成事実って事も有り得る。別に京が嫌いなわけでは無いが、京の真剣な気持ちに応える覚悟が俺には無い。

「じよ、冗談がきついな・・・」

「冗談じゃないなあ」

「つんつん」

モモ先輩がニヤニヤしながら俺を見ている。ユキ、お前突くなよ！・・・くっ新顔で気が小さいから今まで頼りにしなかったが・・・

「まゆっち、俺がピンチだ助けてくれ」

「え・・・あ、はい！！え、えーと！？」

まゆっちはモモ先輩達に協力すべきか俺を助けるべきか迷っている。

「いいんだまゆまゆ。こいつ実は悦んでるから」

なんと！！そんなあられもないウソを堂々と言ったよ、この人！！

「これもプレイの一環なの。はあ・・・はあ・・・」

「お・・・奥が深いんですね」

「さすが都会だねー」

「ほえ」

「まゆっち、騙されてはいけない！！松風黙れ！コレが都会のスタイルとかヤバイよ！！」

なんでユキまで納得してんだ！俺の必死の叫びも虚しく、まゆっちは姉さん達に従ってしまった。

「ふふ、なんだかうろたえるカタリは斬新だな」

クリスもニヤニヤしはじめた。これは本格的にまずいか？場合によっては実力行使・・・などと考えてみるが、モモ先輩だけでも逃げ切れるかわからないのに、まゆっちまでいては不可能だ。俺は出て行った大和達に僅かな希望を託す事にした。

「さて、カタリをどういじくってやろうか・・・」

「椎名京！ 一番槍、もらいうける」

京が俺の服を脱がした。

「おい、勝手に脱がすな！！」

「「「「「・・・・・・・・」「」「」」」」」

なんだかみんなの顔が赤いぞ？なんか変なのか？

「・・・なんと鍛え上げられた筋肉がここまで凄いとは・・・」

「・・・はあ、流石カタリ・・・」

「・・・これは凄いわね・・・」

「・・・コレ程のものとはなあ・・・」

「・・・す、すすすす凄いです・・・」

「・・・オイラ惚れそうだよ・・・」

「つんつん」

みんな小さい声で何言ってるんだ？それとユキくすぐったいぞ。すると・・・

（お前らナイスタイミング！！）

「フツそう来たか。私は静観しよう、それで4対6・・・少しは面白くなるだろ」

モモ先輩の言葉が終わると同時に、周りが煙に覆われた。

「！？ な、何事ですか？」

「うわあ、煙がモクモクだ」

「こ、これはキャップお手製の煙幕！？」

「！？ 敵襲」

「本当に語を助けに来たのね。クク小癪な」

キャップの煙幕に殆ど動じることなく迎撃態勢をとる京達。ユキは相変わらず呑気だな。

「侵入者を迎え撃つ！ 男子の挑戦だ！」

「部屋に気配が増えた。なるほど煙に乗じるか」

さて、モモ先輩は手を出さないようだし、皆は上手くクリス達を引き寄せてくれた。後は俺も動くか・・・

「姿は隠せても気は隠せまい！ そこだー！！！」

クリスが気的位置を頼りにパンチを放つ。

「超痛ええ！ 正確に肝臓狙って・・・」

「手応えアリ！ ！？ が、まだ倒れない？」

クリスが想像するよりガクトは打たれ強い、だてに鍛えているわけではないし、ガクトの意地もあるだろう。

「もう一撃！」

「ぐはあ！」

クリスは迷う事なくもう一撃を加えた。ガクトもさすがに耐え切れずダウンした。

「又。気配が2つ部屋から遠ざかる？」

「こっちも微かな気配。暗闇に仕掛ける！」

京が煙の中の誰かに仕掛ける。京の攻撃が当たり誰かが倒れる。

「手応えあり……仕掛けて仕損じ無し。というか弱い」

「窓を全開にしています。間もなく煙が晴れるかと」

まゆつちが全開にした窓から煙がどんどん外に出ていく。

「素早い判断だ。やるな」

そして、煙が晴れた。

「私が仕留めたのはモロか、えいえい」

「ていてい」

京とユキは倒れているモロを軽く踏み付ける。酷いな京。

「こっちはガクトだった。声で分かったが」

クリスの近くにはガクトが倒れている。

「あれ？ そういえばカタリは？」

ワン子が辺りを見回しながら言う。先程までいた位置に俺はいない。

「って事は逃げたのは大和とキャップ？ それとも2人の内誰かとカタリ？」

「キャップ達は気配を消せないから、逃げたのは、2人だと思う。でも、語も2人と一緒にいる可能性があるから、ワン子、ユキお願い」

京の判断は間違っではない、この場合スピードが速いワン子と次に速いユキが2人を追うのは正しい選択だった。

「アタシに任せて、逃がさないわよ！」

「アイアゝイ」

ワン子とユキがかなりのスピードで走っていった。この分ならすぐに逃げた2人に追いつくだろう。

「まさしく獵犬だな、任せたぞ……初撃を耐えるとは敵ながら見事だガクト」

クリスはワン子達を送り出した後、武道家でもないのに自分の攻撃を耐えたガクトに感心していた。

「……というか、何故に敵なのだ？」

「私から語を奪う、その行為だけで敵だよ」

「むむ。和気あいあいと囲んでいたつもりだが……」

クリスはそう言うが実際に服を脱がされていた俺から見れば、公開

処刑の一種だ。

「男の子はプライド高いから。無駄に用心深い語が近くに隠れてるかもしれないし、私達は外を探しながらワン子と合流しよう」

「行くか」

「あ、倒れてる皆さんどうしましょう」

倒れている2人を気遣うまゆっち。やはり、いきなりこんな事になれば倒れてる人間を気遣うよ、普通。

「放置で」

「は、はい」

しかし、昔から風間ファミリーにいて慣れている京は2人を放置して、クリスと外に出て行った。

「・・・・・・・・あれ？」

2人が外に出て行った後まゆっちは不思議な気配を感じ取ったのか、動きを止める。天井から俺は降ってきた。

島津寮の屋根の上では脱出した俺が屋根で1人で座っていた。

「皆の犠牲は忘れないぜ」

俺は夜空を見上げた、夜空にはキャップ達の顔が浮かんでいる気がした。

「戦死者4名、俺以外は全滅か・・・皆の分も俺は生きるぜ」

「アラの多い作戦だ。私だったらお前が隠れていたのもすぐに察知できる」

俺が大和達に感謝(?)していると、傍観に徹していたモモ先輩が後ろから息を吹きかけてきた。

「まあ、今回は姉さん不参加だったし。結果的には作戦成功って事で」

姉さんが俺の横に座って俺を見ている。

「しかし、お前よく我慢できたな。我慢できずに京達相手に一戦やらかすかと思っただが」

姉さんの言葉はかなり真実を言い当てている。実際、キャップの煙幕が放たれた時に京達に攻撃しようかと考えていた。

「まあ、今回は大和達が頑張るみたいだったしね。俺はみんなを傷付けるのはイヤだから」

「欲求不満にならないか？」

自分の事もあるだろうが、俺の事も心配してくれている。なんだか
んだ言つて、俺の事も心配してくれている。優しい先輩だ。

「欲求不満にはなるけど、大丈夫さ。まゆっちやクリスマスも入って更
に賑やかになるだろうし」

「そういえば、まゆまゆへのトークが面白かったぞ」

「あれは、モモ先輩の影響だよ」

少し前。クリスマス達がワン子を追つていった時の居間。

「よつと！！ 京達も甘い俺が隠れているのに気づかないとは・
」

天井から降りて体を伸ばす俺。

「やっぱり、焰先輩中にいたんですね」

「やっぱり、まゆっちには気づかれたか・・・上手く気配を消せた
と思っただけだなあ」

俺はすかさず次の行動に移すことにした。まゆっちの肩に手を置いて
まゆっちにこう言った。

「まゆっち、”仲間”として頼みがある！！ 見逃してくれ」

「はあああう？／＼／」

まゆっちが仲間という言葉に反応している、もう一息だ。

「まゆっち・・・頼む」

まゆっちを口説き落とすぐらい真剣にまゆっちの目を見つめる。

「は、はい、どうぞお逃げ下さい。早く」

「ありがとう、まゆっち」

まゆっちをギュッと抱きしめて、最後に頭を撫でた。そして、まゆっちが放心している内に脱出した。

「ははは、確かにユニークな新人が2人も加入したな。これから先、もっと面白くなるといいなあ」

「俺の勘だと、かなり面白くなると思うよ」

「お前の勘は当たるからなあ」

2人で夜空を眺める。俺はこの夏に何かが起こる予感がしていた。

何が起こるかは、まだ分からないがきつと今までとは違う夏になる、これだけはハッキリと感じられた。もしかしたら、モモ先輩と戦う事になる道もあるのかもしれない。

「モモ先輩。明日からまた、楽しくなりそうだ」

「ああ、そうだな・・・」

それから、言葉もなく、皆が来るまでモモ先輩が寄り掛かって来た。冷たい風が頬を撫でる様に吹く。

11話（後書き）

どうしょ？

新しく恋姫の作品を連載しようと画策するバカがここにいるんですが？

皆さんのにはどう思いますか？

ちなみに萌将伝（未プレイ）を題材にしてほのぼの日常系で書く予定です。

12話

今日はワン子を抜いた10人で登校する。

「今日も俺様の将来を祝福するかのごとく晴れだぜ」

「ククク、しかし午後から雨」

ガクトは京から横槍を入れられていた。確かに自分の人生後半が天気で言くと雨だったら嫌だな。

「やろっ」

「やろっではない。私は恋をしている乙女」

ガクトのチョップを京がガードしながら、俺に視線を送ってくる。とりあえず俺は無視。

「まゆまゆ」

「は、はい!？」

「ホントいい女だな。2人で公衆トイレいかないか」

「ふええ？」

モモ先輩がまゆっちの体に軽く触れながらまゆっちを口説いていた。

「モモ先輩が後輩をかなり本気で狙ってるよね」

「ね・・・ねっちりと流れる液体。はいガクト、い」

モロが言った言葉の語尾から、いきなりしりとりが始まった。いつもの事とはいえ唐突過ぎる。

「い・・・いけてるイケメンそれ俺様。ま」

ガクトが視線を京に送る。名前を言わなくても、だいたいこれだけで次が誰かわかる。

「マジでスキ」

京は予測通りと言つか、必然と言つか俺に視線を送る。

「き・・・君と俺は友達です まゆっち、す」

ファミリーに入っただけのまゆっちには視線だけでは分かりにくいと思ったので、言葉でまゆっちに振った。

「す、す、すすす・・・水銀！！！！」

まゆっちは緊張の為なのか、天然なのか分からないが、『ん』を言ってしまった。もしかして、しりとりをした事がないのだろうか？

だとしたら、不憫だ。

「この娘は磨けば磨くだけ光るぜ。笑いの意味でな」

「大切に育てていきたい人材だな」

どうやら、ファミリー内でのまゆっちの位置付けはポケ担当になったようだ。ちなみに、ファミリー内のポケとツツコミの比率は9：1だ。もちろんツツコミはモロと偶に俺だ、本当にモロは貴重な人材だ。

「育ったら、巨人にとられないようにしたいね。巨人ってのはその名の通り大きな巨人ってファンタジー的な意味だから穿ったモノの見方はやめてね」

「誰に言ってたんだ？ 京・・・」

「いい配慮だ。語に熱視線を送る権利をやるっ」

京が俺に熱視線を送ってくる。キャップめ余計な言を・・・しかし、黙ったままと言うのも嫌だ・・・たまには京に反撃してみるか。

「京・・・」

俺も京に熱視線を送り返す。さて、どうなるか・・・

「ああん、語の視線にハートが撃ち抜かれたあ」

京が暴走したが放置する、あれを心配して近寄ると強制的にエンディングを迎える気がする。

「むー」

「クリスどうしたの、トイレ・・・とか？」

「ち、違う違う！ 実は」

クリスはさっきの出来事をモロに説明していく。

「おいなりさん殆どとられたんだ。うかつだったね」

モロはクリスの話を聞き、そういう事かと納得していた。

「このケースは自分が悪いのか？ 釈然とせん」

「僕なんかこの前、コンビニでおでん買った時にさー」

モロは自分の経験談をクリスに話し始めた。

「気がつけばそこには空の容器が1つ・・・」

「育ち盛りに食べ物見せると危険なわけだな」

クリスは頷きながら納得していたようだ。

「へえー俺が居ない間にそんな事が、でっクリスはまだ食べ物とられた事にこだわってんの？」

「それはこだわるさ。いなりだぞいなり！ー！」

よほど、いなりが気に入っているのか、かなりの剣幕だ。

「そう怒るな、俺のいなりをやるから」

「ちよつと待った！！語のいなりさんは私の物だよ！！」

京が話に割り込んできた。京の話をそのまま通すとかなり痛い会話になる気がする。

「京・・・何を勘違いしてる、俺の今日の弁当がいなり寿司だからそれをクリスにやるだけだぞ」

「もちろん知ってるよ、朝皆で食べるように多めに作ってたもんね」

時々京は俺の行く場所に監視カメラでも付けてるんじゃないかと心配になる。もちろん、そんな事はないはず・・・・大丈夫だよ・・・・な？

「おお！カタリの作りたいなり寿司か、クリスのも美味かったが私はカタリが作ったのが1番好きだな」

そこまで、言つて貰えると作つて来たかいがあったという物だ。

「まあ、語のいなり寿司はお昼に食べるとして・・・クリスに相應しい相手を召喚しよう」

大和は制服から『犬笛』を取り出して、思いつ切り吹いた。笛の音が辺りに響く、クリスが捕り物の笛と勘違いしていたが、何も言うまい。

「おつ、来たぞ大和」

ワン子が笛の音を聞き付け走ってきた。相変わらず元気なワン子だ。

「おはようー！ 呼んだの誰？」

「名付けて犬笛」

「成程。そうして呼べば来るあたり流石犬」

「すぐに受け入れたねこの怪奇現象を」

大抵の人は、1度は疑う物だがクリスは自分で見た物は信じるタイプらしい。

「犬をいつでも呼び出せるから・・・何なのだ」

クリスが疑問に思うのも仕方ないので、ワン子のメリットを上げていく

「ワン子、冬は湯たんぽの代わりになるよ。ワン子の体を足ではさんでおけば、足が冷えない」

「ただし寝返りうつたれると布団の中で怒るわよ！」

「俺はそうならない様に抱きついてたな・・・」

「あ、あらは流石に恥ずかしかったわ・・・」

小さい頃はよくやっていたが、この年でワン子を抱き枕の代わりに

するわけにはいけない。

「いつでも、ワン子と喧嘩できるぞ」

「自分はそのような血気盛んなキャラではない。喧嘩好きと思われるのは遺憾だ直江大和」

クリスは否定するが、クリスは挑発に乗りやすいタイプだと思う。

「ワン子、クリスが朝から勝負したいってさ」

「おい！」

大和がクリスの話を無視して、ワン子と話をしていた。さて、クリスはどうするのか。

「なーんだ。クリも元気余ってるんだ。いいよー！」

「元気はあるが、お前と交戦したいとは思わん」

「言い訳好きだねクリ。それがお国柄なの？」

「フフ、何で勝負するか決めようか」

やっぱり、クリスは挑発に乗りやすいタイプだ。昨日の事もあるし決定だな。俺はクリスをどうやってからかうか考え始めていた。橋のたもとに着くと3人の男が待っていた。

「兄者！ あれが川神百代じゃけえのお！」

「ウム。噂にたがわず美しい。満点で合格だな」

ゴツツイ2人組が何やら話している。

「川神百代とお見受けするけんのお！」

「そうだが」

「我らは地元では知らぬ者のいない仁王兄弟。道場の世継ぎを作るために強い嫁を探している」

嫁の言葉に反応する俺の耳と血管、モモ先輩を嫁にしようってのか？

「川神百代。お前俺達と来い。妻になるけんのお」

「ガクトが2人いるみたい。筋肉バカっぽいね」

「ふん。俺様の方が断然知的にナイスガイだろ」

「あ、そりゃ無いから」

まあ確かにあの兄弟よりは、ガクトの方が断然マシだ。（強さ的な意味でも）

「純粋な勝負か。嫁探しか。どっちだ」

モモ先輩が呆れた声を出す。

「勝負なぞしなくても俺達の圧勝だけんのお」

「嫁探しだ。俺と弟の相手をする嫁のなワハハ！」

「なんだこの無礼な男達は。挑戦者と言えぬ」

どうやらこいつらは、身の程を知らないらしい。俺が殲滅するために前に出た。

「モモ先輩を嫁？はっ、だったらこの俺を倒してからにしろ」

「なんだお前は？雑魚は引っ込んでくけんのお」

「・・・どうすんだその雑魚に負けるのが怖いのか？」

「調子にのると痛い目見せたるけんのお」

「モモ先輩。こいつ等にトラウマ植え付けるから・・・いいよね？」

「いいぞ。カタリを雑魚と聞いてイラッと来たがコレはカタリの問題だからな」

んじゃ・・・ショータイムだ・・・

「あんまり舐めんじゃねえよ」

「ああん？ 学生が俺に勝てると・・・」

「「思ってたのかコラア！！！」」

2人一緒に殴り掛かって来る。それを慌てず避ける。

「幻魔」

相手が振り向くよりも早く幻魔で自分の分身を作りその場から離れる。

「っ！おらああ！」

弟の方が振り返り咄嗟に分身の俺に攻撃を加える。

「ぐあー！！」

すると分身が爆発して逆に殴った相手が吹き飛ぶ。

「！？」

「おら、よそ見すんなボケ。急撃！」

軽く力を溜めた拳で兄の方を急撃で背中から突き上げる様に撃ち抜く。すると3段階体を折り曲げ吹き飛ぶ。

「まだまだ！」

兄弟2人の足を持って更に上空に投げ飛ばす。

「俺の女に手え出したんだ・・・恐怖を教えてやる・・・喧嘩の華！！」

最初だけボソツと言って、連続のパンチを上空から降って来た兄弟に叩き込み星に変えた。

「や、やるな、流石だカタリ」

顔を背けながら称賛してくれる。どうしたんだ？そのまま学校に登校する。終始モモ先輩は顔が赤かった。

『2 - F、焰 語。至急学長室にきなさい。くりかえます・・・』

放課後、大和が決闘をするらしく、その準備していたとき校内放送で俺は呼ばれた。

「だって、みんな先に行つててくれ」

「わかった」

「学長に絞られてこい」

「ガクトじゃないんだから無いでしょ」

「ガクトは無駄な筋肉絞れよ」

「無駄じゃねえよ！」

「んじゃ後でな」

みんなを見送つて学長室に向かう。この前の3日の事か？

「失礼します」

「うむ、入って良いぞ」

ノックをして中に入る。すると学長とルー先生がいた。ルー先生。川神院の師範代にして、川神学園の体育教師。熱血的な指導で有名、体を張った教育方針が売り。常にジャージ姿。40代とは思えない若々しい。

「すまんな急に呼び出して」

「構いませんよ。でっ用件は？」

「うむ、近頃百代の戦闘衝動がますます危つくなつての」

まあ俺もそろそろだとは思つたんだが。

「最近だと門下生との鍛錬でも力の加減をしないんだヨ」

「そこまで戦いたいんですかモモ先輩」

「ああ、その傾向がこの前の島津寮での事件・・・と言う程でもないが、まああれもその1つじゃ」

「俺も薄々勘付いてました・・・それじゃあ俺とモモ先輩を当てるんですね？」

「ほほほ、話が早いのお。じゃがその通りじゃよ。君にはちつとばかり辛いじゃろうが、頑張つて貰いたいのじゃ」

「いいですよ別に。で、いつヤルんですか？」

「ごーるでんういーくの始め土曜じゃよ」

「ああ、残りを骨休めに使えつと？」

「すまんの、折角の休みを無駄にして」

「いいですって。それでモモ先輩の衝動を抑えられるなら軽い依頼ですよ」

「そうかの？ではよろしく頼むぞい」

「ワタシからのお願いするネ」

「んじゃ失礼します」

「コレでモモ先輩の”負”を少しは取り払えるだろう。」

「ういゝ・・・す？」

みんなが何故か大和を冷ややかな目で見ていた。

「どうしたんだこの状況？」

ユキの傍まで行き理由を聞く。

「大和がトウマに負けたんだ」

「ユキ確か葵と仲良かったけ？」

「そつだよ」マシユマ口くれるんだ」

「お礼言えよ」

「うえーい」

「俺が敵討ちでもするかな」

大和達がいる方に向かう。

「おすつ」

「語、どうした？」

「敵討ち」

「は？お前関係ないだろ」

「んじゃ俺の我がままで。俺と決闘だ2・Sの諸君」

「なんじゃお主は、此方は直江だけ倒せば良いのじゃ」

「なんだよ2・Sもたいした事ねえな、こんな男1人の決闘も受けられないのか？」

「んだとお、やってやるぜえ！」

「おしっんじゃワッペンここに置けよ」

ペシッと良い音を立てワッペンが重なった。

「お前たしか焰だろ、どうせモモ先輩並みの強さつてのもただの噂の1人歩きだろ？その自信へし折ってやるよ！」

「んじゃ賭け金幾ら？」

「君が僕の出す金額に合わせられるのかい？」

つくづく、2・5つてのはそついうのを自慢しやがるな・・・

「良いぜ、6万だ」

「！！ふっ、良いよ決闘成立だ」

「ああ、成立だ」

俺もワッペンを相手のワッペンの上に置いた。

「またも決闘の成立じゃ！！！！」

両陣営のギャラリーのテンションが上がる。

「じゃあ、グラウンドに下りるか」

屋上にいる全員がグラウンドへ移動した。

「今より第1グラウンドで、決闘が行われます。内容は素手での戦闘。見学希望者は第1グラウンドに集まって下さい」

アナウンスのおかげか少しして、周りにはかなりのギャラリーが集まった。

「ギャラリーも増えたね、君の負け姿も映えると言うものだ」

「さて、やるか・・・」

相手の準備運動が終わる、審判の先生も来たようだ。

「それではワシが審判するからの。お互い悔いを残さんようにな」

審判は学長か、まあ大丈夫だろ・・・

「無制限一本勝負・・・はじめっ!!」

学長の合図と共に、相手が突っ込んできた

「ふっ」

裏拳一撃でかたが付いた。勝者は当然俺だ。その場が静まりかえる。

「んじやな、またよろしく」

賭け金を受け取り大和のもとに向かう。

「大和、今日は1勝1敗だから・・・今度は大和が葵と闘って白黒つけるよ」

「分かってるよ、次は負けない」

決闘の後みんなで寮に帰って来た俺は直ぐに風呂に入った。風呂で寛いだあと直ぐに部屋に戻った。

「語、お帰り」

「京・・・どうした？」

京の顔を見れば精神的に辛い時かどうか分かる。今回は辛くはないようだ・・・

「遊びにきたら、語いなかったから」

そう言っ読書を始める、京。京曰く部屋でじめじめしてる精霊的存在らしいが・・・

「どうみても、地縛霊だな・・・」

「チィス。前世で『も』あなたの妻でした」

「前世の俺達って何？」

前世とかって、以外と興味があるんだよな。

「私が妻で、語は最強の夫」

「俺って前世でも最強なのな」

こうして、今日も和やかに終わりを告げた。

13話

本日は祝日、今日はなんとなく川神院に行く。するとワン子の修行に付き合う事になった。

「んじゃ始めつかね」

「行くわよお！」

「こい」

ワン子は今回薙刀を使う様で。薙刀を正眼に構える。（レプリカです）

「はあああ、せいっ、たりやあああ！！」

急所を狙って薙刀を振るう。だが全体的確とは言えない少し荒い攻撃を回避する。

「よっ、ほい、おっと。いいねワン子、この前のフェイントちゃんと使ってるじゃん」

「当たり前よ！」

「素直だなっつと、ワン子は」

上段からの切り降ろし、下段の足払い、中段からの風。

「川神流！山崩し！！」

さらに足元を狙った攻撃が来る、それを飛んで避ける。

「今よ！！はあああああ！！！！」

「うん、イイ狙いだ・・・」

山崩しが来ると見せかけてそのまま薙刀を振り上げる。

「・・・でも、おしいな」

振り上げられた薙刀に蹴りを軽く当て直撃コースをずらし体を捻る。

「なっ！？」

「はい、一本」

そのまま体勢を崩したワン子に着地と同時に近付き柔道の外刈りを決め投げる。

「きゃっ！いったあゝ」

「ほら次、次」

「よしっ！やるわよ！！！！」

そのままワン子と組み手、休憩、組み手、休憩を続け昼で修行を終え街に散歩に出た。

「んゝ千花ちゃん所でお菓子でもいただくかね」

そのまま仲見世通りの『飴玉の小笠原』に来た。

「ういゝす」

「あ、ほむっち。どうしたの？」

「今日は客、飴ちよーだい」

「わかった、お茶もいる？」

「よろしく」

千花ちゃんは見た目あんな派手だが。優しく明るい、クラスのアイドル的存在。

「はい、お茶と飴ね」

「サンキュー」

「ほむっちって休日何してるの？」

「ぬ？」

「ああ、食べてからでいいから」

「んぐつ。ワン子と修行とか仲間みんなで遊んだりしてるけど」

「ふん」

「どったの？」

「い、いいの何でもないから（どうしよ結構タイプなんだよねー）」

「そう？」

「あ、ほむちって好きなタイプってある？」

「んー、そうだなー。元気な奴？」

「元気？」

「そつ、いつも明るくて元気。これ結構重要よ？それだとワン子にモモ先輩、ユキ、京？、千花ちゃん、真与ちゃん、羽黒とかいろいろいるなっ・・・まあ明るくて元気なヤツってことだな」

「そ、そうなんだ（うそ、私入ってる、嬉しいかも・・・でもなんで黒子まで？）」

「んじゃそろそろ行くわ、じゃねっ」

飴玉の小笠原を後にしてまた街を散策する。

「うーん、平和だー。こんな日には原っぱで昼寝でもしたい・・・
なんとなくだけど揚羽さんっていま何してんだろ。最後にあったの
正月だったけ・・・嫌な予感する・・・」

「フハハハハ」

「・・・当たった・・・」

「久しいな語い！」

上空から揚羽さんが降りて来た。周りの人が変な人見る目で見てる。

「どうも揚羽さん、お久しぶりです。で、今日はどうしたんですか
？」

「うむ、語の顔でも久しぶりに見ようと赴いたのだ」

「はは、そうですか」

「ふふふ、どうした？元気が無いぞ？」

「いえちょっと疲れただけですから」

「そうか、では金平糖を食べるがいいぞ」

そう言つて目の前に金平糖を差し出される。

「い、いただきます」

数個の金平糖を口に放り込む。

「む？そろそろ戻らねばな。語また会おうぞ！」

シュバツと跳躍すると上空のヘリコプターへと乗り込み去っていった。

「相変わらず忙しい人だな」

そのままの足で寮に帰り祝日は終了した。

朝、大和と一緒にクマちゃんから貰ったケーキを片手に教室に入るとワン子が駆け寄ってきた。

「お、何それ美味しそうじゃない2人共」

「ワン子少し食べるか？」

「うんうんっ、欲しいわ！」

相変わらず、素直なワン子だ。大和はワン子に分けるようだし、俺はクリスマスに分けてやるか。

「クリスマスも食うか？」

「朝から教室でケーキなぞ非常識だ」

クリスはやはりルールや決まり事に厳しい所は変わって無い。ケーキならもつと軽く乗ってくるかと思っていたが、間違いだったか？

「わっ、これ美味しいねー！ まぐまぐ」

隣では、一子が美味しそうにケーキを食べている。

「・・・まあしかし違反ではないのかな・・・だったら自分も、もらおうかな・・・」

やはり、クリスマスも女の子だな・・・甘い物には弱いらしい。

「切ってやったから、好きなものを選ぶ」

「自分はこっちが、食べたいな・・・」

クリスは迷う事なく半分にしたケーキの内の大きい方を選んだ。

「やっぱ変わって無いねクリスマスは」

「????そうか？」

クリスはまあお嬢様で自分で料理や身の回りの世話なんかメイドや執事がやってたし、欲しいモノは大抵手に入った。まあ意外に我が儘な部分がある。

余談だが、クリスがケーキを食べる時に見せた表情は、かなり幸せそうだった。確かに、甘やかしたくなる気持ちも分かる。

さて、昼まで時間もあるし、昼寝でもして待つてよう。

昼休みになると、モロが葵冬馬が賭場で遊んでいると知らせてきた。

「来たか。早かったな、リベンジの機会が!!」

大和の顔はかなり真剣だ、余程前に負けたのが悔しかったらしい・

「皆、2 - Sの葵冬馬をこれから賭けで倒す。この前の雪辱戦だ。見たい奴は来てくれ」

大和がクラス中に決闘の宣言をする。この前の雪辱戦はやはりギヤラリーが多い方がいいのだろう。

「おーナイス。じゃーアタシ見にいこうつと」

「大和の意地見させてもらうか」

「賭けという行為は気に入らないが、自分自身の仇討ちという心意気、見届けよう」

なんだかんだで2 - Sに対抗意識を燃やしているクラスだ、ついで来る連中は多いようだ。俺は賭場に向かいながら、クリスと話していた。

「なあ、クリス・・・もうちょっと考えを柔らかくした方がいいよ？」

「考えを柔らかく？」

「そう・・・ルールや正義感だけにがんじからめにされてると、大変な目に会つかもしれんないから」

クリスは強いし、これからも強くなるだろう。でも、ルールや正義感にこだわり過ぎている節がある・・・個人での戦闘ならそれも良いかもしれないけど、軍人としてはそれではダメだ。

「・・・忠告として受けとっておく」

「あと・・・クリス。正義は必ずしも一つじゃないってことも覚えておいた方がいい」

「正義は一つではない？」

クリスはその言葉に顔をしかめていた・・・頭では納得しているのか、もしくは全否定しているのかわからないが、クリスが自分自身の正義を貫くなら必ず壁にぶちあたる。そこで悩むクリスを放って置く事が出来ない、だからその前にどうにか考えを少しでも変えて欲しい。そうこう、話している内に賭場についた。

大和と葵が向かい合う

「再戦希望だ」

「いいですよ」

「あっさりだな若」

「前回の2・S対2・Fの勝負は1対1の引き分けでしたから」

成る程、葵は今回の勝負で前回の勝負の決着をつけたらしい。

「何度やつても無駄無駄無駄なのじゃ」

「やつちやえ大和く！」

「頑張れ大和」

世界中の万人が等しく幸せになることなど有りはしない・・・しかし、それに向けての努力をすることはできるだろう。

俺はファミリーの仲間達の事で精一杯だ・・・とまあ、俺が珍しく難しい事を考えていると、勝負の方法が決定した。

大和と葵のやり取りがありトランプでの勝負で、トランプは校門をでたとこのコンビニで買ってくる事になった。

「しっかりコンビニで買われたトランプだよ」

「見ての通り、封もあけてないぜ」

大和と葵がトランプを確認していく。

「ジョーカーが2枚。スペードの1からはじまりKへ。次はダイヤの1から・・・数も見た目も並びも普通のトランプですね。問題ないかと」

「ああ、俺も見た感じ問題ないぜ」

大和がカードをシャッフルしていく、大和は暇な時にシャッフルの

練習をしているためか、かなりシャッフルが上手い。

「カットどうぞ」

大和が切り終えたカードの山を葵に渡す。葵はそのトランプを受けとり、上から数十枚のトランプをとり、それを一番下にうつした

「さあ時間ありません。賭けましょうか」

やはり真剣勝負と言うのはいつ見ても楽しいものだ。実力伯仲となれば、更に見応えがある。

「そうだな。俺はKに賭けようか」

「では、一番遠い6あたりで」

2人が思い思いの数字に賭ける。

「正解はお前がめくってくれ」

冬馬が一番上のカードをめくる・・・そして、反されたトランプの数字を見て誰もが驚きを隠せなかった。

「ダイヤのK・・・」

俺の呟きと共に、周りが反応を見せ始めた。

「なっ！？ズバリじゃと！？」

「ウオー！スゲー！！」

そして、大和が自分の勝ちを静かに宣言した。

「俺の勝ちだ」

「これは素晴らしいですね・・・見事に負けました」

葵冬馬の顔からは、敗北に対する悔しさよりも、嬉しさが滲み出ていた・・・気付いた人間は少なかっただろうが・・・

「いずれ、決着をつけましょう」

「ああ、じゃあな」

時間の都合もあり、今日の決闘はここでお開きになった。

余談だが、大和は今度は小細工だけじゃなく、頭も使ったもつとスケールの大きい大舞台で勝負がしたいと言っていた。うーん、どうしたらトラップで頭を使うのか不思議だ・・・

13話（後書き）

揚羽さんとの絡みは無茶苦茶だったな・・・

まあ大丈夫だろ・・・

れ、連投はきついぜっ

皆さんの感想まっています。

14話

今日は11人揃って登校。

「今日、金曜集会な」

「ウース」

「うえゝい」

「連休の予定も決めないとな」

「まゆまゆとクリは金曜集会分からないだろ。妹よ。放課後は基地に案内頼むぞ」

「アイアイサー！・・・ところで、このアイアイって何の略？」

「俺様に聞くとは上級者だな・・・猿？」

「サルじゃねだろ・・・目だろ、eyeって言ってるし」

「全然ちげえよ」

「マジか!!」

「語、かわいい・・・」

恍惚とした表情でこっちを見詰める京が何だか痛く怖かった。そし

て授業。

「というわけで、マロは平安時代こそが至高の文化だと信じてるでおじゃる。

マロのカリキュラムは平安時代9、その他の時代1でおじゃるから、そのように覚悟しとく、の」

・・・平安・・・・・・・・・・は！！　いい国作れば、鎌倉滅ぶ、って大和教えて貰ったぞ！！

放課後、キャップと手伝いを終え、更に強制的に連行され現在は福引き会場の長蛇の列に並び順番待ちをしている。みんなは金曜集会にもう行っている。

「おいキャップ、俺も回すのか？」

「何言ってるんだ。そのために福引き券別けたんだろ」

「別けたって・・・キャップ23、俺3を別けたとは言わんぞ」

「なんだよ・・・んじゃ1枚だけだかな」

「殆ど変わんねえよ！！」

ギヤイギヤイと騒ぎつつ順番が回って来た。まずはキャップが回す・・・が殆どがティッシュだけと言う結果。そして最後の一回になった。

「行くぜ！！風の如く回れ！」

「キャップ、ガラガラを風の如く回すと玉出ねえぞ」

「俺を信じる、お前が信じる俺を信じる！！」

「はいはい、ガンバ」

「行くぜ！！たりやああああああ！！」

キャップはグルグルとかなりの早さでガラガラを回す。すると物凄い勢いで銀色の玉がテントの上をぶち抜いた。

「大当たり」

どうやら2等賞だったらしく箱根旅行が当たった。今度は俺だ。ゆつくりとガラガラを回して行く。

「大当たり」

3等賞の焼き肉食い放題

「大当たり」

5等賞の変なシルバーリング

「はずれ」

ティッシュ

見たいな結果になった。

「ずるいぞ、俺に寄せ」

「横暴だ、さつさと基地に行くぞ」

「おっーす！ いやいやいや聞け聞けお前達！俺の運たるや、まさに豪運と言ってもいい領域だぜ？ ガラガラ回しまくって豪華商品GETだぜ！」

「うーすっ……どうしたみんな立って？」

基地に来てみるとみんながstand upしていた。京は何故かガクトが羽交い絞めにしてる、なんかみんながピリピリした感じた。

「……ってあれ、なんだこの空気？」

キャップがようやく気づいて、皆を見回す。

「ずるいぞう皆！ 俺のいない間に何青春ばっい、気まずい雰囲気になってるんだよ！！」

「そうだ俺達も入れろ！」

まるで子供のように悔しがっているキャップに便乗して俺も喚いて

みる。

「お、落ち着け今全部話す！！ 実は……」

大和が慌てて俺達に事の経緯を話す。

「ふーん。なるほどねー……ってか、話しもう全部解決してんじやん。クリスマスもまゆっちも謝ったから終わりじゃね？」

「そだな、別にその位普通だろ。喧嘩するほど仲が良くなる、だ」

「ちよつと違うがまあそんなとこだ」

そんな風にまとまった。

「京。機嫌直せ。な？」

「……っーん」

キャップは京に声をかけるが、京はいじけてしまっていた。

「あーあ。いじけちゃった。ケアはカタリに任せた」

「あいよ、任された」

京がこうなってしまった時、何とかするのは俺の役目だ。そう……出会った頃からずっと……

「とりあえず、どう皆。今ちよつと気まずい思いをした関係を修復する意味で、連休旅行にいかねーか？」

「旅行!？」

今まで黙っていた、ワン子が旅行と聞いて俺の膝上ではしゃぎ初めた。

「痛いワン子」

「いきなり発言したなお前」

「いやー、アタシもさつきクリに言おうとしたケド。直江さんちの大和君がアイコンタクトで自重って」

「無視なんですか川神さんちのワン子さん」

ワン子が反抗期突入し俺は京の頭を撫でながら事の行く末を見守る。

「キャンプ、旅行に行くにしても軍資金がないぞ軍資金が・・・」

大和が一番の疑問を出す。

「ふふ。心配するなよ、商店街の抽選で見事これを引き当て来たのだ!!」

キャンプがジャーンと出したのは先程最後に当てた旅行券『2泊3日箱根旅行団体様招待券』。

「ちなみに他は全部ティッシュでしょんぼり」

「けど、普通は当たらないよね・・・」

「俺は『焼き肉食い放題』 果たしても団体様用だぜ？」

「まずこつちよー!!」

ワン子が焼き肉に反応したので頭を撫でる。

「まあ有効期限はまだ余裕あるから旅行後でもいいだろ」

「だな」

「それにしても絶対守護霊的な物が付いてるね2人とも」

「霊の話はそこまでだ、モロ口。それより2泊3日で旅行……
ありだな。タダだし」

モモ先輩の苦手な物は唯一物理攻撃の効かない幽霊などの類の話を
直ぐに打ち切る。理由がちょっと悪いがこう言うのだけは女の子だ。

「箱根なら近いし、手頃だね」

「いつからよ？」

「3～5日だな。明日準備して明後日行くぞ」

準備は朝方にやるとするか……

「山で駆け回れるのね。いい修行になりそうだわ」

ワン子に例の件が伝えられるのも、そんなに遠くはないだろうし……

・ ・ できるだけ、修行に付き合ってやるかね。

「クリスマスも京もいいな。つか来い」

「まゆっちな、来ないなら、俺が拉致るだけだが」

「はい、是非！」

「俺はまゆっちの新たな性癖を知ってしまった・・・」

「えっ！？　そ、そそそうではなくてですね」

顔を真っ赤にして照れるまゆっち。まゆっちをからかうと面白いな。癖になりそうだ。

「箱根温泉と言えば有名だからな。楽しみだ」

まゆっちとクリスマスもかなり乗り気だ。

「京も来い、いいな？」

京は俺の言葉にコクリと頷いた。京は俺の言葉にコクリと頷いた。まだ機嫌が悪いらしい。

普段なら・・・『語、私を拉致して』ぐらいは言いそうだが・・・何とかしないと・・・

「今日は量が多いから、軽い寿司パーティーだな！」

キャップがテーブルに並べた寿司を見ながら言う。寿司パーティーはいいのだが、寿司ネタがタマゴだらけ・・・というよりタマゴし

かない。

「今日は何でこんなタマゴばかり」

「ネタが偏るのはよくあることだ。さー食え」

川神姉妹はかなりの勢いで寿司を平らげていく。京を見ると、京はまだいじけてるようだ。

「ほら京、口開けろ」

「あーん」

俺は京に寿司を食べさせてやる。今日は大サービスだ、普段ならこんな事はあまりしない。

「機嫌良くなったか？」

「口移ししてくれば良くなるかも」

どうやら、本来の京の調子が戻ってきたようだ。

「口移しは勘弁。ほれ、あーん」

「あーん」

俺はしばらく京にタマゴを食べさせてやった。

「みんながんばれー」

皆で結構食べたが、まだ寿司は残っている。キャンプ食べよ。

「キャンプも食べなよ！ 何まったりしてんの」

「俺店でちよつと食ってきたしな。ははは」

キャンプ達があーだこーだとやっているなか、俺はまゆっち達の方を見てみた。

「うん、美味しいな」

「はい、そうですね」

2人とも、遠慮せずに食べていた。俺達ファミリー内では遠慮する方が気まずくなるから良いことだ。

「今日は互いに注意されてしまったな」

「はい。次同じ事をしないよう頑張りましょう」

なにやら2人の絆の様なものができたようだ。

「クリス、俺の言った意味分かったか？」

「ああ、1人1人違う価値観がある、それをいきなり否定するのはいけない。自分もまだまだ修行が足りないと感じた」

「クリスは素直だからね、これからは自分の思想を相手に押し付けないようにな」

「ああ」

「まゆっちはガンガン相手に意見をぶつけることだな」

「はい、今回の事で余り物怖じし過ぎると相手を不快にさせることを学びました、これからもっと精進します」

「うん、まゆっちもいい子だからこれからゆっくり克服するといいよ」

2人に俺からの軽いケアを入れお茶をすすする。

「・・・あれ？この写真、皆さんの小さい頃ですか？」

「おー。9人揃ってるだろ」

「皆、面影があるな・・・」

まゆっちは竜舌蘭の写真を見つけたようだ。

「背の高い花ですねえ」

「ふふん。リュウゼツランって言うのよ」

「犬が知っているとは。よほど大事な話でもあるのか、この花には・・・」

「そうだな・・・」

俺達はまゆっちとクリスにその写真についての話を始めた。

15話

昔、俺と京、ユキで3人で過ごす事が多く。その日も河原を好きな本の話や夏休みの計画で盛り上がっていた。すると話し声が聞こえて来た。

「明後日開花かあ。楽しみよね楽しみよねえ」

「まあな。粋なイベントがやってきたもんだ」

「皆で写真とろうよ」

俺が今川神院で組み手の相手（強制的に）するモモさんとその他に同じ学校がいた奴等がいた。

「あれ、モモさんだ」

「ん？おっカタリじゃないかちょっとこっち来い」

モモさんに呼ばれ近くまで行く。ユキも京も俺の後ろに直ぐ隠れる。

「うわ、椎名に焔」

「うわ、ホントだ」

「あと1人誰だ？」

「ん、なんだ家の組み手相手に文句でもあんのか？」

「「「ないです！！！」」」

モモさんの一睨みで規則正しい姿勢で敬礼する3人。

「どうしたのモモさん？」

「ああ、お前等もこのビッグイベントに参加させてやろつと思ってな」

「いべんと？」

「そうだ、この花。リュウゼツランつて・・・センチュなんちゃらで・・・まあなんか凄い花らしい」

「姉さん、センチュリープラントな」

「そうそうそれぞれ。でだなコレが咲いたら写真とるからお前等も写りに来い」

「いいんですか？」

「私が許可する」

「じゃあいつなんですか？」

「さあ？」

「ダメじゃないですか！」

そして、花が咲こうとしている前夜。強烈な台風が関東に上陸した。当然の如く風間から招集がかかる。

「花がきちんと咲けるように保護するぞ！」

「おう！ 任せとけキャップ」

風が強い中、竜舌蘭の生えている空き地へと向かって行く。

「なあ竜舌蘭は普通に栽培されてるらしいぜ。今回ダメでも、どうかでそれ見ればよくね？」

「あの花は、あの花だけなんだ、代わりなんてねえ。空き地で咲いてるあの花を、皆で見たいんだ」

「アタシも！」

キャップの言葉にワン子を始め全員が賛同する。大和だって、皆の身の危険を考えているだけで、実際は皆と同じ気持ちなのだ。

「姉さんに頼るしかなさそうだな」

「ああ、私に任せておけ」

一子や師岡は風で飛ばされないようにモモさんと縄で繋がれ、モモさんは飛んでくる物を迎撃していた。

俺も体を張って京とユキを必死で守った。

ようやく空き地に着くとすぐさまみんなで花にビニールを掛け覆ったりと忙しく花を必死に守った。

直江や風間に指示で俺とモモさんも的確に動けた。

「やっと・・・おわった」

ようやく花の保護が終わりみんな順番に送り届け、俺達はその日を終えた。

次の日。花は見事に咲いてくれた。

「わーわー。これが50年に1度なのねっ」

島津に肩車してもらっている一子がはしゃいでいる。

「正直待たせるわりには凄く綺麗な花でもないな」

「よく知らんが、50年に1度だけの花なら記念写真にはもってこいだろ」

興味津々で花を見ている俺達。皆で守った花というのはそれだけで、凄く価値のある物だと思う。

「ほら、写真撮るんだろ。パシャリといくわよ。新顔も増えたと盛大に笑いな」

「よし、お前等、集合！！ 写真だ写真！！」

キャップの号令で皆が一カ所に集まる。写真を撮った後、俺達はその花を見ながら話した。

「資料の色より、真っ黄色だなこの竜舌蘭」

「竜舌蘭の中でも変わり種っばいよな」

竜舌蘭の花はヒマワリよりも黄色く咲き誇っていた。

「ね、またこの花見るとしたら50年後？」

「だな。私達は60歳ぐらいだな」

「じーさんだなー」

「もっとも、私は壮絶な修行で、若いままだろうけど」

「また皆で一緒に写真撮りたいなー」

ワン子の提案に皆が賛成する。

「お前等も一緒だからな」

「うん」

「・・・うん」

「・・・(コク)」

俺達は50年後、また皆でこの花と一緒に写真を撮ると約束した。
この、しばらく後に色々あって俺達は正式に風間ファミリーの仲間になった。

「……というお話でしたさ」

「なるほど。そういう経緯の写真のわけだ」

「あー昔の事思い出しそう。さらに落ちる」

「ほら、京……落ち着けよ」

俺は京を優しく抱きしめる。これ以上に京が落ちては夜通しで京を慰めなくてはならない。

もちろん、分かっているとは思うが仲間としてだからな。

「とにかく、また皆で見ようって事になったのさ」

「その空き地、埋め立てられちゃったけどな」

土地開発とやらで、あの空き地も無くなってしまったのだ。

「アタシ達で、きつちりこの花の子供をつつしたのよね！ このビルの下の草地にさ」

「後で見せてやろう。まだまだ小さいがな」

俺達に移した竜舌蘭は俺達の象徴と言っても良いかもしれない。

「50年後かぁ・・・何やらいい話です・・・も、もしよろしければ、そ、その」

「ああ。まゆっちもクリスマスも一緒にな」

「・・・ありがとう」

「今から楽しみですっ！」

竜舌蘭が咲く時、俺はどんな大人になっていて、誰の傍にいらんだろつか。案外一夫多妻になってたりしてな・・・ありえないありえない・・・

「ふう、外の空気吸ってリフレッシュ・・・」

「ガクトのために沢山残しといたぜ」

「友達の余計な心遣いが泣けてくるぜ」

ガクトは寿司タケノコがなくなっている事に期待したようだが、見事に裏切られた。

「いらないならもうわよー」

「どーぞどーぞ」

「俺の寿司土産で気まずい空気も解消だな！」

「流石、俺達のキャップだな」

寿司土産はともかく、あの時俺達が帰って来なかったら、まだギクシヤクしていたはずだ。

ちなみに残った寿司はきっちりワン子が完食していた。するとモモ先輩が連絡事項を言う。

「お前ら明日試合が有るから見たいヤツは見にこいよ」

「あれそうなの？対戦相手誰」

「カタリだ」

こうして、金曜集会は終わっていった。

16話

今日は土曜日、モモ先輩との試合当日。観客は川神院の関係者と風間ファミリーだけ。試合会場は川神院の闘技場。みんなに戦う事を話すと何で教えなかったとかずるいなどと言われ、明日行くからと言う事を言われみんな帰った。

さっきまで試合の事で盛り上がっていた声は消え静寂が周りを支配する。

「ではこれより試合を行う。双方、名を・・・」

「川神流、川神 百代！」

「我流、焰 語！」

「うむ、では、尋常に・・・始めえいいいい！！！！！！」

学長の開始の合図を皮切りに轟音が闘技場に響く。そして直ぐ距離を開ける俺とモモ先輩。

「ってゝ、ギリギリ相殺できた」

今のは開始コンマ1秒でモモ先輩拳と俺の掌が同時に当たった音。矢風でギリギリ確認できた豪速のパンチ、対処がもう少しでも遅れてたら流石きつかった、受けた手が若干痺れている。

「こんなもんじゃないだろ。行くぞ!!」

「ぐっ!!」

気弾が飛ばされソレをかううじで防ぐ、モモ先輩はそのまま気弾を連続で撃つて来る。

「! 白刃!!」

飛来する気弾は40弱を白刃で相殺していく。俺の戦闘スタイルは相手の攻撃を避け僅かな隙を付いて威力が高い技を相手にぶつける。だが今は防戦一方、モモ先輩は俺に距離を広げさせない戦法らしい。

「つく!はっ!!」

目の前の気弾に気を取られていた、接近して来たモモ先輩の真上から攻撃を軽いバックステップでかわし蹴りを放つ。

「甘い! 喰らえ!!」

モモ先輩は予測していたのか吸いつく様に蹴りがモモ先輩の手で凄い威力で弾かれ、体が宙に浮く。すかさず強烈な一撃が顎に放たれる。

「つく!狼牙っ!!!!」

それをギリギリで躲す。そのガラ空きのこめかみ目掛け足から出した狼牙を命中させ20メートル程吹き飛ばす。

「鎌狩!」

吹き飛ばされた所を目掛け鎌狩を手刀で20発ぶち込む。

「かわかみ波!!」

鎌狩を撃つ破るように土煙りを晴らし強烈な波動が飛んで来る。それを飛んで躲す。

「予測済みだあ!!」

「くっ……があっ!!」

飛んでかわした先にはモモ先輩が先回りしていて地面に叩き付けられる。

俺は肋骨が3本骨折。対するモモ先輩は服は所々が破けているが無傷。これがモモ先輩のチート能力、『瞬間回復』。常人ならば砕け、裂け、割れ、潰れ、壊れる程の攻撃でもたちどころに治る。体内に巡る”気”が傷口の細胞を活性化させ異常な速度で治る。それが川神百代が最強たる所以、孤高の王者、孤独な王者たらしめる忌まわしい能力。

「ちっ……厄介な能力だ」

既にその能力を受け入れ戦闘でしか自分の欲求を満たせない身体になっっている、顔では笑ってる。だけど……心では、心の奥底ではいつも1人で寂しいと……誰よりも、何よりもこの人生、

運命、宿命を呪っている。

「だから……その能力も、力も……モモ先輩……アナタの悉くを凌駕し、すべてを叩き堕とそう」

一歩前に出る。中空に手をかざし唱える。

「小さき心に草原、黒き虚城」

優しく、慈しむように……。体中の気が体を駆け巡る。

「存在を許された皇帝」

思い描くは世界の……。気が肉眼で確認できる程、圧縮して出来た気が掌でサッカーボール程の大きさに乱回転している。

「玉座に居座るのはただ一人」

体中の気を一気に収縮させテニスボール程の大きさにする。

「彼の者の名は」

テニスボール状の気が激しい回転を始め掌から拡散するかのようになり暴れる。

「『小帝』」

グシャと音を立てソレを握りつぶす……。次第に俺に変化が訪れる。肌の色が褐色になる、瞳の色はエメラルド、髪は金髪になる。それはまさに小さな皇帝が孤高な草原に威風堂々と居座るが如く。王の

気品を露わにし、表す。

「いくぞ、アンタを越えてその呪縛から解き放つ」

「・・・く・・・くくっ・・・ふふっ・・・ふふっはははっはは
っははは！！！！！」

モモ先輩は狂喜の笑みで笑い出す。

「いいぞカタリ。その力をどうやって得たかは知らん、関係ない。
私を楽しませろお！！ 星殺し！！」

特大の気がレーザービームの様に地面を抉り押し寄せる。

「はああああ！！！！」

迫る気の塊を右手で受け止める。そのまま掌から気が段々と吸収され始める。

「くっ！うおおおおおおお！！！！！！」

ソレを全て体内に取り込む。全身が焼ける様な痛みが走る。俺の髪が膝裏まで飛躍的に伸び、腕に紋様が浮かび上がる。

「行くぜ」

瞬時にモモ先輩の前にでる。

「喧嘩の華！！ おらっ、おらおらおらおらおらおらおらおら
おらおら！！！！！！！！」

「くっ！」

出鱈目に拳を打ちこみモモ先輩に反撃を隙を与えない。

「白刃！！ 狼牙！！ 鎌狩！！」

ガードが甘くなった所で一気に畳み掛け吹き飛ばす。倒れず地面を滑るモモ先輩の背後に縮地で一気に移動する。その場で掌に気を乱回転させる。

「螺旋丸！！」

その乱回転させた塊を背中に叩き込む。するとモモ先輩の身体が回転しながら修行僧が作り出した結界へとぶち当たる。伸びていた髪が首の根位まで短くなる。

「はっ・・・はあ・・・はあ・・・モモ先輩、まだっ！？」

背後からとてつもない衝撃で吹き飛ばされる。

「油断大敵だぞカタリ」

起き上り振り返るとモモ先輩がその場に居た。口から血が垂れていて、だが直ぐに腕で拭う。

「っ・・・ヤバッまた肋骨が2本逝った」

「私もさっきの傷で気がもう殆どすっ空かんだ。なんだあの攻撃量は」

「夢で見た技だよ、見よう見真似でやったら出来た」

「お前も十分チートだよ」

「そろそろ、この小帝モードも終わる。まだ持つと思ったらハズレた」

お互いに最後の力を出しきる様に構えをとる。

「……これが最後だ」

「うん、コレで決着だ」

「俺が（私が）……絶対勝つ!!!!!!!!!!」

「無双正拳突き!!!!!!!!!!」

「月下豹刃!!!!!!!!!!」

「勝者……………焰……………語!!!!!!!!!!」

翌日の駅俺は胸の辺りに包帯を巻いているが今日から旅行だ。

「ねえ君いくつ」

などと女性の方にナンパされる事約21回。女性陣の目線がだんだんと怖くなる中、駅を出た。

現在はモモ先輩、大和を抜いた8人で座っている。モモ先輩は女子大生の人と楽しそうに談笑している。

「・・・zzzzzz・・・冒険だぜ・・・zz・・・」

キャップはモロに寄り掛かり寝ている。

「あははは、仲がいいわねえ」

「嬉しくないなあ、男に寄りかかれても」

「で、それを見て嫉妬するガクト、『俺のモロを・・・とにかく許せねえ！』」

「・・・・・・・・！」

クリスが顔の赤くなっていた。

「・・・・・・・・どうしたクリス？」

「べ、別に、なんでもない」

「ほのかに同じボーイズラブ好きな匂いがする」

まあ大丈夫つつてるし、放置で大丈夫だろ。

「それにしても昨日は凄かったな」

ガクトが昨日試合を話題に出す。

「ああ、カタリがモモ先輩を倒しちまうなんてなあ」

「まあ速すぎて最後の部分しか分かんなかったけどね」

「「だな」」

男連中は俺とモモ先輩の戦闘を目視出来なかった模様。

「あの褐色肌で金髪のカタリは凄かった・・・・・・・・男としての魅力が格段にアップ・・・・・・・・」

「「うん」」

女性陣も何やらその話題らしい。唯一参加して居ないユキの紙芝居

を見て時間をつぶす。

「昔々、ある所にお姫様が居ました」

「お、まともそうじゃん」

「お姫様は民衆から集めたお金をカジノや娯楽に使いました。そしてソレを知った民衆は怒りました」

「まあ普通だな」

「そんな事を知らずその後もお姫様はお金をドンドン使い続けました。そしてついに怒った民衆はお城に攻め入りました。そしてお姫様とその家族をある場所へと連れて行きました」

「ふん」

「そこはギロチンが置かれた小高い丘の上、お姫様とその家族は……めでたしめでたし。お終い」

「うん、お姫さまがどうなったか気になるが……あえて伏せておこう。でも結構教訓になる話だな」

「えへへ」

ユキの頭を撫でながら箱根へと向かって行く。

16話（後書き）

ふいゝ連投は疲れるなあ

皆さまのご愛読に感謝し日頃のご飯を頂いております。

まあ趣味なんですが・・・

感想や誤字脱字があつたならばよろしく願います！

これからもガンガン投稿します！！

17話

箱根にようやく到着した。箱根湯本。旅館は山の上なので本来バスだが。

「アタシは走って旅館までいきまーす」

「山道、車で30分。ってことは結構あるよー」

「今日のノルマは昼までに十分こなしたる私達は」

ワン子は電車で修行できなかった分、旅館まで走って修行するつもりだろう。

「まだまだ。駆けて駆けて駆けまけるのよ！」

そして、ワン子はクリスを指差しながら勝負を挑んだ。

「勝負よクリ！どっちが旅館まで先に着けるか」

「面白い。自分もノルマはこなしたが、そこまで鍛練に精を出すなら付き合おう」

モモ先輩は、ワン子とクリスの荷物を持つとバスの中に乗り込んだ。続いて、京達がバスに乗り込んでいく。まゆっちがどうするか迷っていたが、モモ先輩にバスに連れ込まれた。

「カタリはどうするんだ？」

「俺もバス。んじゃワン子、クリスがんばれ」

そう言い残しバスに乗り込む。そのままバスに揺られ目的地に到着、すぐに荷物を部屋に置く。まだ到着してない2人を迎えようと玄関に行った。

「まだ来ないのか？」

「ん？大和か。ああ、まだ来てない……。俺の計算だともうそろそろ来る筈だ」

「俺の真似か？……。下手だな……。」

「う・うっせ」

2人で雑談していると……

「来た来た」

「一進一退って感じだな。二人とも本当に負けず嫌いだな」

「うおおおおおお！！絶対、勝つ！！！！！！」

「それは、自分の、台詞だ！！！！！！」

全速力で走って来る。猪突猛進の如く一直線にこっちに向かって来る。

「全くそうだな・・・つかコレ勝ち負けどうやって決めんの?」

ふと思つた疑問が口から出る。

「そうだな・・・ワン子ー! クリスー! 先に語の体に触つたほうが勝ちだからなー」

それを聞きとつたのか先程よりいつそ速くなる。

「おい・・・あのスピードを受け止めると?」

「・・・・・・・・じゃ」

逃げようとする軍師の肩を掴む。

「まて、軍師。この頃俺への風当たり強くね?」

「気のせいだ・・・それより来てるぞ」

「うお速っ!」

2人はもう直ぐと言うとここまで迫っていた。そしてワン子がダイブして俺を押し倒しゴールする。

「勝者、ワン子!」

「なっ!? 卑怯だぞ、犬!」

「まあゴール俺だし。こう言うこともあるって」

抗議するクリスに言う。不満そうな顔だがその場は治まった。

「ワン子お前、葉っぱ大量についてんじゃないん・・・おっコラ、動くな」

「なんだか撫でられてるみたいで気持ちいいわこれ」

走っている間に付いたと思われる葉っぱを丁寧に取っていく。髪を触られるのが気持ちいいのか「にゃふ」などと声を漏らしながら目を閉じ気持ち良さそうな表情をする。

「・・・・・・・・」

それを恨めしそうに見ているクリスが居た。

「ほれっ終わったぞ・・・どうしたクリス」

それに気付き聞いてみる。

「な、なんでもない」

プイッとそっぽを向くクリス。

「クリス、ほら行くぞ」

「・・・あ・・・」

ポンと頭に手を置き軽く撫でる。ツヤツヤしたクリスの髪はとても触り心地が良かった。

2人は俺を探していた京により風呂に連行されていった。

「やっぱり、クリスに俺が口だけの男じゃないって事を分からせないとか」

「何かするのか？」

「クリスに決闘を申し込む！！！」

「マジか？」

「ああ、マジだ」

答えた大和の顔は、いつに無く真剣な表情だった。覚悟を決めた友にかけ言葉は、そう多くは無い。大和の肩を軽く叩いて俺は、旅館に進む。振り返らずに、手を軽く上げて、友に向かって激励を投げかけた。

「頑張れよ」

「ああ」

そのあとまったりとした時間が過ぎた。そして夕食後の風呂。

「ふう……いい湯だね。温泉いいなあ」

「ああ。たまにはこういうのもいいなあ」

大和達が温泉に入ってくつろいでいると、ガクトが大和達の前で自分の筋肉美をアピールしてきた。

「見る貴様等！ 俺様の筋肉美！！」

「少しは隠してよ！ グロいんだよガクトのは！」

もちろん、ガクトは前を隠していないので、ジュニアが丸見えである。

「銃でいう所のバズーカだな、俺様のジュニアは！」

「まだ、実戦回数はないけどな」

大和がガクトの話しに茶々を入れる。

「訓練ばかりだよー。砲身は磨いてるけどな、って何言わせんじやいコラー！！」

「ああもつ。やめてよその手の話は」

「キモッ」

モロはこの手の話は苦手で、あまり乗らない。俺も余り好きではない。

「男同士でいちいち隠す必要もないだろ」

キャップもタオル等で前を隠す様な真似はしない。

「キャップは銃でいうと、マシンガンか……」

大和は銃に例えるのが気に入ったのか、銃の例えを使って、感想を漏らす。

「そういうてめえの愚息はどーなんだ大和」

「俺のはマグナムだね。重い一撃をズドンと」

大和達はお互いのジュニアの評価を始める。男にとっては、沽券に関わりそうな問題のため2人とも必死である。

「モロの水鉄砲は皮のホルスターに入ってるから」

「ん？ つまりそれって……」

キャップ達が話をしてる間に、俺も体を洗い終わった。俺も温泉に入ろうと歩き出した時……

「むけてないのか」

「うわああああ……!!」

モロは温泉に潜ってしまった。

「言葉のチョイスが殺しにいつてるとしか思えねー」

「純粹さは時に最強の悪意になるっつー事か？」

大和達の目が俺に集中する。話の流れで行くと皆が俺のジュニアを見るのは当然だが、大和とガクトはかなり驚いているようだ。

「お、お前のは・・・化け物級だな・・・なんか連射型ミサイル見たいな・・・」

「そうだよな、全てがEクラスみたいなの・・・まるでチートだな」

どうやら、俺はチートの存在だったらしい。

「それにしても、カタリの体って鍛えられてるよな」

「まあ、武術学んでりゃあ嫌でも鍛えられるさ」

俺は温まるために、温泉に肩まで浸かる。温泉の暖かさが日頃の疲れ等を解すように心地よかった。

「大和、カタリ！ 明日は俺様覗きをしたいぞ」

「姉さん達にボコられるだけだぞ」

俺も同意見とばかりに、重々しく頷く。ガクトがチツチツと指を振りながら、狙いを話し始めた。

どうやらガクトの狙いは、山の下の方にある旅館の女湯らしい。しかも、明日から女子高生のラクロスチームが泊まりにくるらしい。

「ははは！ 女子高生ラクロスチームか！！ うまくいきや、お前天国への扉が開くぜ？」

「・・・モモ先輩も行きそうだな・・・」

「姉さんならヤリかねんな・・・」

「さて・・・どうなることやら」

星がキレイに瞬く夜空を仰ぎ見る。こうして、一日目は何事もなく（？）過ぎていった。

旅行2日目、気持ちいい青空。女子メンバーが着替えている間、ロビーで遊んでいる。俺は京おススメの小説を頑張って読書中。

「モロ、この漢字はなんだ・・・」

「『そんなけい』だよ」

「うゝムズイなこれ」

「カタリの頭は何処で止まってるの・・・」

「お待たせー！ さあ行きまっしょい！」

「釣りの手続きはしておいた。竿も借りたぞ」

大和が釣り道具を持って来た。

「おおっ、手入れはバッチリだな」

大和の持ってきた竿は、きちんと手入れもされていたし、頑丈そうだった。

「語の竿は私が手入れしてあげるね」

「？ よろしく？」

「・・・そつちじゃないのに・・・」

京は俺の釣り竿を手入れしてくれるらしい。好意に甘えとしよう。

「皆で釣りなんて・・・素敵です」

「一応確認しておくけど釣るのって魚？ 女？」

「「一応言つとくけど、魚だから」」

モモ先輩がどこそのナンパ男みたいな事を言っているが、まあモモ先輩の場合は女を釣る事になっても大漁になるだろう。皆で川まで移動する、皆楽しみにしているようだ。

「「こころへんでいいだろう。ナイス景色だなあ」」

俺は皆より一本前にでる。

「余興を一つ見せてやろう」

そう言つて、裸足になりズボンのすそを捲くり上げ川に入っていく。

「カタリは何をする気なんだ？」

「・・・はっ！」

平手を水面にいれ一気に横に風ぐ。するとクーラーボックスに魚が3匹ほど入る。

「お前はクマかよ・・・しかも3匹・・・」

「凄いです！！ 手の動きが見えませんでした」

どうやら、評判は悪くないようだ。そして俺は川辺に戻る。

「すげえな！ よおし俺達もカタリに負けないように盛大に釣ろうぜ！！」

キャップの言葉に皆がそれぞれ道具を持ち釣りを始めた。

ワン子に京、モモ先輩は軽く鍛錬するらしく何所か言つてしまった。俺も気で相手の位置つかめりやなあ。

その後もヌバーっと釣りをする。しばらくしてモモ先輩だけが戻ってきた。

「ん？ もう終わったんすか？」

「いや、組み手に入った。あれは好きにさせるさ。あ・・・そうそう、京は最近寝技の修行を毎日してるそうだぞ、寝技で攻められる

覚悟しておけよ」

京が寝技ね．．．．．多分普通の寝技じゃすまない気がする。一応、精神力とか寝技の解き方鍛えとかないとな。

「そうします．．．．（それより、なんか変なヤツが居ませんか？）

」

「（ああ、一般人ではないな。お前はワン子の方へ迎え）」

「了解っス」

俺とモモ先輩は走って目的の場所へと向かう。しばらく走っているとワン子、京と軍服の女性が既に戦闘していた。若干ワン子達が押され気味。

「解放を許可する。必中筆頭。『刹燕』せつえん」

相手との間合いを横から一気に詰める。そのまま拳を相手ぶつけ数メートルほど後退させ上段からのバク天を利用した蹴りを頭に叩き込む。だが全て相手のトンファーで防がれる。なんて反射神経してんだコイツ。

「そこまでだ、まだ掛かって来るってんなら俺が相手だ」

一旦相手と距離をとるため後方に飛び退く。良く知った顔がそこにはいた。

「私のピンチに駆け付けてくれるなんて、語．．．王子様みたい」

京は余り緊張感がないらしく恍惚とした表情でこっちを見て来る。

「カタリ!？」

どうやら俺は結構有名になっているようだった。

「その通り、俺が……なんで有名になったんだよ俺、普通に暮らしたいのに……」

その場にorzになる俺。くそ強くなり過ぎた気がして来た。

「良くもカタリを負かしてくれたわね」

「いえ、勝手に自滅しただけかと」

このなかで冷静なツッコミありがとう……マルさん。

「まあいいや、久しぶりマルさん」

「ええ、驚きました貴方そこまで強くなっているとは」

「まあ頑張ったんですよ。どうしますか、消化不良でしょう?」

「ええ……それに……」

両手に持つトンファを構えるマルさん。口の端を釣り上げ笑う。

「貴方の實力……どの程度か測らせていただきます……」
H a s e n J a g d ! ! ! !

そのままこっちに猛スピードで迫る。

「俺の実力・・・とくとその身に刻め・・・」

17話（後書き）

今回登場した新技『刹燕^{せつえん}』

これはテイルズオブグレイセスのソフィの「クリティカルブレード」をパクった技です。

だはまた次回会いましょう!!

感想まっています!!

18話（前書き）

お久しぶりでーす。

はぁーこの旅行終了後どうしよ・・・

原作ではどんな感じなのか分からない・・・

長期的な休暇が必要かも・・・あ、長期つても3〜4週間程度で
すが・・・

すみません読者の皆さま・・・

こらからの身の振り考えねえとなぁ・・・

では本編どぞっ！！

18話

マルさんとの戦闘も中将により止められる。どうやら自分の娘が心配でここまで来たらしい。なんともバカ親っぷりだ。

中将達は多忙の身らしくまた帰っていた。マルさんは川神学園に転入してくるらしい。また騒がしくなりそうだな。

「舐めろ」

「は？」

中将たちが帰り釣りを再開してしばらくするとモモ先輩が唐突にそんな事を言ってきた。

「私の足を舐めろってセリフがあるだろ。舐められたらどんな感触か調べたい、だから舐めろ」

はっははははー…………まさか暇つぶしで舐めるとか。鬼だろ。

「大和にでも頼んでよ」

「なんかいやだ」

「姉さんひどっ！！」

「んじやいいや舐めろ」

「カタリパス」

「てめえ……」

「俺様が舐めるぜ」

「どっか行け」

「……」

ガクトが血の涙を流し釣りを再開する。俺を助ける。

そのまま楽しい戯れを楽しんでいると。大和の真剣な声が聞こえる。

「勝負だクリス、俺という人間を認めさせてやる」

「なるほど、力が伴えばお前の言葉にも説得力が宿るな。面白い。その勝負受けた」

どうやら勝負をする方向で収集したようだ。するとキャップが帰って来た。キャップに事情を説明し、勝負方法を決める事にした。

「大和とクリスが勝負……『決闘』をね……フム……事情は超分かったぜ。結局勝負にいきついたか」

「この場で勝負方法を決めるのも良いが、せっかくだからクリスと大和が納得できる勝負方法を考えてやろう……これは、川神院の名にかけて平等にやってやるぞ」

モモ先輩もキャップも考える気満々である。戦闘ではクリスが有利だし、頭腦的な物では大和が有利だろう。

「ああ、これは面白・・・ごほん、やりがいがあるな」

モモ先輩から一瞬だけ本音が漏れた、俺も実際は面白くて仕方ないのだからしょうがない。

「そこはかとなく不安だ」

「まあ、姉さんが川神院の名前を出した時は真剣な時なんで、大丈夫・・・タブン・・・」

大和の声はだんだんと自信を無くしていった。その後、日が暮れるまで魚釣りや川で遊んだ。ちょっとしたアクシデントもあったが、中々に楽しい一日だった。

「ユキ、ほれ引け」

俺は今、残った連中でトランプ、ババ抜きをしている。

「うーん・・・これだあ」

もぎ取る様にカードをとるユキ。フツバカめそれはジョーカーだ。

「あがり」

「・・・さてコレはババ抜きでは？」

「？ 何言ってんのカタリ、これジジ抜きじゃない」

まだ手札を持ったモロがクリスのカードを引きながら言う。

「な・・・んだと・・・」

「ほら次、語が引く番だよ」

「んーコレだ！」

5枚ある内の一番左端を引く、するとダイヤの5、持ち札に5はない。そのままトランプでいろいろと勝負する。今回は豪運は働かず全敗で最下位だった。

そして覗きに行ったみんなが帰って来た。なぜかみんなびしょ濡れで風呂に直行した。

「何事？」

朝俺の周りにはまゆっち以外の女性が囲む様に寝て居る、ワン子なんて俺の腹の上で寝ているし、京とモモ先輩は俺の腕を枕に寝ている、ユキとクリスは入れなかったのか俺の顔が挟む形で寝ているがある。

「・・・あつたけえ・・・」

俺はこの暖かさを堪能しながら二度寝に移行した。それからしばらく良い夢が見れた。

まあその後ガクトに強制的に起こされた。きつちりコロ・・・んんつ葬ったがな。

「カタリ、意味一緒だよ」

「ユキ、モノローグにツツコミ禁止」

「うえゝい」

ホント分かってんのか。まあいい、今日は大和とクリスの決闘の日。だが肝心の大和は風邪をこじらせていた、だが意地でも決闘に出るらしく、クリスにその事を伏せ決闘をする事になった。

「聞いた通りだ、まゆっちもそろそろ入ってこいよ」

「は、はいい・・・」

大和は入ってきた、まゆっちにあるお願いをする。

「俺が熱出してる事、秘密にして欲しいんだ」

「で、でででも、そんな状態で勝負なんて」

「まあ、まゆっちの言いたい事も分かるが、大和の気持ちも分かる・・・大丈夫、無理はさせないから・・・まゆっちも秘密にしとい

てくれ」

「わ、分かりました」

俺は大和を見ながら、指をバキツ、ボキツと鳴らす。本当に危なくなったら、大和を気絶させても止めるつもりだという意味表示だ。

「語・・・病人にあまり、手荒な事は・・・な？」

「だったら、無茶はしない事だ。こんな事で仲間失って堪るか」

こうして、大和とクリスの決闘の時間、きっかり午後九時に旅館近くの河原でクリスと大和が対峙していた。

「これよりクリス対大和のタイマンを行うぜ」

「ジャツジ兼司会進行は私とキャップだ。夜露死苦」

司会進行はモモ先輩とキャップが決闘の開始を宣言する。

「やや風邪気味とのことだが？」

「なあに問題ないさ。さあやろうぜ」

まゆっちは大和の方を見ながら心配そうにしている。今の大和は解熱剤によるごまかしで7〜8割の力は出せるはずだ。後は、軍師のお手並み拝見といこう。

「私達は3分ほど考えた。公正な決闘法を」

「んで、モモ先輩が言い出した、川神戦役の縮小版をやることにした」

キャップは川神戦役の内容を話しながら、クジ箱を用意した。

「クジ箱・・・その中に戦う種目が入っていると？」

「その通り。クジで引いた種目で戦ってもらうぜ、勝負を繰り返して先に5回勝った方が勝ちだ」

キャップはクリスからの質問に答えていく。まあ、勝負内容を頭に入れておくのは良いことだ。

「もし、5回続けて自分に不利な勝負が出てしまったら？」

「クリ、ボクシングのルールではね、ラッキーパンチで勝っても勝ちも勝ちなんだよ、ラッキーパンチで負けちゃっても負けは負けでことだよ」

妙に間延びした口調でユキはくじ箱を、振りながらクリスに言う。クリスも納得したようだ。

ちなみにさっきから、クジ箱を振っているので中のくじはかなり混じっているはずだ。

「運も実力ってことだ。いいな」

「ああ複数回戦えるならクジでも問題ない」

「同じく。3人で決めた種目ってのが、かなり不安だが・・・」

「最初はユキに種目を決めてもらっぜ。次からは勝った奴から順にクジを引いてもらっ」

先程のキャップの説明でクジには2つの種目が書いて有るものがあり、引いた者がどちらかを選べると言う利点があると分かっている以上、クジを何回引けるかは重要だ。

さて、ユキが引くクジはどちらに微笑むのか？

「さあ、第1死合・・・じゃなくて第1試合の種目を決めるクジを引けいユキ」

「アイマム」。てえーいつ」

了解の声と共に腕をクジ箱に突っ込むユキ。

モモ先輩、さつき死合って言ったよな・・・そういえば、俺が部屋を出て行った後もキャップと何かやってたようだし・・・俺も何が入ってる勝負内容が、少し怖くなってきたぞ・・・

「じゃーん！」

そして一つ目の勝負内容が書かれた紙が取り出される。ユキは引いたクジをモモ先輩に渡す。モモ先輩はクジを見ると、ニヤツと笑った。

「最初から、凄いのを引くな」

大和とクリスが、真剣な面持ちで種目の発表を待つ・・・

「じゃーん・・・Chain Death Match!!」

モモ先輩が種目を読み上げた。チェーンデスマッチ、それは皆さんご存知の互いの腕に鎖を付けて戦う戦闘方法だ。

「あ……ああっ……」

大和の口からは絶望の声が溢れ出していた。

「特殊ルールとか何もないチェーンデスマッチ？」

大和は最後まで勝負を諦めまいと、最後の希望にすがすが、結局は無駄に終わった。結果から言うと、大和は戦いが始まってすぐに場外に出て、負けになった。

勝ち目がない勝負でダメージを受ける必要はないので、当然の判断だろう。要はクリスより先に5回勝てば良いのだ。クリスも勝ちを拾ったようで気分は良くないだろう。

次は勝者のクリスがクジを選び出し、モモ先輩に手渡した。

「ん？ これは運勝負だな。肝試しゲーム！ 私の希望でいった対戦案だな！」

大和の表情が優れない、風邪が悪化してきたようだ。

「勝負内容は簡単、俗に言うポツケーゲームをする、もちろん異性どうしでな。クリスと大和はこの別のクジ箱2つから男子と女子のクジを引き、そのペアが何秒堪えられるかで勝負する」

ふん言って見ればチキンレース見たいなもんだな。

「勝負内容は簡単、俗に言うポツケーゲームをする、もちろん異性どうしでな。クリスと大和はこの別のクジ箱2つから男子と女子の

クジを引き、そのペアが何秒堪えられるかで勝負する。もちろん、この箱には、クリスと大和の名前も入っているからな」

本気で運だけの勝負だな、こんなのもあった方が楽しそうだってことでモモ先輩が娯楽で入れたんだろうな……きつと……

「まずは、大和は男、クリスは女のクジ箱からクジを引いてくれ」

大和達は言われるままにクジを引いていてモモ先輩に渡していく。

「なるほど……これは面白い勝負になりそうだな」

モモ先輩の笑顔が危険な出来事を暗示している気がする。そして、まずは大和のペアのタイムを計ることになった。

「さて、大和のペアは……この前私を打ち負かした……焰語と……」

「まさか……!？」

俺の脳裏に確かな確信と共にある女の顔が思い浮かんだ。

「自称カタリの所有物!! 椎名京だ!!」

大和が甲子園で逆転サヨナラホームランを打たれた高校球児のように手をつけていた。かと言う俺も同じ体勢になった。

「こんなクジでまで引き合うなんて……やっぱり運命だね、語」

「大和……スマンもって……いやもたんかもしれん……」

「

恐らく京は、ゲーム等関係無しに俺の唇を狙ってくるだろう。それだけは、なんとしても阻止しなければ……責任とって結婚してとでも言われかねない。

「どうした大和。まさかこれもギブアップか？」

「やるさ、流石に2度も逃げられん」

大和が俺に近寄って来て耳元で囁いた。

「いつちやえ」

「ぶつ殺すぞ……！」

「すまんジョークだ。出来るだけ時間を稼いでくれ」

俺はため息を吐きながら、頷いて京の正面に立った。

「じゃあ、まずは語がくわえて。はいあゝん」

俺はポツケーの端をくわえて、京を待つ……。京は微笑みを浮かべながら何やら体を動かしている。かなり気合いが入っているようだ。

「はじめるぜ？ セットアップ」

「じゃあいくよ」

京がポツケーの端をくわえる、互いに準備は整った。

「start!」

キャップが開始の合図をした途端に、かなりのプレッシャーを感じた。

京はポツケーをくわえたまま、それを嚙まずにヌツと口の中に一気に飲み込んだ。

「・・・うお!？」

俺は少しでも時間を稼ぐべく、ポツケーを唇寸前、ギリギリで折る。

「京・・・なんと恐ろしい真似を!! もう少してキスするところだったぞ」

「・・・惜しい」

京は隠すつもりもないらしく、未練がましく俺を見ていた。

「あの状況で、良く頑張ったな・・・記録は2秒ジャストという所だな」

「ふふ。これは勝負ありだな」

クリスは余裕の表情を見せている。確かに2秒ではどうしようもない気がするが・・・

それでは、姉さんが面白い勝負になりそうだった意味が分からなくなる、まだまだ勝負は分からない。

「では自分の番だな。フツ……2秒。軽い軽い」

クリスの引いたクジが発表された。

「クリスの相手は……なんとクリス自身のクジを引いてしまったぞ、後はクリスが2秒より少し長くくわえていただいで勝ちが決定だ」

自身がプレイヤーになるなら、相手が誰であろうと少し堪えれば良いのだからこちらの不利は変わらない。大和もそれが分かっているので、表情が厳しく。

「気になるクリの相手は……自称ナイスガイ、ガクトだ!!」

「はああい!! ご指名入りましたああああ!!!!」

ガクトが名前を呼ばれると同時に上半身の服を脱ぎ捨て、その鍛え上げられた体を見せ付けた。

「勝ったな」

「ああ」

俺は大和は某アニメの司令達の真似をしながら、クリスとガクトを見守っていた。

「このゲームの存在知ってたけどやるの初めてだぜ」

「だろうな、お前とやる奴なんてこの世にいねえよ。居たとしても

化け物くらいだろ」

「ふっ言ってる。俺様は今日それを体験する」

あ、なんかイラッとする。こんな勝気なガクトイラッとくるぞ。後でもういとど花畑を見せてやる。

「ま、まあ自分もだが」

クリスマスもガクトの下心丸見えな姿にたじろいでいる。

「相手がクリスマスで良かったぜ。さあくわえて！」

「う・・・うう・・・」

ある意味、京よりも下心丸出しのガクトはただただ気持ち悪い生き物になっていた。

「どうだこの気持ち悪さ。まさにチキンレース」

モモ先輩は絶対楽しんでいるとしか思えない。まさかとは思うが、クジは全部仕組まれていたんじゃないかなろうか？

「さあ、早くくわえてくれクリスマス。はあはあ」

「ううう」

「ほ・ら口を開けて！！ はあはあ・・・」

今のガクトは年齢制限を設けないと見せられないレベルだ。その時、

クリスの拳が動いた。

「む、無理だあーっ！！！！ 気持ち悪すぎる！！！」

クリスの掌底がいい角度でガクトのアゴに入った。ガクトは変な声を上げながらこっちにフラフラ倒れて来る。

「ガクト！？ 大丈夫か！！！」

心配するそぶりをしガクトを受け止める。

「ああ、何とか」

「そうか・・・俺が殴る余地はあるんだな」

「ああムリ死にそう！！！」

「遠慮するな。そら起きろ、クリティカルアッパー」

またしても顎にアッパーをかまし上空に打ち上げる。まだバトルフエイズは終わらない！！

「ワン子！！ パス！！！」

俺の回し蹴り。 2 H I T

「はい、ユキ！！！」

ワン子の絶妙な右フックがボディに決まる。 3 H I T

「えい!!」

ユキの踵落とし。4 H I T

「おー。ナイスクリティカルヒット! でもクリの記録は0秒な。口つけてないもんな」

こうして、2回戦は大和の勝利に終わった。……ガクト気絶。あれから既に2試合が行われ、大和もクリスもどちらも引かず、四回戦が終わった時点で2 - 2の同点になっていた。

「はぁ……はぁ。やるな」

「ふふ、顔が赤いぞ。怒ったか」

大和の容態は見るからに悪化している、薬で抑えていた熱や体調もまた悪くなっているだろう。

「互角だな、白熱してるぜ!!」

「大和。熱上がってきてない?」

「ああ。ちよつと額触らせてみる」

モモ先輩が大和の額に触れようとすると、大和がそれをやんわりと断る、その途中で大和が咳込む。

「も、もうダメです。松風私は行きます!」

「行けまゆっち! まゆっちなら出来る! 止まれば倒れる自転車が

まゆつちが選んだ生き方だ坂道を上がるんだ！ ペダルをこげー」

まゆつちが、決意を秘めた表情で俺達の前に出て来て声を上げた。

「そ、その大和さんは熱が上がってきたのではなく元から、もう・
かなり高熱だったんです！」

「おい、まゆつち！」

まゆつちを止めようとする大和だが、まゆつちは止まらなかった。

「熱を薬で抑えて戦ってたんです！熱を無理して戦うのが友達なん
ですか？ち、違うと思いますー！」

最初はまゆつちを止めようとしていた大和だったが、まゆつちの真剣な気持ちに飲まれてしまったのか、黙ってまゆつちの話を聞いていた。

「友達って言うのは・・・その、分からないですけどこうじゃない
くて、その・・・大和さんとクリスさんには仲良くして欲しいのに・
・・・う、うう・・・」

まゆつちは自分の言いたい事を言い切ると、静かに涙を流し始めた。

「・・・お、おぉ」

「まゆつち・・・・・・・・」

大和にもクリスにもまゆつちの気持ちが伝わったようだ、大和なんかは泣かれるとは思っていなかったらしく、珍しく困った顔をして

いる。俺はまゆつちに近づき、まゆつちの頭を抱き寄せるながら、まゆつちに語りかけた。

「まゆつち、それで良いんだ。思った事があればズバツと言ってくれればいい・・・それが仲間つてもんだ・・・まゆつちの思い確かに聞いたから」

俺がまゆつちを落ち着かせていると、みんなは大和に近づき思い思いの声をかけていた。

「でもなまゆつち・・・まゆつちが心配なのは分かる・・・が、これは必要な闘いなんだ。大和がクリスと仲良くなるために」

しかし、同じ仲間を心配させるのもどうかと思う。一体どうするべきか考えていると、大和がまゆつちに声をかけた。

「まゆつち、心配させて悪かったな。確かに・・・見てて気分は良くないよな」

まゆつちに謝ると大和はクリスにある提案をした。その提案は次の勝負で決着をつけるという提案だった。クリスと大和が同点だからこそできる提案、それをクリスは受け入れた。

「まゆつち、試合数を減らした。後1勝負だけやらせてくれ。頼む」

「・・・わ・・・分かりました。そこまで言われるなら」

「ありがとう!」

こうして、次の試合が大和とクリスの最終試合になった。

「やるじゃんまゆっち！」

「え……」

「これからも言いたい事あればガンガン言え」

川神姉妹から始まり、次々に風間ファミリーのメンバーがまゆっちに声をかけていく。

（も、もしかして……私、認めてもらえたんでしょうか？）

「多分、まゆっちの思ってる通りだ。これで良いんだよ仲間ってのはさ……」

まゆっちが仲間や友達を作るに当たり大切な事を発見できたと思う。それだけでも今回の大和とクリスの闘いは意味があったと俺は思う。

「ありがとうございます!!」

「表情はまだまだな……」

「はぁう!？」

「はは、カワイイじゃんまゆっち」

まゆっちの表情も少しずつ、柔らかくしていかないな。

18話（後書き）

うー・・・あー・・・

どうしましょーこれからどないしよあー!!

うわーここで絶対終わらせることなど出来無い!!

・・・どないしょ・・・

どなたかヘルプッ!!・・・出来ればこれからどうなるのか教えてほしいッス。

ごめんなさい・・・皆さまに迷惑かけてしまい・・・こんなダメ男に協力してくれる方はどうか教えて下さい。

何とぞこのバカ（ザン）を見捨てずこれからもこのご愛顧の上よりしく願います!!!!!!!!!!

19話

「って事で、ラストバトルだ」

まゆつちが認められてすぐ、大和がクジ箱からクジを引いた。最終種目は山頂からダウンヒルランニングバトルだ。モモ先輩達が種目の説明を始める。

「山頂の展望台からここまで駆け下りるランニングレースだ」

説明を聞いていくと、ただのランニングレースでは無く、山の中腹にはチェックポイントが2つあり、クイズに答えてサインボールをもらう必要があるらしい。道の途中にあるポイントには難しいクイズ、離れたポイントには簡単なクイズが用意されているそうだ。他のルールはだいたいこんな感じだ。

- 1、乗り物に乗らなければどこを通っても合法。
- 2、相手チームへの妨害は禁止。
- 3、クイズはパスしたり間違えると次の問題が出るまで1分かかる。
- 4、クイズには西洋史、日本史、雑学、数学、物理のジャンルから選べる。

5、サインボールを持っている方がゴールすれば勝ち。

こんな所だ。

「OK」

「承知した」

山頂に移動する途中で大和はモモ先輩やキャップに何か質問していた。恐らくは何か考えているのだろう。

「大和さん・・・」

「大丈夫だつて」

心配するまゆつちに、答える大和だがその声は病人のものだ。

「止めるなら今のうちだぞ」

「でも、やるんだろ？」

モモ先輩の問いに、大和はハッキリと答えた。

「大和男児には、意地があるわけだよ」

「男の、誇りだな」

「誇り」

誇りや騎士道を大事にするクリスにも、大和の言葉は響いたようだ

った。

「本気で勝ちにいったら勝ち続けている事。まさに今も、そんな状況になりつつある」

それが、大和の誇り・・・大和が本気で勝ちにいった時は過程はどうであれ、最終的には勝ちを収めている。

「ふ・・・面白い。その誇り、悪いが砕かせてもらう」

クリスが良い表情をしていた。間違いなく本気の証拠、これは厳しい闘いになるかも・・・
そして、俺達は展望台に到着し、皆がそれぞれの役割について勝負の準備が整った。

「ゲームの進行は私が責任をもって監視してるからな。大和の状態がやばいようなら無理に止めるぞ」

「分かった。判断は姉さんに任せるよ」

どの道、大和の体力ではこの勝負が限界だ。大和の策が勝つか、クリスの鍛練の結晶が勝つか・・・見物だな。

「クリス。これで決着だ」

大和が拳を差し出す。

「受けて立つ！」

クリスが拳を合わせた。

「よし！ 最終戦！ 始めっ！」

モモ先輩の合図が最終戦の開始を宣言する。

「はああああ！！！！！」

クリスが気合いも十分に走り出す。大和もそれを追うかの様に出発する。

「んじゃ俺は一足先にゴールで待ってるよ。今回大和の男が見れるな」

「ああ楽しみだ」

俺は大和達の向かうゴールに一直線に展望台を降りた。

ゴールで待っているとクリスが下りてくるのが見える。大和早くしろ。

「クリスこっちだ、俺にタッチすれば勝ちだぜー！」

「ふっ、ゴールが見えたぞ、大和達の姿は見えない。風邪とはいえ、ぬるい勝負だったな直江大和」

すると河原に大和の姿があつた。このままでは、クリスがもうすぐゴールしちまうぞ。

「うおおおおお？お？お？お？お？お？！！！！！！！」

大和が雄叫びと共に立ち上がり、走り出す。状況は五分五分、大和は岸からここまででは短いだがスピードに乗れていない、クリスは遠いが走っているのでスピードに乗っている。

「大和、こっちだ。俺にタッチすれば勝ちだぞー」

気付いたキャップが大和に向かって言う。そして均衡が崩れる。クリスが全力ではなく余力を残し走っているため若干大和が速い。

「しまっ!!」

「おお おお お？ お？ お？ お？ お？ お？ お？ 俺の・・・
勝ちだ ああ ああ ああ！！！！」

「勝者！直江大和！」

モモ先輩が大和の勝ちを宣言した。

「・・・クツ・・・負けたのか・・・」

「そうだ・・・ゼエ・・・ハア、お前の負けだ」

「むむむ」

今回の勝利は、大和の根性とクリスの油断によるものだが、大和の勝ちである事に変わりはない。

「少しは、ゼイ、ハア、分かったか俺の実力」

「・・・ああ、許せ。お前は強い男だった。自分自身が未熟。またそれを思いしらされた」

「はは、分かればいいんだ・・・分かればっ・・・」

大和とはそう言うとうと気を失ってしまった。

俺達はまだ遠い地点のチェックポイントで待っているまゆっち達を回収して、旅館にもどった。

旅館に帰ったら、大和の背中の治療もしなくちゃならないな・・・しかし、今日は久しぶりに大和の本気の姿が見れて良い気分だ。大和を口だけの奴と勘違いしている奴らにも見せてやりたいくらいだ。こうして、大和とクリスの決闘は、大和の勝利で幕を閉じた。クリスと大和が分かり合うにはまだ時間が必要かもしれないが、そんなにはかからないだろう。

「・・・願わくば・・・この2人は良き友になれる事を切に願う・・・」

大和は俺達が昼飯を食べている時に目を覚ました。

「ようやく起きたな、薬だ飲め」

「ああ、サンキュ」

大和に薬を渡すと、俺は自分の定位置に戻った。

「ほら、クリ。さつさと携帯電話皆に教えろ」

「ああ。ちよつと待ってくれ」

クリスは携帯を操作して、皆に赤外線電話番号等を送る。しかし、何故かガクトにはデータが来ない。

「こねええええー！！！」

二度目の送信でもガクトにはデータが届かない、なんと言っか哀れだ。

「じゃあガクトは教えなくていいな」

ガクトはクリスの冗談にいじけ初め、男に走るような事を言い始める。三度目ので何とかガクトにも届いたようだ。

「キタキタ俺様に来たぜ！ ははは、やっぱり女最高！」

ガクトが調子が良いのはいつもの事なので放置して、携帯を持っていないまゆっちの所へ行く。俺が近づくと、いつものように松風と話をしていたが割り込む事にした。

「まゆっち。帰ったら携帯でも買いに行こうぜ」

「え・・・」

驚いている、まゆっちにキャップが声をかける。

「ないとすぐ連絡つかないだろ？俺の招集は速やかに従ってもらわねーと」

「キャップの用事は時々ふざけた物もあるがな・・・」

前に昼寝してたらキャップから電話が掛かってきたので何事かと思えば、『今凄く腹減ったから飯作って』なんて言われた時にはどうしてくれようかと思ったものだ。

「あああ幸せです、私の心にも春が来ました」

クリスマスもまゆっちもすっかり俺達に馴染んでいた。クリスマスはちょっとは柔らかくなったし、まゆっちも意見を言うようになった。

「よし。後はお前達2人に川神魂を授けるぜ」

「川神魂？」

「こんな詩がある」

光灯る街に背を向け、我があゆむは果て無き荒野
奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ
揺るぎない意志を糧として、闇の旅を進んでいく
……これが川神魂だ」

俺がモモ先輩の組み手相手に任命された時も教えて貰った。まあ理解出来なかったんだがな。

「勇往邁進。一言で言えばそいう事だな」

「勇往、邁進」

「困難をもとせず、突き進む事……ですね」

やはり、俺達の仲間になるなら川神魂は必要だろう。

「辛いときは口にするがいい。同じ旅に行く仲間がいる。力が出るぞ」

「それさえ刻み込めば他には何も言う事ねーな」

「じゃあ、乾杯でもするか……新しい2人の仲間に」

「いいなそれ。皆飲み物持つんだ」

大和も俺達に加わりグラスを持つ、皆にグラスが行き渡った。

「皆行き渡ったわね。いいわよキャップ！」

挨拶はリーダーたるキャップの仕事。

「えー。若葉かおるころとなりましたが……」

「若葉がおることの意味わかんねえぞ、キャップ」

「小学校の校長かテーマは！」

「堅苦しいぞ、暑苦しいぞ、息苦しいぞキャップ」

俺とガクト、ユキからヤジが飛ぶ、俺達の乾杯に堅苦しさは不要だ。それに、挨拶はやはりキャップらしくないとな。

「分かった分かった、じゃあ簡潔に行くぜ、楽しくやろうぜ。それで十分だ・カンパニー」

「カンパイ!!!!」

11個のグラスがぶつかり合い、音を鳴らした。

まゆっちとクリスが正式に俺達の仲間になったと同時に、新生風間ファミリーが誕生した瞬間だった。

20話（前書き）

いえーい。

みなさま多分お待ちかねの投稿です・・・見てくれるといいな・・・

んじゃ本編じゃい！

20話

宴会から一夜明け朝。今朝も女性陣に囲まれ起床。みんなで朝食をとる、その時バスが来るまでは自由行動と言う事になった。

「んじゃ今日はどうする、まゆっち？」

「語さんの行きたい場所でい、いいです・・・」

「ん・・・まあ適当に散策するか、んじゃ行こうぜ」

「は、はい！」

キャップがあみだクジで決めようなどと提案。そこで俺とまゆっちがペアで回る事になった。まあ俺もまゆっちと仲良くなりたいと思っていたし、いい機会だ。

その後、歩きながら大まかな目的を決めた。適当にブラブラと観光名所、甘味処、お土産屋などを回る事にした。

「まゆっち、滝だ滝！！ 凄いぞ！！」

「そ、そうですね。し、知ってますか？ 滝の近くはマイナスイオンが発生するんですよ」

近くの滝を見に行く。まゆっち曰く、マイナスいおんってのが滝の近くでは発生するらしい。まゆっちは大和並みに博識だな・・・

いおんってなんだ？　なんかの菌か？

「おお、ウマイー！！　ウマイぞ！！　このレシピ教えてくれおっちゃんー！！」

「教えられるか！！　バカタレー！！」

「ケチだなおっちゃん・・・」

甘味処ではウマイ箱根まんじゅうを見つけ店主にレシピをせがむが断られた。くつこの味はどうやったら出るんだ・・・まさに境地だぜ・・・

「なんかイイのねえかな？　まゆっち、いいのあった？」

「・・・」

「？　まゆっち、それ欲しいのか？」

「へ？　い、いいいいいいえ。コレはですね、ただ珍しいなと思って、た、たただ見てただけなんで、別に欲しいなどと、そんな私には・・・」

「買ってやんよ。店員さーん、コレとコレ下さい」

土産屋ではきよどるまゆっちに髪留めとケータイストラップを買って上げた。おおなんといい笑顔・・・記念にパシャリ・・・うむ至福の一時・・・

そのまま時間になるので集合場所に戻った。すると程無くしてみんなが揃い帰ることになった。

そして帰りのバスを待っているところだった。すると突然後ろから声をかけられた。

「・・・もし・・・その貴方・・・・・・・・不思議な運命を持っておられるその貴方・・・・・・・・」

「俺様か？」

「いえ。青い上着を着ている貴方だ」

どうやら、占い師風の姿をしているじーさんが用があるのは俺のようだった。

「なんだ？ 俺に用か？」

「見れば見るほど不思議な運命をもっておる」

「不思議な運命？・・・」

不思議な運命などと言われては気になるのが人間の性というやつだ。

「いかがですか・・・この私めに皆様の運命を占わせては頂けませんかでしょうか？」

「面白そうだな頼むよ、じーさん」

俺はじーさんに人数分の代金を渡し、名前等を教えた。じーさんはタロットカードで占いをするらしい。

「貴方はいくつかの大きな流れの中に身を置いていますな

これから、そう遠くない未来にどれか一つの大きな流れに身を委ねることになるでしょう

どの流れに身を委ねるにしても、選ぶのは貴方自身という事だけはお忘れになりませんようにな」

つまりは、人生の分岐点のような物なのだろう。どんな選択肢を選ぶか分からないが、自分で選べるなら、後悔だけはしないはずだ。占い師のじーさんは更にカードをめくっていく。

「おお、貴方は『節制』、しかも正位置。これは調和を表すカード・・・」

更にもう一枚カードをめくる。

「・・・おお、貴方達グループ全体のカードは『世界』・・・1人1人の未来は輝かしいですな」

占い師の話の途中でバスが来てしまった。

「どうやらバスが来ちまったみたいだ、中途半端で悪いがここまでだ」

俺達は次々と帰りのバスに乗っていく。占い師はバスに乗っていく風間ファミリーの顔を見ながら『うむ、この者も試練を得るが大丈夫』と納得しつつカードをめくっていく。

「どれ、これが最後の一枚ですな・・・」

占い師が最後のカードをめくると、温和だった顔が驚きに歪む。

「……この者は宿命に引かれてしまっている、しかし彼等グループを表すカードは『世界』……そして、この者と一番深く関わっている者は節制……ならば術はあるはず……一致団結して試練を乗り越える事を祈りましょう。そうすれば、宿命の刃を避けることでしょうか……君達の未来に幸多からんことを……」

夜に自宅について、荷物を下ろしたあと、島津寮に向かった。島津寮に入ると、ゲンさんが箱を持ちながら、俺に近づいてきた。

「焰か、丁度よかった、ケーキ。でかいのもらって食いきれねえ。上の女達に分けてやれ、味は相当いいと思うぞ」

「ん？ 大和はどうした？」

普通ゲンさんは大和に頼むのに、俺に頼むとは……

「直江ならヤドカリに夢中だ」

俺は納得すると、ゲンさんからケーキを受け取り、京に許可を貰うと2階へ上がった。京とまゆっちにケーキを渡し、クリスに渡す為に、部屋のドアをノックをした。

「・・・・・・・・？」

ノックをしても出て来ないが、声は聞こえる。俺は、クリスの部屋に踏み込んだ。するとそこには、クマのぬいぐるみを抱き締めながらゴロゴロと部屋を転がっているクリスいた。

「・・・・・・・・カタリ」

クリスが俺に気づき、顔を真っ赤にしていく。クリスの部屋を見ると、まさに日本とぬいぐるみの融合といった感じの部屋だ。

「久しぶりに見た気がするな」

「・・・・・・・・そ、そうか？」

しばらくぬいぐるみを見まわす、するとボロボロの継ぎ接ぎだらけの猫のぬいぐるみが目に入る。

「お、これまだ持っていてくれたんだ・・・懐かし」

その猫のぬいぐるみ、”クリス”は俺が名付けてクリスの誕生日にお小遣いをつぎ込んで買った思い出の品。クリスと遊ぶ時は必ず一緒に外に持って行ったために直ぐボロボロになってしまった。だがそれを俺が必ず直す役目で継ぎ接ぎの糸は不格好な形だ。

「ああ、大切な宝物の中で一番大事だ・・・」

「はは、嬉しいよ。まあこれからもコイツのこと大事にしてよ」

「当たり前だ」

「あ・・・そうそうコレケーキ。ゲンさんが別けて食えつてさ」

クリスにケーキを渡し大和の部屋に来た。

大和はついさっきまで電話をしており、大和に彼女ができたかなんて話をしていたらしい。

その話しの流れから大和は俺にも好きな女がいるか聞いてきた。

「・・・で？ どうなんだよカタリ？」

「好きな女はみんなだよ……」

「・・・・・・・・・・は？」

「あ、お前の思う好きと俺の好きはちよつと違う・・・そうだな・・・”好き”は人としてって意味で、その好きが惚れるに変わる・・・感じ？」

「最後疑問形じゃん・・・まあまだ付き合う気はないって事だろ」

「まあ最終的にはそんな感じ」

「はあ・・・・・・・・お前って以外に天然だな・・・」

「ん？ なんか言ったか、大和？」

「いや、なんでもない」

付き合う女の子を頭の中で想像する。なんて事だ、頭の中に浮かんだの全員風間ファミリーの女の子が殆どじゃないか……。キアラが濃い人間ばかりだし、付き合うには苦労するんだろうな。

まあ、１人だけ俺さえ良ければすぐにでもって人間もいるが。まあ、なるようになるさ……。今は仲間１１人で楽しくやっていよう。それで、俺が誰かに惚れるならそれでいいさ。

明日からはどんな日が始まるんだろうな……。楽しみでしかない。まあ、前より騒がしく楽しくなるのは当然だな。

俺はこの後も大和と好きな女の子の話をして盛り上がった。

そして今日も楽しかった一日は終わり、明日が来る。

20話（後書き）

うむーやっぱそろそろオリジナル突入かな・・・

読者の皆さまが満足できる作品を目指して頑張ります。

そんじゃまた次回！！

必読

どうも、作者の斬滅のザンです。

この度はこの様な場を設けさせていただき、え？ 前置きはいらない？ スーツも脱げ？

～着替え中～

改めておはよう、こんにちは、こんばんわ。ザンです。

えー堅苦しく話すのもなんなので、ラフに赤裸々にお伝えしたい事があり今回はこの無駄な話を設けました。

では本題に移ります……………

最近では盗作などの他者の作品の文章を流用もしくは乱用？した作品を堂々とサイト上に掲載する行為が多く見られ読者の方々に多大なる疑問、憤怒、憎悪？などの感情が巻き起こることがあります。

今回、自身もその疑いが掛かり若干の戸惑いがありました。

そして盗作の疑いがある作品などに自身から、その作者との友好的解決手段の……………”交渉”でお互いの合意の上、連載継続を行うことが決定いたしました。

ですが、作者間のみで解決してしまい、読者の方々に多くの不平不満があったと感想の文章を頂き今回はその謝罪とお知らせをしたく、PCのキーボードを打ちました。

読者の方々に多大なる迷惑をお掛け致しまして、

誠に申し訳ございません。

これからは読者の皆さまが不快になるようなことを避け、

赤裸々に、大っぴらに、皆さまが安心して、安堵して見れる作品を目指して行きたいと思っています。

これから幾度の不定期更新になりますが、そこは大きな心で、おおらかな心で更新をお待ち下さい！！！！！！

・・・・・・・・最後のはダメかな・・・・・・・・あ！ コラ、
メールに辛口な文打って送るな！！

俺の心はガラスを通り越して、シャボン玉って言われてんだぞ！！

くっ貴様等！ 俺は将来ビッグな辞書買って、多くの漢字を覚える
男なんだからな！！

覚えてろ！ オマエ等の知らない言葉とか色々覚えてやる！！

うゝん最後は不真面目だなあ・・・反省せねば・・・

次回の更新を待て!!

報告・・・かな？

どうも、ザンです。

この『真剣で私に恋しなさい〜古き皇帝〜』をお読みいただき誠にありがとうございます。

現在まで更新が滞ってしまつて申し訳ございません。

今回の報告は、決して作品放棄などではありません。

オリジナルの敵を無くしたいと思います。

はい、それだけです。

ですので所々矛盾する場所があるかもしれませんが、

皆さまの温かいお心で、ご了承くださいたくおもいます。

ではこれからもこの作品が皆さまに良きものである様に願います。

21話（前書き）

すいません簡単な”つなぎ”程度のかるゝい日常です。

今まで更新出来なくてすいません。

まだまだ全然更新できませんが、

こんな感じでたまーに更新したいと思っています。

本当に、誠に申し訳ありませんでした。

21話

何事も無く旅行から帰って来て、少し経ったある日。今日は木曜日。

「ふぁ〜……ねむっ……」

「膝枕してあげるよ語」

「京、下はコンクリだからな、汚れるっつの」

「別に気にしないのに」

「流石にダメだと思っわよ」

ワン子も引き攣った笑みで言う。

「そうか汚れなければ良いんだな」

「はい、そこブルーシート敷いてもやらないから……っかどっから出したんだクリス」

「マ〜シュ〜マ〜ロ〜」

「ユキ、マシユマロは万能器具じゃねえかな。しかも某青ダルマ頭の猫型ロボ見たいに言うな」

今日もみんな揃って登校する。

「……」

「まゆっち松風を凝視するな、流石につか無理だからな、松風がペシャンコになるぞ」

「……」

「ワン子、確かに一番枕として良い感じだが、やめろタイヤじゃ堅くて寝れん」

俺の眠い発言で女性陣が一様にここで寝かそうとする。そんな楽しい登校を終え俺達は授業を受け。

「で、あるからしてここの公式を……相手の籠手を狙い……」

なんたる、まともな授業の筈が途中から剣術の指南になってる。まあ見てて退屈しない授業を受け、放課後。

「今日開くかな」

「店か？」

「そつ、バイトはどうする？」

「今日は無理だ」

「マシユマロ補充の日だから無理だよ」

「私も今日は部活行くから」

「おっ偉いぞ京」

京の頭を撫でると恍惚とした表情になる。咄嗟に手をワン子の頭に瞬間移動させる。

「……」

京は意識が飛んだように硬直している。

「お、どうしたのカタリ？」

「いやっ邪な頭を撫でたから撫で直した、気にするな」

「わふっ、そうなの？」

「撫で直しなんて無いからな」

「何故だ！　口直しとか出直しが有って撫で直しは無いのか！？」

「全く別の意味じゃねえか。しかも無い物は無いんだよ」

「……んじゃ俺が作った」

「……もついいよそれで……」

「まあ俺は帰り遅くなるてことだから、まゆっちとゲンさんに言っ
といて」

「了解した」

校門前でみんなと別れ1人仲見世通りに向かい屋台を開く。

「ふいいーい……いい湯だー」

一仕事終わった後の風呂は格別だ、これで酒があつた

「つてなにオレはオッサン思考してんだよ」

オレは仕事を終え寮に備わっている風呂で寛ぐ。

「はあー
いい湯だー」

「そうだね」

⌈
⋮
⌋

「はあ」

待て待て待て

[illegible]

「おいしい！！！！何でいんだよユキ！！」

オレの隣にはユキが気持ち良さそうな顔で居た。ユキの白い肌にうつすらと水滴か汗の雫が見える、それがなお一層オレの心動悸を強める。

「ばっ、ちょ…なぬああにゅああっあああっあああっ！！！！！！」

意味不明な言語が口から洩れでる。

「あははは、カタリ」

「近付くんじゃねえよ！ やめろ、来るな！ 慎みを持って！ イヤっ
持つて下さい！！」

「カゝタゝリ」

無邪気な、無垢な笑顔で迫って来るユキは悪魔にしか見えない。今はなんとか湯煙でギリギリと言ったところだがこれ以上は危ない、と思ったオレはその場（風呂場）を離脱して脱衣所に出る。

「あ、アレは毒だ……勘弁しろよ……」

頭を抱え膝をつく
その隣でクリスが下着姿だった。

「…うう……ゴメン…」

兎に角謝った、全力全開の土下座で。半裸で土下座、どこか背徳的な絵だ。

「……………」

「……………クリス？」

反応が無いクリスに怖々とオレは頭を上げ、クリスを見る。するとオーバーヒートし、顔が赤く頭から煙を出しているクリスの姿があった。

「……………でっ、出よう……………」

オレはこのままでは何か悪い事があると思いパンツとズボンだけを履きその場を後にした。

「忘れるー忘れるー」

寝る前、オレは必死で風呂場であったことを忘れようと脳をフル稼働させる。

「何を？」

「おわぁ!？」

オレは考えに没頭していたらしく、彼女に気付けなかった。

「ねえー何をー」

「いやっ別に…」

怖い。目の前に居る彼女がとてもなく怖く感じるのはオレだけだろうか。そう、今目の前に居るのは
京。

「ねえ」

怖いっ！ マジで笑顔が怖い！

「な、なななんもねえよ……」

だ、ダメだ。こんなんじゃ京にバレる!? こうなったら!!

「京…今日は一緒に寝るから勘弁!」

「早く、語……」

「早っ!？」

京は既にオレの布団を敷いてそれに寝ていた。

なぜか恍惚とした顔だが、そこは無視だ!

「寝るだけだからな! 変な事すんなよ!」

「分かんない、語の匂いで発情しちゃうかも？」

「ない……と言えない所が怖い!!」

21話（後書き）

マジでどうしよう……案浮かばねえ……

マジコイ^sが発売されてから更新しようかと思ったけど……

無理かもです。

マジで不定期更新なんで長い目で見てください。

誠に申し訳ありません……！！

苦情受け付けます！

……あんまりひどい事書かないでください。

お願いします。

報告

まことに勝手ながら、この作品『真剣で私に恋しなさい〜古き皇帝〜』を、

本日を持って”打ち切り”をさせて頂きます。

不満など色々あると思いますが、すいません、自分の力不足です。

感想では暖かい言葉を頂いて居るのですが、すいません。

いままで読んで頂きありがとうございました。

期待を裏切って誠に申し訳ありませんでした。

出来れば、数年に”マジ恋”を題材として書く日が来るかもしれません、

その時はまた暖かく見て頂ければ幸いです。

尚、この作品は明後日をもって消去させていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2456o/>

真剣で私に恋しなさい！～古き皇帝～【永久凍結】

2011年7月25日01時01分発行